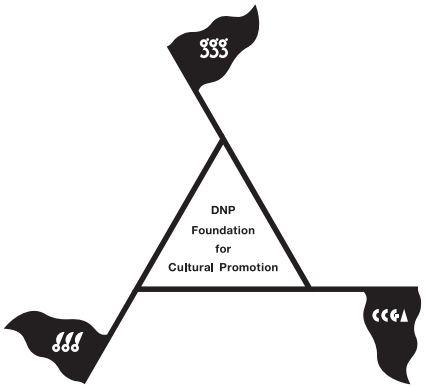
# Graphic Art & Design Annual 09-10

DNP Foundation for Cultural Promotion

# Graphic Art & Design Annual 09-10



［表紙デザイン］

### 物語る飛行物体

引き出しを整理していたら、
私が若い頃撮影したルネ・マグリット風な写真（35mm）が出てきました。
直立不動で遠くを見ているミステリアスな後ろ姿の男の写真を、
じっと見ていたら様々なイメージが目に浮かび、
写真の上部に、得体が知れない飛行物体のような形をあしらい、
今の時代を表現したいと思いました。
そして、私が思っている物語り的なデザインが伝わると嬉しいです。

細谷 巌　アートディレクター、グラフィックデザイナー

［Cover Design］

### Story-telling Flying Object

When I was cleaning out my desk drawers,
I happened upon a photograph (35mm) I had taken when I was young in the style of René Magritte.
It was a photo of a man standing stiffly at attention,
viewed from behind, mysteriously gazing off into the distance.
Looking at it, a variety of images came into my mind.
I decided to add an unidentifiable flying object at the top of the photo, to express our current times.
I hope the story-like design I had in mind was conveyed to the viewer.

Gan Hosoya, Art Director & Graphic Designer


## Graphic Art & Design Annual 09-10
## ggg ddd CCGA

Publication: DNP Foundation for Cultural Promotion
DNP Ginza Building, 7-7-2 Ginza,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 5568 8224
Planning & Editing: ginza graphic gallery
Art Direction: Shin Matsunaga
Design: Shinjiro Matsunaga, Moemi Kiyokawa
Photography: Mitsumasa Fujitsuka (ggg), Ryota Sakai (gallery talk)
Translation: Rei Muroji, Office Miyazaki Inc.
Cooperation: Shoji Usuda, Koichi Kawajiri
Printing & Binding: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

# Contents

目次


はじめに — 5
北島 義俊（DNP文化振興財団理事長）

序論 — 6
「グラフィックデザインの過去と現在、そして未来」
勝井三雄（グラフィックデザイナー）

**1 展示事業** — 11
ギンザ・グラフィック・ギャラリー（ggg）2009−2010 — 12
dddギャラリー 2009−2010 — 36
CCGA現代グラフィックアートセンター 2009 — 44

**2 教育・普及事業** — 53
ggg, dddギャラリートーク — 54
出版活動 — 67

**3 アーカイブ事業** — 69
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ — 70
花開くグラフィックス　佐藤晃一ポスター展 — 73

**4 国際交流事業** — 75
AGI日本会員事務局　支援活動 — 76
2009ADC展 ドイツ・フランクフルト巡回 — 78

**5 研究助成事業** — 81
「研究助成に期待すること」 — 82
広本伸幸（アート・アドバイザー、桜美林大学講師）
2009−10年度助成実績 — 84

展覧会概要 — 85
展覧会一覧 — 90
ギャラリー概要 — 96

Foreword — 5
Yoshitoshi Kitajima (Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion)

Introduction — 6
The Past, Present and *Future* of Graphic Design
Mitsuo Katsui (Graphic Designer)

**1 Exhibitions** — 11
ginza graphic gallery (ggg) 2009−2010 — 12
ddd gallery 2009−2010 — 36
Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) 2009 — 44

**2 Education & Enlightenment** — 53
ggg, ddd Gallery Talk — 54
Publications 2009−2010 — 67

**3 Archiving** — 69
DNP Graphic Design Archives — 70
Graphics in Bloom: Koichi Sato Poster Exhibition — 73

**4 International Exchange** — 75
Support of AGI Japan Membership Secretariat — 76
2009 Tokyo Art Directors Club Awards Exhibition in Frankfurt — 78

**5 Research Support** — 81
Aspirations for Research Funding — 82
Nobuyuki Hiromoto (Art Advisor & Lecturer at J.F.Obirin University)
2009-2010 Financial Support Activities — 84

Review of ggg, ddd and CCGA 2009−2010 — 85
List of Exhibitions 1986−2010 — 90
Galleries' General Information — 96

# Foreword

## はじめに

2009年4月から2010年3月までのギンザ・グラフィック・ギャラリー（ggg）は、「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 田中一光ポスター1953-1979」をはじめ、11回の企画展を開催いたしました。また、dddギャラリーでは5回の企画展を、現代グラフィックアートセンター（CCGA）では、3回の収蔵品展を開催いたしました。
なかでもgggの第282回企画展「広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり」では、マス広告の全盛期をかけぬけた雑誌『広告批評』の30年間の軌跡を振り返り、ウェブとの連携時代を迎えたこれからの広告や批評のあり方を模索し、高い評価をいただきました。
また、DNP文化振興財団では、アーカイブ事業として昨年7月、福田繁雄氏のご遺族より全ポスターをご寄贈いただき、今年3月、氏を追悼して「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング」を開催いたしました。

国際交流事業としては、昨年6月、国際グラフィック連盟（AGI）の日本会員事務局支援活動を開始し、海外と日本のグラフィックデザイン界の円滑なコミュニケーションを支援しました。

来年はgggがオープンしてから25年目を迎えます。今こうしてDNP文化振興財団として、グラフィックアートやデザインの芸術文化活動を推進できますのも、多くの皆様のご支援をいただきながらここまで歩んで来られたお陰と深く感謝しております。
今後とも、皆様の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。

DNP文化振興財団 理事長
北島 義俊

In fiscal 2009 – the year spanning from April 2009 through March 2010 – ginza graphic gallery (ggg) held a total of 11 exhibitions, a particular highlight being “DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ: Ikko Tanaka Posters 1953-1979.” Five exhibitions took place at ddd gallery, and the Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) mounted three exhibitions of collected works.
Garnering especially high acclaim this year was ggg’s 282nd exhibition: “*Kokoku Hihyo:* End of One Era, Start of Another.” This exhibition took a retrospective look at the 30-year history of *Kokoku Hihyo*, a magazine that critiqued mass-media advertising during its golden age; it also probed the future of advertising and ad criticism in the new era of online communications.
In archiving activities, the past year was notable for receipt by the DNP Foundation for Cultural Promotion in July 2009 of the complete poster collection of the late Shigeo Fukuda (1932-2009), generously donated by his family. To honor Mr. Fukuda’s memory, in March 2010 ggg organized the exhibit “DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ: Shigeo Fukuda’s Visual Jumping.”

In the area of international exchanges, in June 2009 activities were launched to support the Japanese office for local members of Alliance Graphique Internationale (AGI). Activities focus on supporting smooth communication between graphic designers in Japan and their overseas counterparts.

Next year ggg will celebrate its 25th year in operation. The DNP Foundation for Cultural Promotion wishes to express its profound appreciation to the many individuals and organizations whose generous support has enabled this sustained promotion of artistic and cultural activities in the realms of graphic art and design.
We cordially ask for your continuing support and understanding in the years ahead.

Yoshitoshi Kitajima
Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion

# グラフィックデザインの過去と現在、そして未来

勝井 三雄
グラフィックデザイナー

デザインの課題は、その時代の情報環境におけるコミュニケーション関係を、いかによりよいものに改善していけるかを模索した上で、表現で最適な答えを提示することです。グラフィックデザイナーはこれまで、主に企業との関わりの中で、様々な問題に対する解決策を見い出してきました。それこそが我々が誇りにすべき職能なのです。

しかし現代の情報環境は、急激なデジタル化によるメディアの多様化を受け、混沌とした状態にあると言えるでしょう。社会的にも、グロバール化及びサステナブル化といった新たな課題が生じています。我々はいま、そういった社会ニーズを汲み取った上で、新しい視点を獲得する必要に迫られているのです。“グラフィックデザイン”というものの在り方を、自らが社会の一員としてポジショニングし直し、現代の問題に対していかなるアプローチができるかを考える時期が来ています。

現役のデザイナーは、時代と自らの職能の関わり方を真摯に見つめなければなりません。これまでもデザインはそういった営為の中で進歩してきたのです。しかし、現代を考えるには、未来に対する問題意識を共有する必要があります。その一方で、過去の技術は巨大な知恵のプールでもあります。つまり、「過去を語ることでしか、未来を語ることはできない」のです。

歴史をひもとくと、デザインの原点には中世の印刷や版画技術の存在があります。それぞれの文化に根ざした多様な印刷技術と制作物が、人々の美意識を育ててきました。しかし18世紀以降、産業革命による新しい技術の導入による大量生産・大量消費の時代が幕を開けるとともに、だれもが政治や経済の問題に直面せざるを得なくなってきます。そして20世紀に入ると、それまでに育まれた美的価値観と産業的ニーズがクロスし、そこに近代デザインの領域が誕生したのです。さらにシルクスクリーンやオフセット印刷といった新しい技術が加わることで、グラフィックデザインというコミュニケーションフィールドは成熟していきました。

私自身の過去を振り返ると、50〜60年代はまさしく日本におけるデザインの創成期で、当時は我々の仕事に対する社会的認知はそれほど高くありませんでした。デザイナーという職能の重要性は、主にファッションの世界で認識されていたくらいで、書籍をデザインするにしても装丁や表紙くらいしか仕事を任されない時代が長く続いたのです。本文の字組やレイアウト、アイコンの作成、素材の選定などもデザイナーの職分であるという考え方自体は20世紀の前半からあったものですが、我が国ではそういったヴィジョンもこの頃からようやく定着し始めました。

当時、日本経済はうなぎ上りの状態でした。あらゆる新製品を世界に輸出しようとしていたのです。私も含めたグラフィックデザイナーたちは、企業の要請に応える一方で、音楽や舞踏、映画等の領域とコラボレートしながら新しい表現の可能性を追求していました。ところが70年代のオイルショックの前あたりから、世の中に少し陰りが見えはじめました。高度成長期が終わり、企業は社会や世界との関係性の中で自らの価値を捉え直す必要に迫られたのです。そしてコンシューマーを意識したり、企業姿勢を伝えるようなコミュニケーションを積極的に打ち出すようになります。その結果、80年代には広告の世界が花開きました。数々の個性的なPR誌が発行されたり、メセナ活動が活発に行われたのもこの時代です。モード消費者社会の進行による価値観の多様化を受け、グラフィックデザインの世界でも、60年代以降の独自の文化領域での交流が実を結ぶこととなりました。

90年代半ばから経済は長い停滞期に入りますが、その一方でデジタル技術は飛躍的に普及し、高度情報化社会が現実のものとなります。私自身は、60年代初頭に今の情報社会を意識したウイナーの『サイバネティクス入門』という書籍に出会い、いまでは当たり前になっている「レイヤー」という考え方に着目し、そういった「概念としての構造」を扱うことがデザインの計画であるという考えに基づいて制作にコンピュータを取り入れていたのですが、よもやこれほどの速度でデジタル化が進むとは想像もできませんでした。

一番の驚きは、表現によってコミュニケーションを生み出す行為を、いまやすべての人が簡単にこなせるようになったことです。そのためにデザインという行為は、“ものを創ることそのもの”を指すようになってしまいました。現在では、ものを創りさえすれば、アウトプットの完成度は要求されないという風潮さえ生まれています。ですから、最初にお話ししたように、「問題を発見し解決するためのもの創り」と

いうデザイン活動の本質に目を向けていかないと、今後グラフィックデザインが衰退してしまうということにもなりかねないのです。

JAGDAではヴィジョン委員会を立ち上げ、会員へのアンケートを実施しました。グラフィックデザインが未来に進むべき方向性を明確化し、全会員の意識として共有するためです。このアンケートの結果、現代のデザイナーが取り組むべき問題が浮き彫りになりました。いまの人々は、企業の一員であると同時に、地域社会の一員であり、環境や教育関連の活動、ボランティアを積極的に行うなど、一個人が様々な集団に所属しながら生活を営んでいます。それゆえにデザインと企業との関わりは、かつてに比べて希薄化している傾向が見受けられ、グラフィックデザイナーはより多層化した社会に向き合うことを求められているのです。

もちろん、都市部と地方では温度差もあります。都会は企業や人口が多いぶん、そういった面でのニーズと直接対峙している部分がまだ色濃くあります。一方地方コミュニティは、その地域の抱える過疎や環境破壊などの問題に直面しているため、志があれば社会性の高い仕事が形になりやすいという側面があります。

現代デザインの真髄は、情報を含めた自然態と共に呼吸することであり、生活と共生するデザインでなくてはならないと私は考えています。周囲には膨大な量の情報が溢れていますが、たとえば育児といった人間の根本的な営みには、情報だけで対処することはできません。ですからグラフィックデザイナーは、五感を伴う人間のリアリティに、血の通った表現でアプローチする努力を積み重ねていくことが大切なのです。

ギンザ・グラフィック・ギャラリーは、そういった“ものづくり”をサポートし、その意義と価値を広く社会に伝える「世界のデザインミュージアム」であり続けてほしいと願います。歴史上の素晴らしい発見や創作は、それにふさわしい環境から生まれるものです。それと同時に、先ほどお話ししたように、デザインの過去を俯瞰することは、未来を見据えいまに対峙するために重要ですから、そういった企画も積極的に取りあげていただきたい。

しかしその際に、「いま」に向かいあった過去の作品を、ただ“額装”して出せばいいかと言えばそうではないと私は思うのです。ポスターの美意識は時代や当時の文化と切り離して理解することはできませんから、デザインを展示するには、その時代の「時」と「空間」を現代の社会に同調させることが重要です。つまり、作品の背景とその関係性を同時に語る努力が必要とされます。そこに「過去を語ることでしか、未来を語ることはできない」という言葉の真意があるのです。

（聞き手・テキスト／河尻亨一）

# The Past, Present and *Future* of Graphic Design

**Mitsuo Katsui**
Graphic Designer

The task of design is to probe how to enhance communication relationships within the information environment of the given times, and then to offer up the most appropriate responses through creative expression. Until now, graphic designers have sought the solutions to their various questions mainly within their involvements with business corporations – and this indeed is a role we should be proud of.

Today, however, with the media having diversified as a result of the dramatic shift to digital technology, the information environment has become chaotic. Socially also, new topics have arisen such as globalization and sustainability. We are thus now pressed by the need to acquire new perspectives based on an understanding of such social demands. The time has come for us to rethink our position toward "graphic design" as a member of society, and to mull how we can address the contemporary issues before us.

Contemporary designers must take an earnest look at how their professional role relates to the times. Even before now, design has moved forward while performing this very task. But when mulling the current times, it is necessary also to possess a conscious awareness directed toward the future. At the same time, technologies developed in the past constitute a vast pool of wisdom. In short, it is impossible to talk about the future without speaking about the past.

A look back in history reveals that the origin of design was linked to medieval printing and print techniques. Through the years diverse printing techniques and production works, each rooted in their specific culture, have nurtured the human sense of beauty. But starting in the 18th century, in tandem with the dawning of the age of mass production and mass consumption arising from the introduction of new technologies that emerged from the Industrial Revolution, people everywhere inevitably came to confront issues relating to political and economic events. With the coming of the 20th century, the sense of aesthetic values cultivated until that time melded with industrial needs, thus giving birth to the field of modern design. Then, with the addition of new technologies such as silkscreen and offset printing, graphic design matured as a field of communication.

A retrospective look at my own past shows that the 1950s and '60s were precisely the dawn of creation in the realm of Japanese design, a time when our recognition of the social significance of our work was not very strong. It was only in the world of fashion that the importance of the design profession was fully recognized, and even in the realm of book design, for a long time the only work left in our hands was designing the binding and cover. Composition and layout of the main text, production of icons, selection of materials, etc. were recognized to be within the designer's prerogative as early as the first half of the 20th century, but in Japan it was only around the 1950s and '60s that this notion finally began to become widely accepted.

In those days, the Japanese economy was just taking off. The country was on the threshold of exporting new products of every description to the entire world. Graphic designers, myself included, while on the one hand responding to the demands of corporate clients, were also probing new possibilities in creative expression in collaboration with people in such fields as music, dance and film. From just prior to the oil shocks of the 1970s, though, a shadow of gloom began appearing on the horizon. As the period of the nation's high-paced growth drew to a close, the corporate sector became pressed with the need to rethink its value in terms of its relevance to society and the world at large. This phase of reflection led to new forays by business into communication with a conscious focus on the consumer and communication conveying a corporate stance – resulting in the full blossoming of the realm of advertising during the 1980s. This was a decade that saw the launch of a wealth of unique PR magazines and robust activities in corporate philanthropy. Along with diversification in values stemming from advances by a consumer society, within the realm of graphic design also the unique exchanges in cultural realms inaugurated during the 1960s began bearing fruit.

In the mid-1990s the economy entered a lengthy period of stagnation, but with dramatic leaps in digital technology the information-intensive society became a reality. I personally became conscious of an information-based society early in the 1960s when I encountered Norbert Wiener's *Cybernetics*. I focused on his theory of "layers" – today so widely accepted – and based on the belief that dealing with structures as concepts would serve in planning designs, I began using a computer to create my work. Never in my wildest dreams, though, did I ever think the shift to digital technology would happen as fast as it has.

What surprises me most is how today it has become so simple for anyone to engage in the act of communicating through creative expression. As a result the act of designing has come to signify the act of creation itself. Today there is even a tendency not to demand a high level of achievement in the output so long as one is creative. As such, if one ceases to focus on the essence of the act of designing – finding a problem and then creating something in order to solve that problem – graphic design could conceivably go into decline in the years ahead.

JAGDA launched a "Vision Committee" and conducted a survey of its

members. The aims were to clarify the directions in which graphic design should proceed in the future and to have all members share a common awareness. The survey results brought into relief the issues that contemporary designers should address. People today each pursue their lives while belonging to various groups: simultaneous with their being a member of a company, they are also a member of their local community and they proactively participate in environmental and education activities and do volunteer work. As a result the connection between design and business enterprise tends to be weaker than before, and graphic designers are demanded to confront a more multi-layered society.

There is, of course, a difference between the urban and regional settings in the degrees to which this is so. In the big cities, given the large number of corporations and population size, needs of this kind are still largely addressed directly. In rural communities, because they face specific problems such as depopulation and environmental destruction, those who wish to can more readily do work that is more socially oriented.

I believe that the essence of contemporary design consists of responding in tandem with the natural state, including information; it must be design that coexists with everyday life. We are surrounded by enormous quantities of information, but information alone is not enough for us to carry out the fundamental tasks of life such as child-rearing. It is important therefore for the graphic designer to make ongoing efforts to approach human reality, arising in tandem with our five senses, using creative expression with a heart.

My hope is for ginza graphic gallery to support such creative endeavors and to continue functioning as a museum of global design that conveys the significance and value of such endeavors broadly to society. The outstanding discoveries and creations in history are born from an environment that is appropriate to them. At the same time, as I discussed above, gaining a bird's-eye view of the history of design is important for addressing the present with an eye on the future, and as such I hope ggg will continue proactively putting together projects of this nature.

In doing so, however, I do not think it suffices simply to put works of the past in frames set face-to-face against what is current now. It is impossible to understand the aesthetic sense behind a poster without simultaneously considering the time frame and culture in which it was made, and for this reason it is important when displaying a design to also bring its "time" and "space" into alignment with contemporary society – in other words, to strive to simultaneously convey its background and relevance to it. It is here that the truth emerges when we say that the only way of speaking about the future is by discussing the past.

Interview and Text by Koichi Kawajiri

1

# 展示事業

Exhibitions

## ginza graphic gallery 09-10

April 3–25, 2009
**Tokyo Type Directors Club Exhibition 2009**

May 8–30, 2009
**Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works**

June 5–29, 2009
**Max Huber - a Graphic Designer**

July 6–29, 2009
**2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition**

August 4–27, 2009
**Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer**

September 2–29, 2009
**Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show**

October 5–28, 2009
**Toshio Yamagata Exhibition**

November 4–28, 2009
**Issay Kitagawa**

December 3–24, 2009
***Kokoku Hihyo:* End of One Era, Start of Another**

January 12–February 25, 2010
**DNP Graphic Design Archives Collection II**
**Ikko Tanaka Posters 1953–1979**

March 4–27, 2010
**DNP Graphic Design Archives Collection III**
**Shigeo Fukuda's Visual Jumping**

09
ADC
ADC
09
ADC
ADC
ADC
ADC
333
ADC

# Tokyo Type Directors Club Exhibition 2009

April 3 – 25, 2009

## 09 TDC展

「TDC賞2009」の国内外約3000の応募作品から158点を展示した。TDC賞の「風景」としての圧巻は審査会だ。国籍もキャリアもコンテクストも異なる膨大な作品が並ぶ。そのエネルギーを展覧会でも伝えたいと考え、密度の高い展示方法をとっている。ある巨匠の作品と無名の若者の実験作品を隙間なく並べると互いに響き合っていることに気づく。「始まりの力」のようなものが（何周まわりであれ）そこにあるのではないかと感じた。この年のグランプリは中村勇吾氏＋THA。インタラクティブデザイン部門からの受賞だ。彼らを招き共に活動する魅力は、新しいメディアを牽引し、デザインを拓いてきたその強さにある。これも「始まり」のエネルギーなのかもしれない。

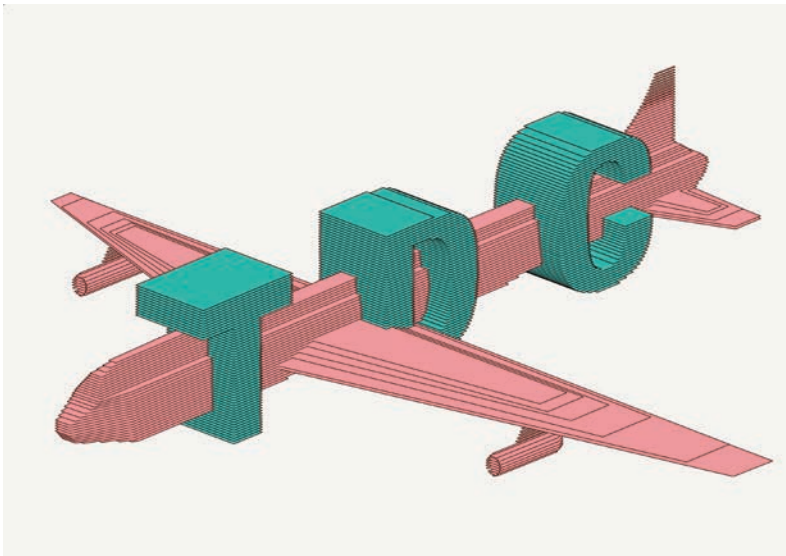
照沼太佳子（東京TDC）

This exhibition showed 158 of the roughly 3,000 entries submitted worldwide in the 2009 Tokyo TDC Awards competition. A highlight in terms of presenting a scenic overview of the awards was the judging session, where a huge number of works – by artists of all different nationalities, careers and contexts – were on display together. We wanted to convey that energy in the exhibition too, which led to the use of a highly dense display method. Juxtaposing a work by an acclaimed master alongside an experimental work by a young unknown artist, we find, results in both works impacting the other. We felt here resides a “power of beginning” (no matter what the number of rounds). In 2009 the Grand Prix was awarded to Yugo Nakamura + THA for their work in the Interactive Design category. The appeal of inviting them and working with them is the power with which they have played a leading role in a new medium and opened up new possibilities in design. This too may be the energy of “beginning.”

Takako Terunuma (Tokyo TDC)

1. Yugo Nakamura + THA
2. Norio Nakamura
3. Les Suen
4-6. Fumio Tachibana

1



2

3

4

5

6

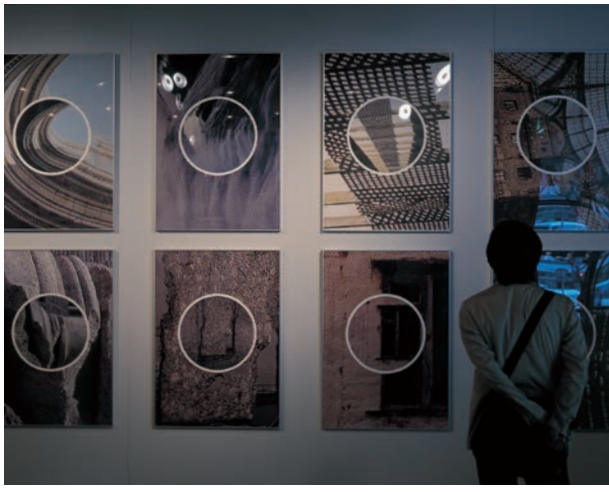
# Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works

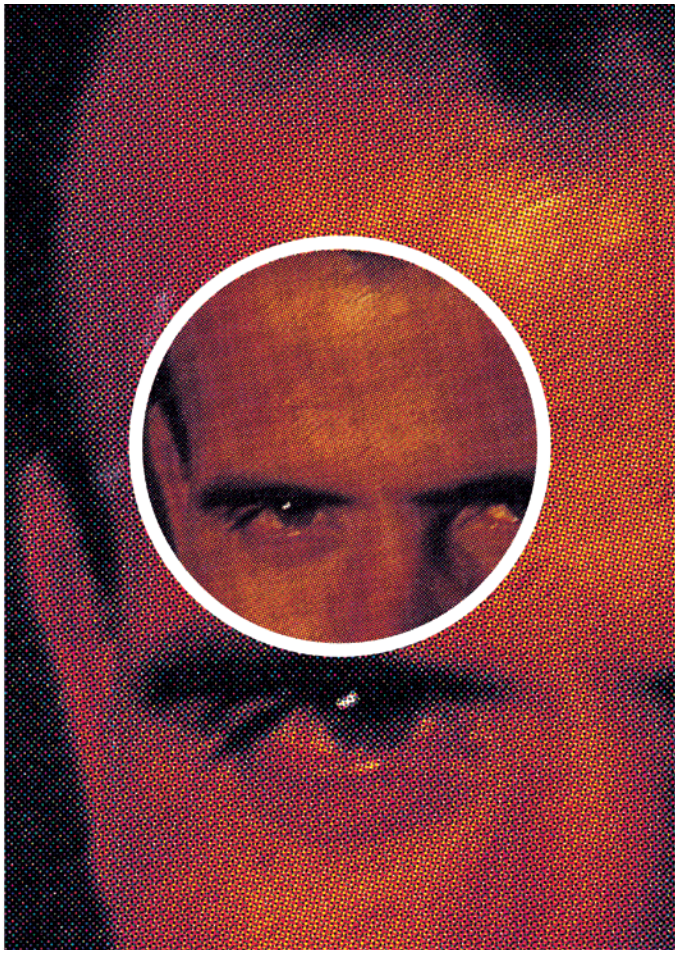
**May 8–30, 2009**

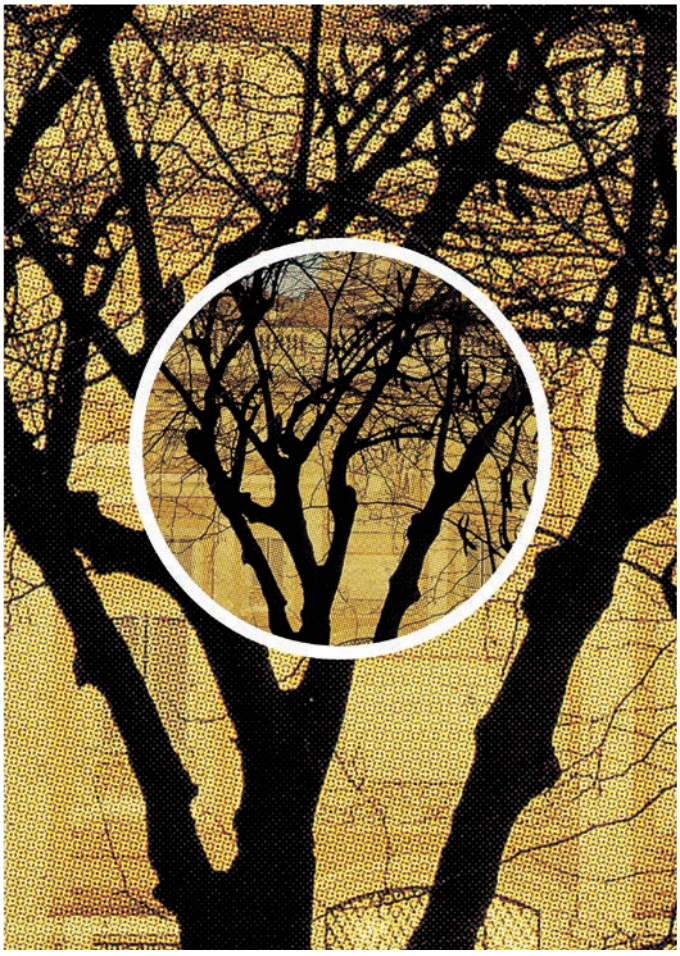
## 矢萩喜從郎展［Magnetic Vision／新作100点］

目の前の対象を知覚すること自体、眼球が目まぐるしく移動する「眼振」に依って、無数に断片の映像が累積されてはじめて得られるものだという。その意味で、「眼振」が、我々の「見ること」の理解を複雑にすることだけは確かだろう。けれども、わたしが、永々と視覚世界の謎解きをしてきた中で、「眼振」がヒントになって、多視点の思考を浮かび上がらせることができ、そしてまた、多中心の思考にも巡り会えた気がする。そう考えられることで、この謎解きのトライアルが、生きている間には解けない挑戦であったとしても、実に有意義な探求の旅を続けていると言えそうである。　矢萩喜從郎

Our visual perception of objects is said to derive from the accumulation of innumerable fragmentary images captured by the continuous movements of our eyeballs. Such movements thus undoubtedly complicate our understanding of the process of seeing. For a great many years, however, I have sought to unravel the mystery of our visual world; and taking a hint from these involuntary eye movements I think I have been able to shed light on multi-perspective thinking and chanced upon multi-central thinking, too. Even if my attempts at unraveling this mystery ultimately fail to achieve their goal during my lifetime, I still believe my ongoing journey of quest is a very meaningful one.　Kijuro Yahagi







# Max Huber – a Graphic Designer

**June 5–29, 2009**

## マックス・フーバー展

2009年6月5日展覧会開催の知らせをgggから受けたのは2008年夏のこと。その日は偶然にもマックスの誕生日、もし生きていたら90歳になる日だったが……日本、イタリア、スイスと「デザイン」という世界の中でこれまで暮らして来たが、その中でも彼の個展が半世紀ぶりに日本でまた実現されたという喜びは大きかった。

gggの手際の良さと丸山新さんのグラフィックの腕によりマックスという素材が料理され素晴らしいお皿にもられたわけだが、訪れた方々がどんな想いで何を食して下さったものかと思いが馳せる。

ggg前にフクシア色の旗が靡いて美しかった初夏のギンザは忘れられない。

ありがとうございました。　　葵・フーバー・河野

It was in the summer of 2008 that I learned of ggg's intention to hold an exhibition of Max's works starting June 5, 2009. By coincidence, the exhibition opening was Max's birthday. If he were alive, he would have been turning 90.

My life in the realm of design began in Japan and has taken me to Italy and Switzerland, and holding a one-man show of Max's works in Japan for the first time in half a century gave me great pleasure. Thanks to the excellent execution skills of ggg and the brilliant graphic work of Arata Maruyama, the "ingredients" of Max Huber were lusciously prepared and served on a fantastic platter, and I wonder how the show's visitors enjoyed their fare. The fuchsia banners fluttering in front of ggg were beautiful. Early summer in the Ginza was unforgettable. Thank you so much.

Aoi Huber-Kono

Borsalino
Arti Grafiche F.LLI PIROVANO - MILANO

Gran premio
dell' Autodromo
17 ottobre 1948
Monza
ABBINATO ALLA
LOTTERIA ITALIA

coppa la Rinascente - Upim
domenica mattina 6 luglio
premi per 500.000 lire
Milano Legnano Saronno Fino Mornasco Como Ponte S. Pietro Trezzo d'Adda Vimercate Monza Milano
per dilettanti di 1ª e 2ª categoria
CRAL Rinascente-Upim

7
congrès international
d'architecture
moderne
22-31 juillet 1949
ciam
bergamo
palazzo della ragione

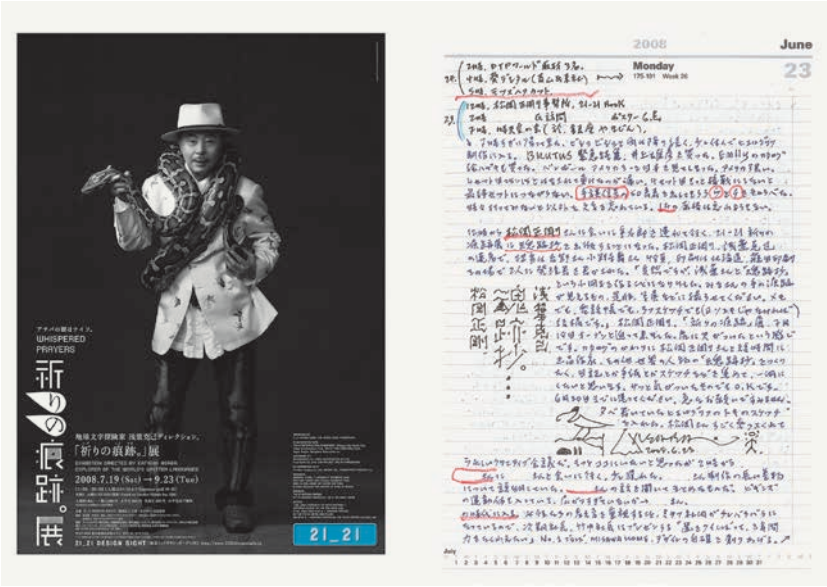
# 2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition

**July 6–29, 2009**

## 2009 ADC展

百年に一度といわれる大恐慌の時代に、広告はやはり逆らうことはできないのだろう。広告出稿量の減少は、質の面でも顕著にあらわれたようだ。アドバタイジングとグラフィック、という大きくふたつのジャンルから成る東京ADCは、こんな時頼もしい。広告が弱いと、グラフィックががんばるのだ。浅葉克己さんのグランプリに代表されるように、グラフィックは元気に輝いていた。いやはや、古希を迎える浅葉さんの健在ぶりに、皆が拍手した。そして、世の中がどんなに沈滞しても、アートディレクターの領域は深く静かに進化しており、そのすべての中心にあるものは、デザイン力である。デザインの力で社会を変える。デザインの力で社会を作る。それが東京ADCの担う役割りだと思う。　副田高行（ADC展委員）

In these economically depressed times, advertising cannot buck the trend. Besides a downturn in the number of ads, the quality of advertising has suffered noticeably too. But the Tokyo ADC, encompassing advertising and graphic, offers reassurance. When advertising flags, graphics pull their weight all the more. Such was the case in 2009, as illustrated by Katsumi Asaba's brilliant graphic winning the Grand Prix. The realm of the art director continues to evolve without fanfare, all centered on the power of design. The power of design can change society. The power of design can *make* society. This, I believe, is the role played by the Tokyo ADC.　Takayuki Soeda (Tokyo ADC Exhibition Committee Member)




1

2

3

1. Katsumi Asaba
2. Masayoshi Nakajo
3. Aoshi Kudo
4. Shobun Nakashima

4

# Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer

August 4–27, 2009

［ラストショウ］細谷巖アートディレクション展

展覧会のタイトルを「LAST SHOW」にした訳は、1階に展示した作品が以前に他の会場や本、雑誌などに何度も展示、紹介されたものですから、この個展でお見せすることを最後にしようと思ったからです。地階には私が長年、デザイン（広告）の仕事をしてきたおりに語ったり、思ったことを記した文を印刷物、メモ用紙から掬いあげ、ビジュアルにした新作（48点）を展示しました。1点1点が独立した作品ですが鎖の環のように、それぞれの作品が連なっています。そして、1階と地階を通して見ると2つの階の作品は鏡を合わせたようになり、私のグラフィックデザインの発想をイメージすることができます。（辞書を見ると、LAST①＝最後の、最終の、ですがLAST②＝続く、存続する、とあります。）

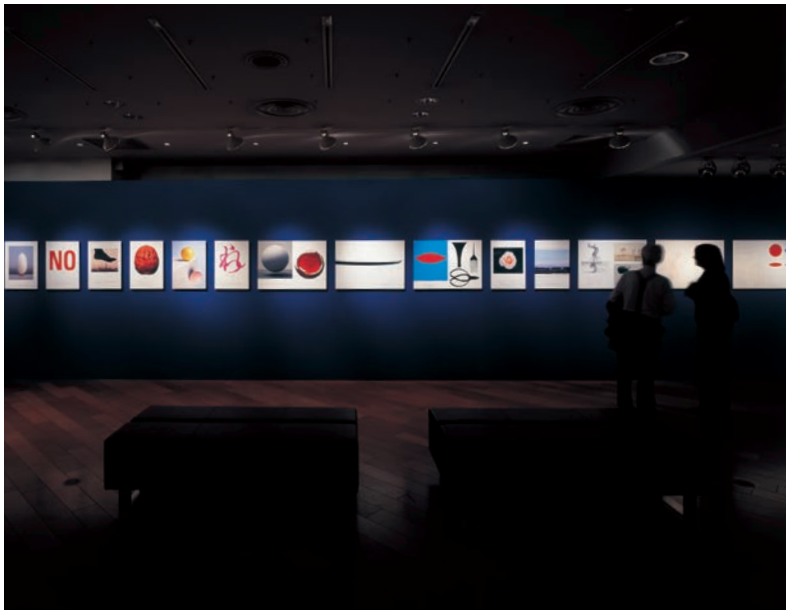
細谷 巖

The reason I chose the title “Last Show” is because the works displayed on the ground floor I had previously shown any number of times at other venues, in books and magazines, etc., and I thought I would make this their final outing.
On the basement, I displayed 48 visuals incorporating things I had said or thought during my many years of work in advertising design, all gleaned from publications and my own memos.
Each visual was an independent work but I linked them together like a chain. Taken together, the works on the two floors acted like a set of mirrors enabling the viewer to see the thinking behind my graphic design work.

Gan Hosoya

NO

hosoya gan
LAST SHOW
hosoya gan
LAST SHOW


NO

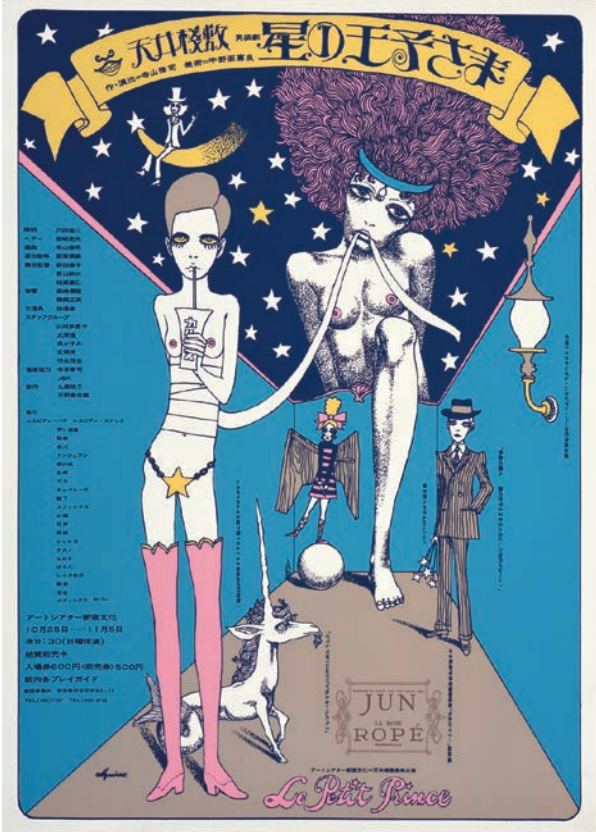
# Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show

**September 2–29, 2009**

## 銀座界隈隈ガヤガヤ青春ショー　～言い出しっぺ　横尾忠則～
## 灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則　4人展

灘本唯人の務める「早川デザイン事務所」、和田誠のいた「ライトパブリシテイ」、横尾忠則とぼくのいた「日本デザインセンター」、そのあと横尾とぼくと、原田維夫でつくった共同スタジオの「イルフイル」は、'60年代の銀座にあった。
よく顔を合わせていたぼくたちが発信して、'65年には「東京イラストレーターズ・クラブ」という創造的な作家団体を結成した。30代前後のぼくたちの年齢を考えると、正しい用語法からは外れるかもしれないけれど、あの頃の毎日の精神の高揚感は、たしかに青春といえるようなものだった。今度の展覧会の発想をしたのは横尾忠則だったが、このタイトルは奇妙に的を射た傑作だと思う。　宇野亜喜良

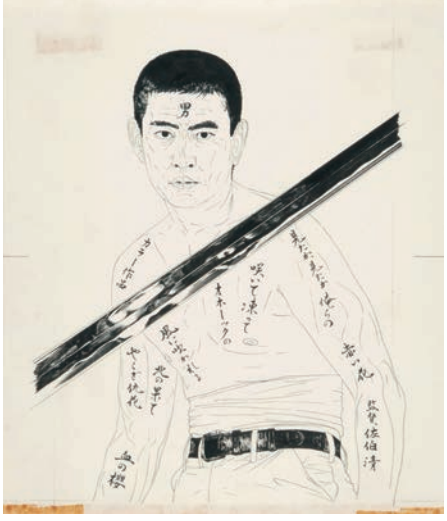
Hayakawa Design Office where Tadahito Nadamoto worked, Light Publicity where Makoto Wada worked, Nippon Design Center where Tadanori Yokoo and I worked, and Ilfil, the joint studio later founded by Yokoo, me and Tsunao Harada, were all located in the Ginza during the 1960s.
In 1965 all of us, acquaintances through our work, instigated the launch of the Tokyo Illustrators Club, an organization of creative artists. We were in the "heydays of our youth," so great was the mental excitement we felt daily in those days – even if such terminology is perhaps inaccurate given that we were already mostly in our thirties at the time. It was Tadanori Yokoo who came up with the idea to hold this exhibition and who created its weirdly masterful Japanese title so perfectly on target, loosely translatable as "The Ginza Area Clamorously Boisterous Youth Show."
Akira Uno




1

2

3



4

1. Akira Uno
2. Makoto Wada
3. Tadahito Nadamoto
4. Tadanori Yokoo

# Toshio Yamagata Exhibition

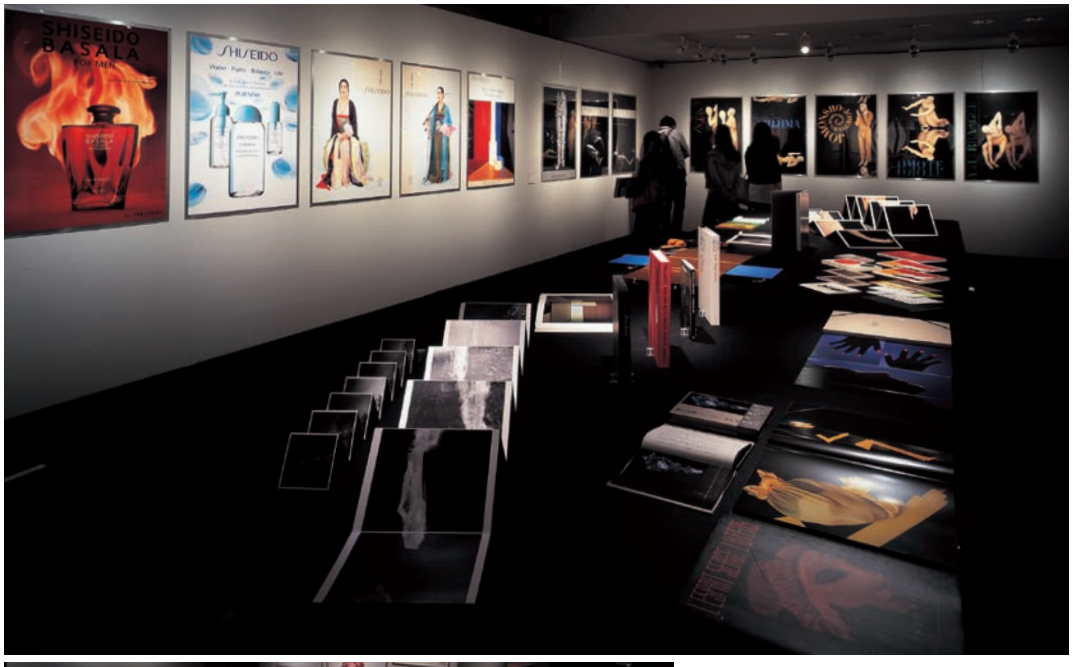
October 5–28, 2009

## 山形季央展

展覧会はデザインに対する提言と考えていた。デザインをコミュニケーションやインフォメーションの仕事と捉えているので、自分なりにその未来を示すべきだと考えた。しかしその前に、『デザイナーとして何をテーマにしてきたか』考えざるを得なくなった。企業のためのデザインやブックデザインなど様々な活動をしてきたが、『<顔>を巡るデザイン』であったことに気づいた。すべてものには『顔』があり、それをテーマにすることは、コミュニケーションを捉える良い機会になると考えた。未来というより、本質を探るプロセスを持てたことが、私にとって最大の収穫であった。　山形季央

I thought of an exhibition as a chance to offer up a suggestion about design. Because I see design as work involving communication and information, I believed I should point the way, in my own way, toward its future. First, though, I had to think about what I had chosen as my themes as a designer. I had been active in various areas – designing for corporations, book design, etc. – and I came to realize such design was about “faces.” Everything has a “face,” and I believed that using this as my theme would be a good opportunity to deal with communication. More than the future, having a process to probe the essence of design was for me the biggest harvest I reaped.

Toshio Yamagata


SHISEIDO
BASALA
SHISEIDO

# Issay Kitagawa

**November 4–28, 2009**

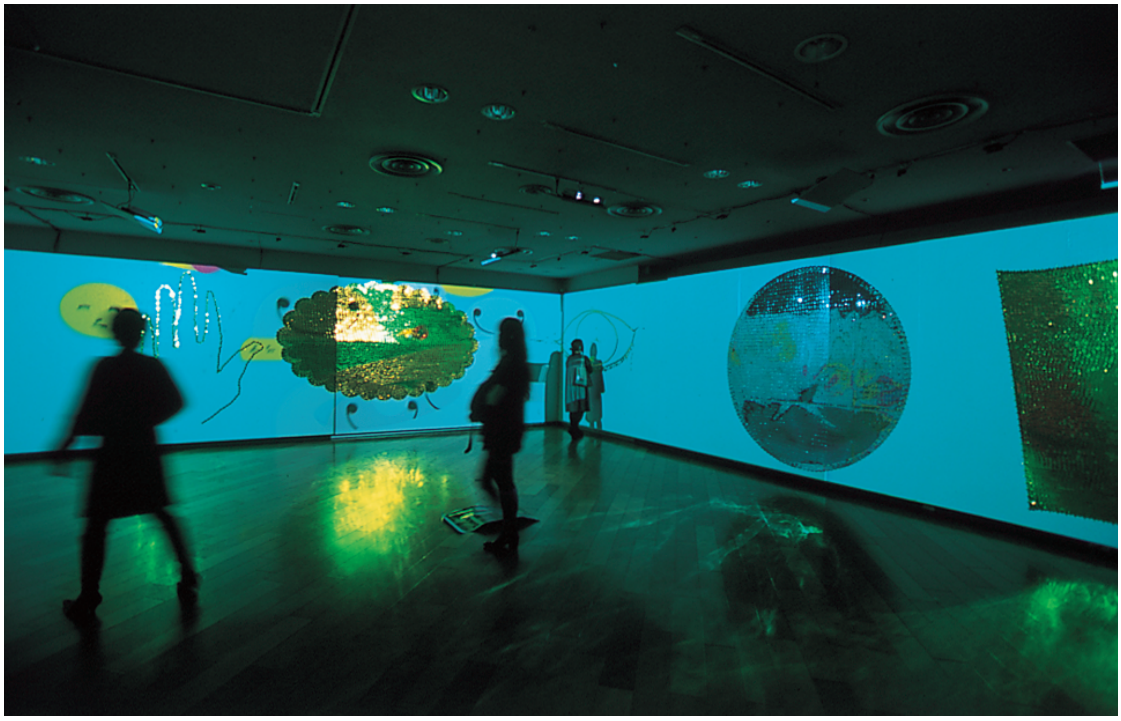
## 北川一成

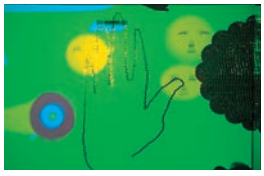
なぜ、本展は「北川一成展」ではなく「北川一成」なのか。皆さんは、このように“展”が有るのと無いのとではどのような違いを感じますか?
私が“展”の無い「北川一成」とした理由は、具体的に私を指す以外に、私を取り巻く存在や関係がより一層概念的にかつ謎めいて示唆されていくのではないかと思ったからです。英語でいう名詞に「a」がつくか「the」がつくかで意味が違うということに似ていると思います。
本展は相互作用な場であり「私であり私でもない」のです。
そういう思考がこの展覧会名にこめられています。

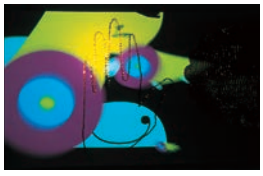
北川一成

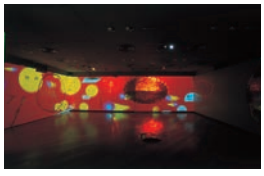
Why was this show titled “Issay Kitagawa” and not “Issay Kitagawa Exhibition”? What kind of difference do you sense between when the word “exhibition” is included or not? The reason I called it just “Issay Kitagawa” is because I thought that besides indicating me specifically, titling the exhibition this way would more conceptually and mysteriously hint at the beings and relationships surrounding me. I think this is similar to the difference in meaning in English whether one prefaces a noun by “a” or “the.” This exhibition was a place of interaction – it was “me” and yet not “me.” This is what I had in mind by titling it this way.

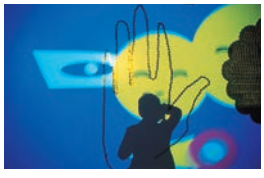
Issay Kitagawa











# *Kokoku Hihyo:* End of One Era, Start of Another

**December 3–24, 2009**

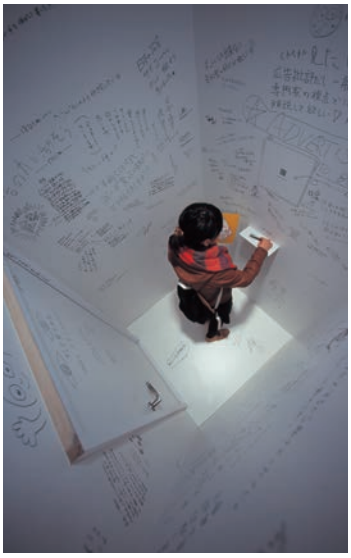
## 広告批評展　ひとつの時代の終わりと始まり

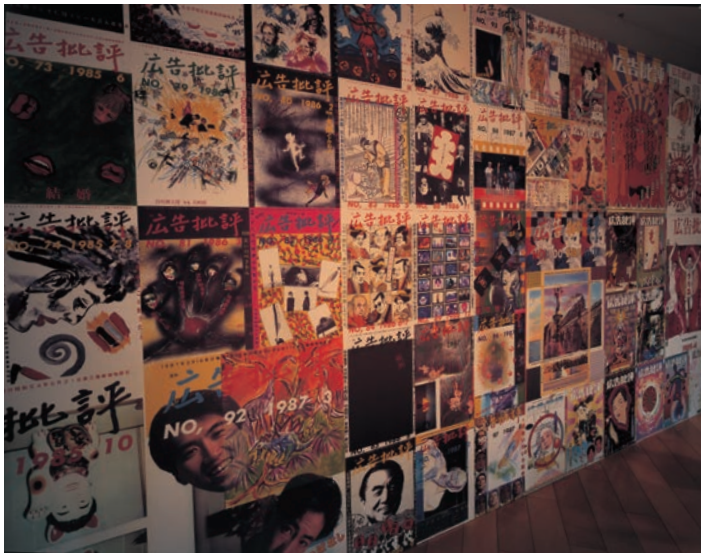
雑誌の展覧会なんてうまくいくのかなあ、と思っていたら、意外や意外、『広告批評』30年の“歴史”が見事に展示されていて、びっくりしました。
雑誌という“モノ”を展示するのでなく、雑誌の中を流れている30年という“時間”を展示する。そのアイデアもすごいと思いましたが、その時間を膨大な“モノ”を通して視覚化した力倆にも脱帽です。こんなことを言うのもヘンですが、自分たちが何をやってきたのかが、見えたような気がしました。
全面的にバックアップしてくれたギンザ・グラフィック・ギャラリーと、展示に離れ技を見せてくれたグルーヴィジョンズの方々に、心から感謝しています。

天野祐吉

I was worried whether an exhibition about a magazine would go over well, but to my total amazement the 30-year history of *Kokoku Hihyo* (Advertisement Review) was exhibited brilliantly. The idea was not to show the magazine as a “thing” but to display the 30 years of “time” flowing through it. I thought that idea itself was awesome, but I was even more impressed by the power with which time was visualized through an enormous number of “things.” Strange though it may sound, I felt the exhibition showed us what we had accomplished through the years.
I am deeply grateful to ginza graphic gallery for its all-round support and to the people of Groovisions for their amazing help with the exhibits.

Yukichi Amano




広告批評
NO. 92 1987

# DNP Graphic Design Archives Collection II
# Ikko Tanaka Posters 1953–1979

**January 12–February 25, 2010**

## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展II　田中一光ポスター 1953-1979

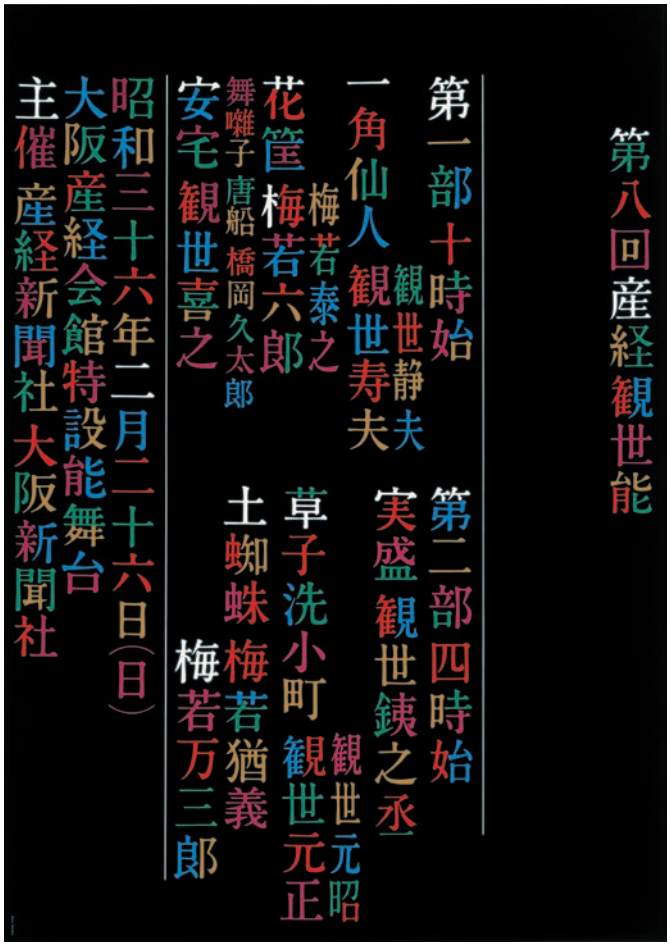
田中一光が急逝してから7年になるが、財団法人DNP文化振興財団は田中の作品・資料120,000点におよぶ膨大な田中一光アーカイブを設立した。それを記念して田中のデザインの基本になる初期から中期に至る代表的なポスターをセレクトした本展は連日人々で賑わい見応えのあるものであった。
これ等を見ると田中が早くから日本の伝統を継承しながら、それを解体し独自の現代日本美をポスターとして結実していったことが良くわかる。初期の代表作である第八回産経観世能の黒地に絶妙な色彩による漢字でつづられた能衣装をみるような絢爛とした美しいポスター等を見ると、田中が国内は勿論海外からも絶賛されてきたのが良くわかる。

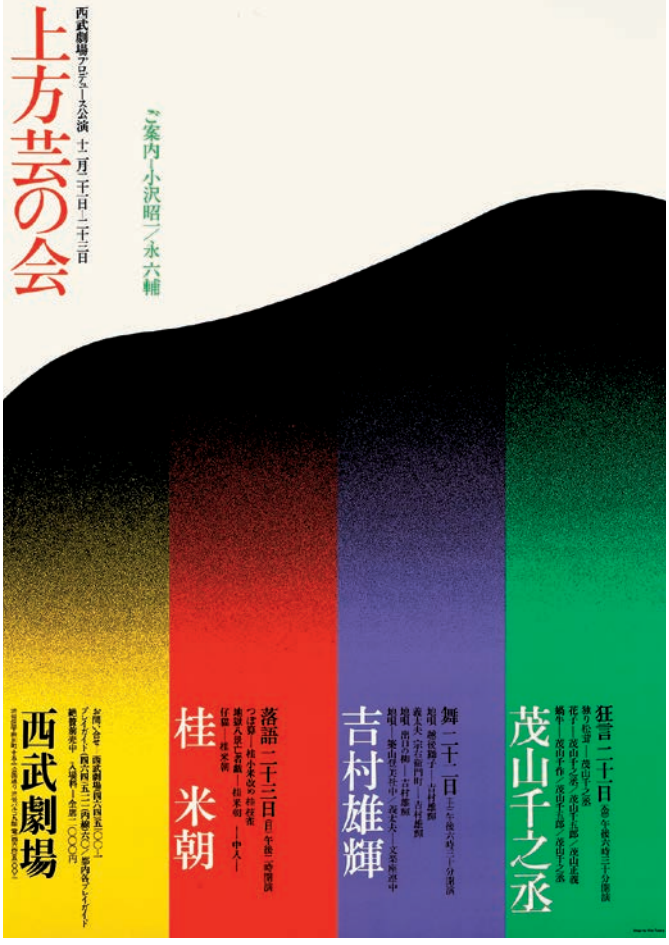
永井一正

This exhibition focused on his representative works of his early and middle periods – works that form the basis of his lifelong design endeavors. As befitting the importance of these works, the exhibition attracted a large number of visitors.
From these works one can see how, while carrying on Japanese traditions, from early in his career Mr. Tanaka deconstructed those traditions and gave them new life in the form of posters of unique contemporary Japanese beauty. In works such as his 8th Sankei Kanze Noh poster, one of his best from this early period, we see gorgeous beauty like that of a Noh costume, the Japanese characters of brilliant colors set on a background of black.　Kazumasa Nagai

第五回　田村 楊貴妃 安宅 巴 天鼓 道成寺
産経観世能
二月二十一日 産経会館特設能舞台

HANAE
MORI


第八回産経観世能
第一部十時始
観世静夫
一角仙人 観世寿夫
梅若泰之
花筐 梅若六郎
舞囃子 唐船 橋岡久太郎
安宅 観世喜之
第二部四時始
実盛 観世銕之丞
観世元昭
草子洗小町 観世元正
土蜘蛛 梅若猶義
梅若万三郎
昭和三十六年二月二十六日(日)
大阪産経会館特設能舞台
主催 産経新聞社 大阪新聞社


西武劇場アロマスペース公演 十二月二十日 二十二日
上方芸の会
ご案内 小沢昭一／永六輔
茂山千之丞
狂言二十一日
吉村雄輝
舞 二十一日
桂 米朝
落語 二十二日
西武劇場

# DNP Graphic Design Archives Collection III
# Shigeo Fukuda's Visual Jumping

**March 4–27, 2010**

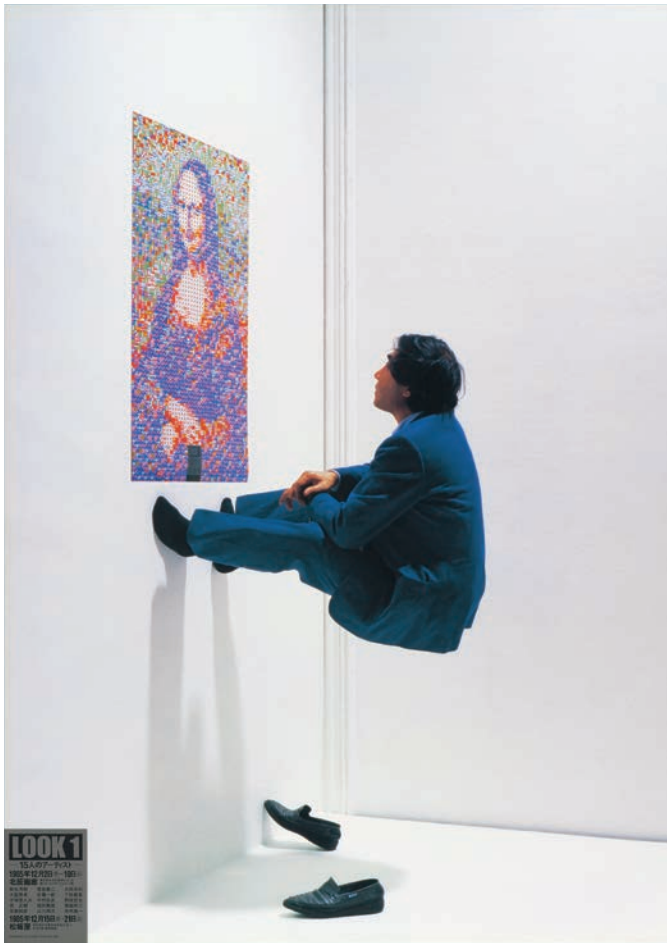
## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展III　福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

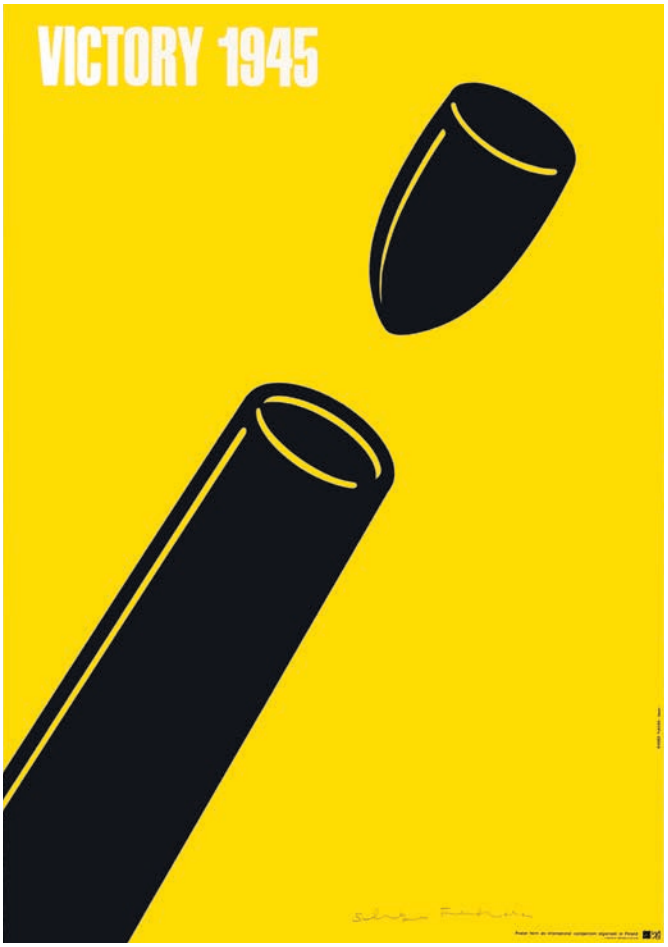
昨年8月、故福田繁雄氏のアトリエにあったポスター延べ6万点の取り扱いをDGAに委ねられ、半年あまりかけて整理作業が完了した。この展覧会は、その成果の一端を紹介するとともに追悼展の意味をこめて開催された。生涯に制作したポスター約1200点のなかから108点を精選。告知ポスター、DM等のグラフィックは服部一成氏、カタログと会場構成は矢萩喜從郎氏による。自分の個展は自分でするよと先生は言われただろうが、FUKUDAデザインの真髄に呼応した遊びと驚きの大胆な仕事ぶりに、きっと満足されているだろう。企画に賛同されたご遺族のご厚意と関係スタッフの献身的なご尽力に敬意を表し、ここに立ち会えたことに心から感謝いたします。

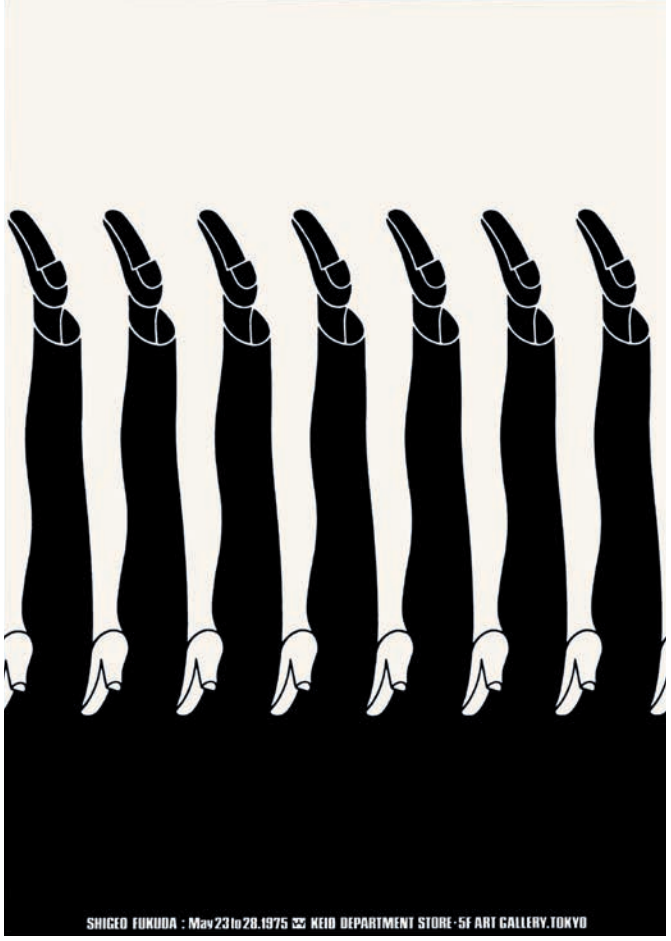
片岸昭二（富山県立近代美術館）

In August 2009, the 60,000 posters of the late Shigeo Fukuda was entrusted to the DNP Graphic Design Archives. This exhibition was held to introduce part of that collection as well as to pay tribute to Mr. Fukuda's memory. Of the near 1,200 posters he created during his lifetime, 108 were selected for the show. The exhibition graphics were prepared by Kazunari Hattori; the exhibition catalog and layout, by Kijuro Yahagi. Although Mr. Fukuda would have insisted that he would take charge of his own show, he would surely have been pleased with the bold way, filled with playfulness and surprise, the essence of his design philosophy was displayed.

Shoji Katagishi
(The Museum of Modern Art, Toyama)


LOOK 1


VICTORY 1945


SHIGEO FUKUDA : May 23 to 28.1975 KEIO DEPARTMENT STORE · 5F ART GALLERY.TOKYO

self-defense

## ddd gallery 09-10

January 19–March 13, 2010
**Graphic West 2: Sensory Boxes**

April 24–June 5, 2009
**Draft: Branding and Art Directors**

June 16–July 22, 2009
**Tokyo Type Directors Club Exhibition 2009**

August 18–October 9, 2009
**2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition**

October 27–December 19, 2009
**Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works**

2009 ADC展
2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition
ADC
ADC
dddギャラリー ／会員・一般作品 2009年8月18日(火) － 10月9日(金)
DRAFT
BRANDING
&ARTDIRE-
CTOR
The 168th ddd gallery Exhibition 24 April (Fri) - 5 June (Fri) 2009

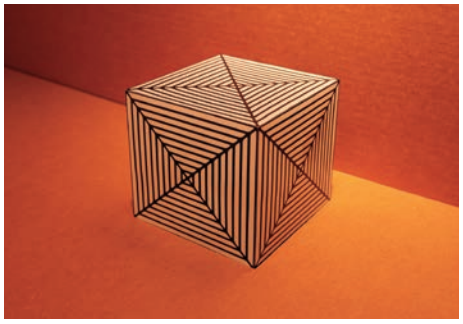
# Graphic West 2: Sensory Boxes

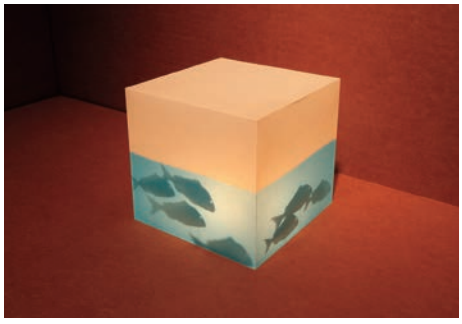
**January 19–March 13, 2010**

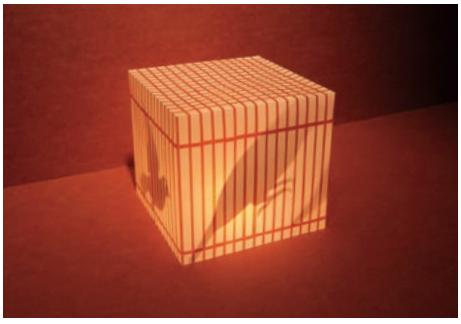
## GRAPHIC WEST 2　感じる箱展 ― grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証 ―

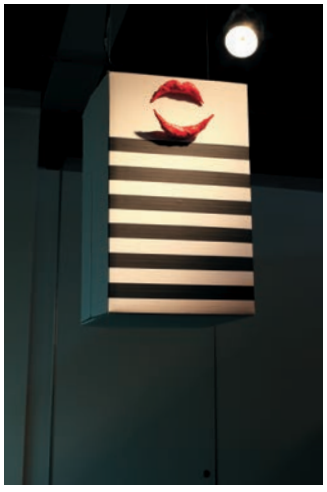
“二次元と三次元の変換”、“感度を育てるデザイン”。それまで言語を持ち合わせていなかった自分達のグラフィックデザインが、何かを喋り出したように思う。作品を含め会場全体を“感じる箱”として構成した展覧会は、普段はOFFになっている感覚のスイッチをONにするよう促す私達のデザインの“声”を、訪れる人がどう捉えてくれるかという実験のようだった。この実験につき合ってくださった方々が目をキラキラ輝かせながら楽しまれていたのは、私達の根底にあるデザインのプロセスを体験し、“声”を共有していただけたからだと信じている。このキラキラに秘められたとてつもなく大きな可能性をまだまだ探っていきたい。　graf

“Conversion of the 2D and the 3D.” “Design that nurtures sensitivity.” Our graphic design work, which until now had no words, seems to have started saying something. Our exhibition, the entire venue configured like a “sensory box” including individual exhibits, was like an experiment to see how the visitor would react to the “voice” of our designs urging them to turn ON their normally OFF switch of perception. We believe the reason those who participated in our experiment enjoyed themselves, their delight clearly visible in their eyes, was because they experienced our underlying design process and shared our “voice.” Now we are eager to probe further the amazingly big possibilities lurking in that delight.　graf









# Draft: Branding and Art Directors

**April 24–June 5, 2009**

DRAFT : Branding & Art Director

# Tokyo Type Directors Club Exhibition 2009

**June 16–July 22, 2009**

09 TDC展

# 2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition

August 18 – October 9, 2009

2009 ADC展

# Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works

October 27–December 19, 2009

矢萩喜從郎展［Magnetic Vision　新作60/100点］

February 28 – June 7, 2009

**Prints and Titles:**
**20th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection**

June 13 – September 13, 2009

**Brilliant Rivalry:**
**Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design**

September 19 – December 23, 2009

**The Power of Red:**
**21st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection**

CCGA

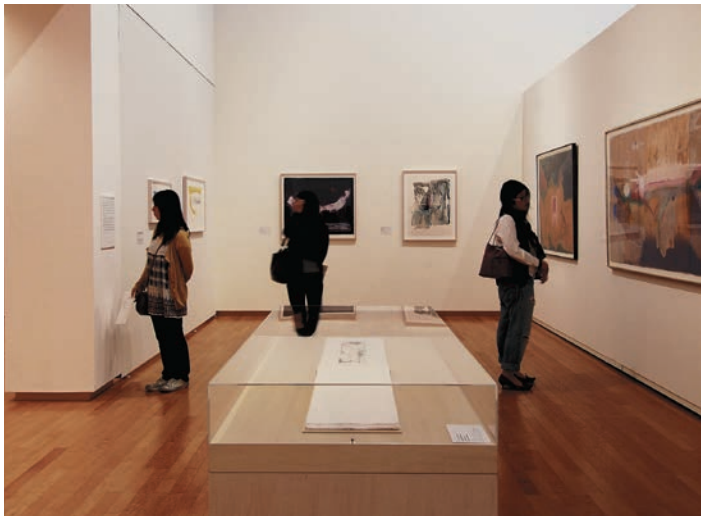
# Prints and Titles: 20th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**February 28 – June 7, 2009**

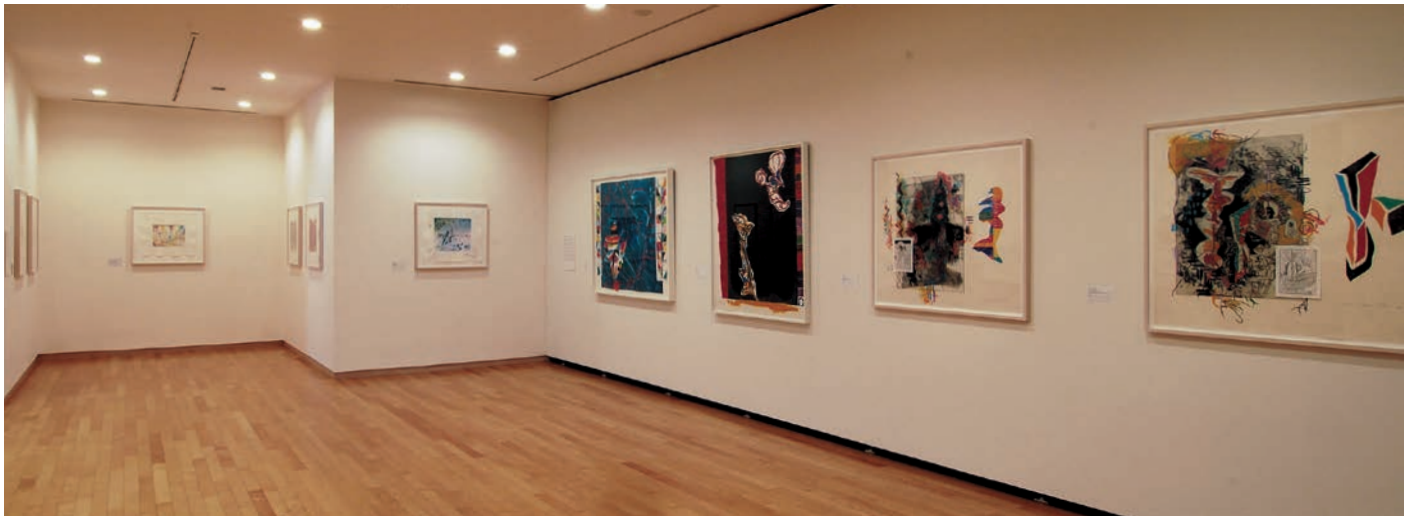
## 作品と題名：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.20

絵画や版画につけられる題名は、描かれたイメージについての説明や補完となるものであり、元来は作品そのものに対して二次的な存在だった。しかし、とくに近代以降、作品体験をより深めるための表現の一部として作家たちに意識されるようになり、単なる画面の説明にとどまらない多様な題名がつけられるようになっていった。詩的であったり鑑賞者の想像力を駆り立てたりするような、それ自体が私たちの心に残る題名は、作品の魅力をいっそう増してくれる存在にもなりえる。
本展はアラン・シールズやフランク・ステラらが制作した、印象的な題名の版画を展示し、作品と題名の関係について検証した。

Titles affixed to paintings and prints explain or supplement the image depicted, and originally they played only a secondary role vis-à-vis a work at hand. But with the coming of the modern era artists began consciously devising titles for their works as an integral element aimed at taking the artistic experience to a deeper level, resulting in myriad titles that transcend mere explanations. At times poetic, at other times arousing the imaginative powers of the viewer, titles themselves came to linger in the mind, adding to their works' appeal all the more.
This exhibition focused on prints with impressive titles created by artists including Alan Shields and Frank Stella. It offered visitors an opportunity to ponder the relationship between works and their titles.



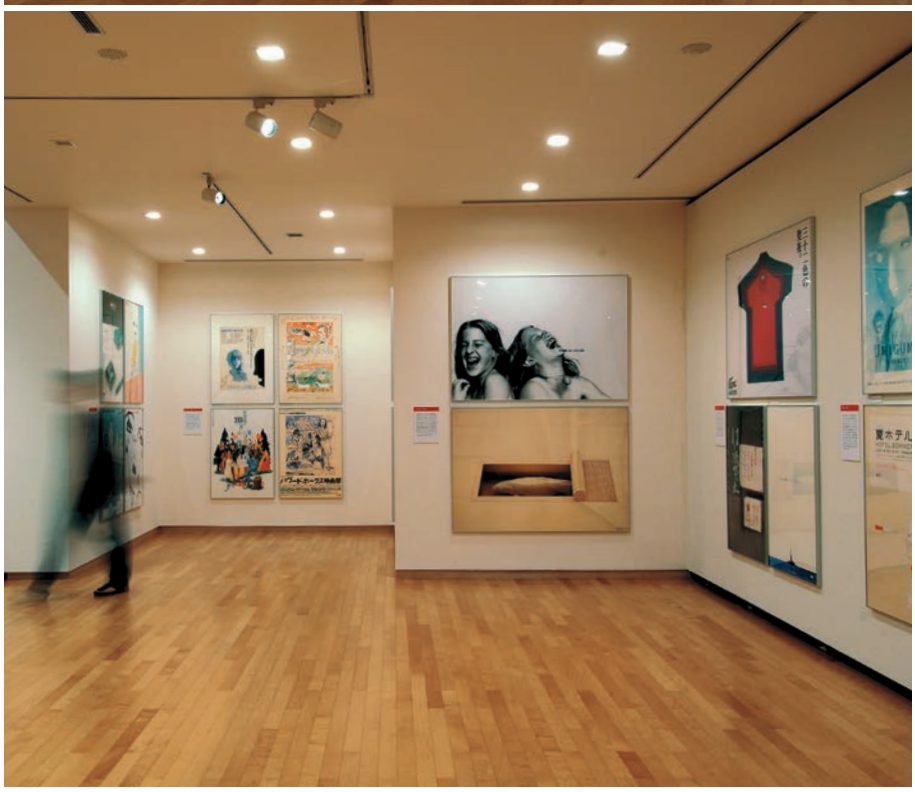
Prints and Titles
February 28—June 7, 2009
作品と題名



# Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design

**June 13 – September 13, 2009**

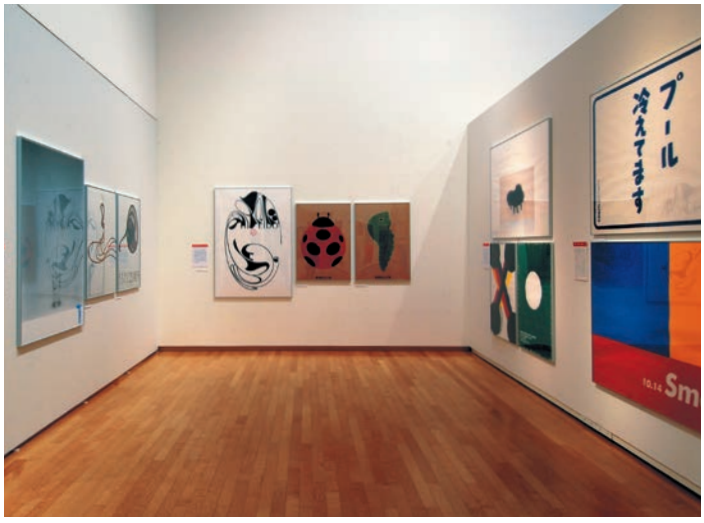
## きらめくデザイナーたちの競演—DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展



戦後日本のグラフィックデザインは、経済・社会・文化の成長に伴って飛躍的に発展してきた。DNPグラフィックデザイン・アーカイブにはその軌跡を後世に残すべく、多数の作品が収蔵されている。本展は、1960年代から今日までの約半世紀にわたる日本のグラフィックデザインの歩みを、アーカイブ収蔵品から各時代を代表する69作家のポスター123点で紹介した。展示では、全体を年代順に並べて世代の違いによる表現の変遷を概観する一方、同年配の作家2名ずつを対比することでそれぞれの特性が際立って見えるように構成した。なお、本展は2009年1月にギンザ・グラフィック・ギャラリーで開催された同名の展覧会の巡回展として開催された。

In postwar Japan, graphic design has marked dramatic development in tandem with the nation's economic, social and cultural growth. In a quest to bequeath this treasured legacy to future generations, many works from this period are preserved in the DNP Graphic Design Archives. This exhibition introduced 123 posters in the Archives collection by 69 designers representative of each phase within the half-century from the 1960s to the present. In displaying the selected works, in addition to a chronological layout giving an overview of the progression in artistic expression from one generation to the next, within each generation works were exhibited in pairs, their juxtaposition enabling the traits of each artist to come to the fore.
The exhibition was identical in content to the show of the same name initially held at ginza graphic gallery in January 2009.

TADANORI YOKOO
Yamaha 250
Model YX5
Sport's Type


プール
冷えてます

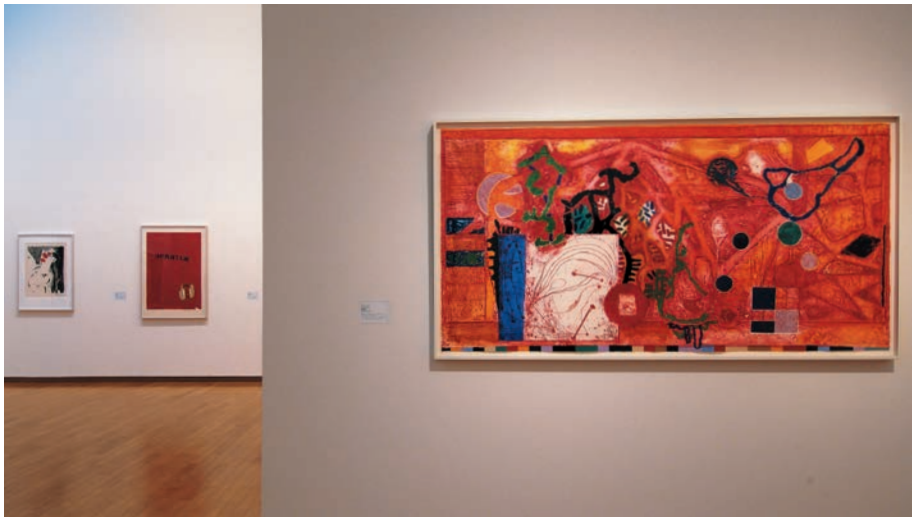
きらめくデザイナーたちの競演
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
2009.6.13土—9.13日
主催=DNP文化振興財団 CCGA現代グラフィックアートセンター

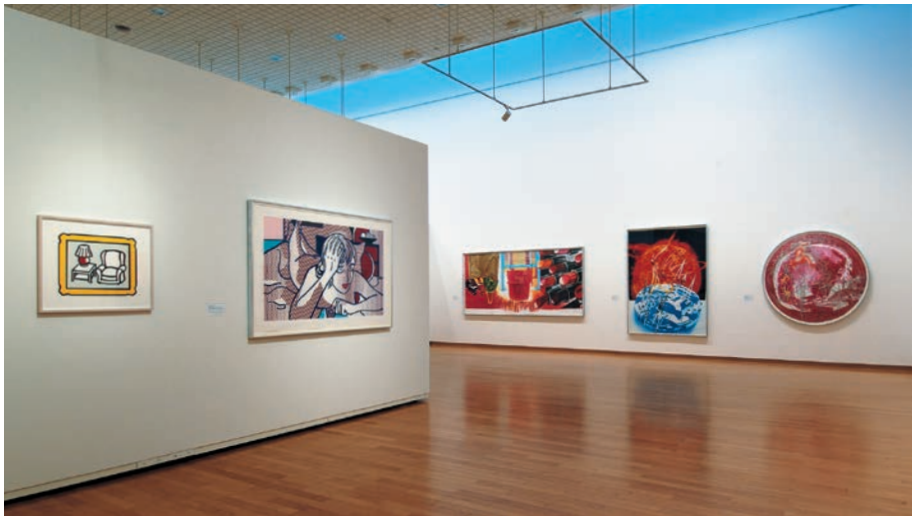
太田徹也のダイヤグラム

# The Power of Red: 21st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**September 19 – December 23, 2009**

## 赤のちから：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.21



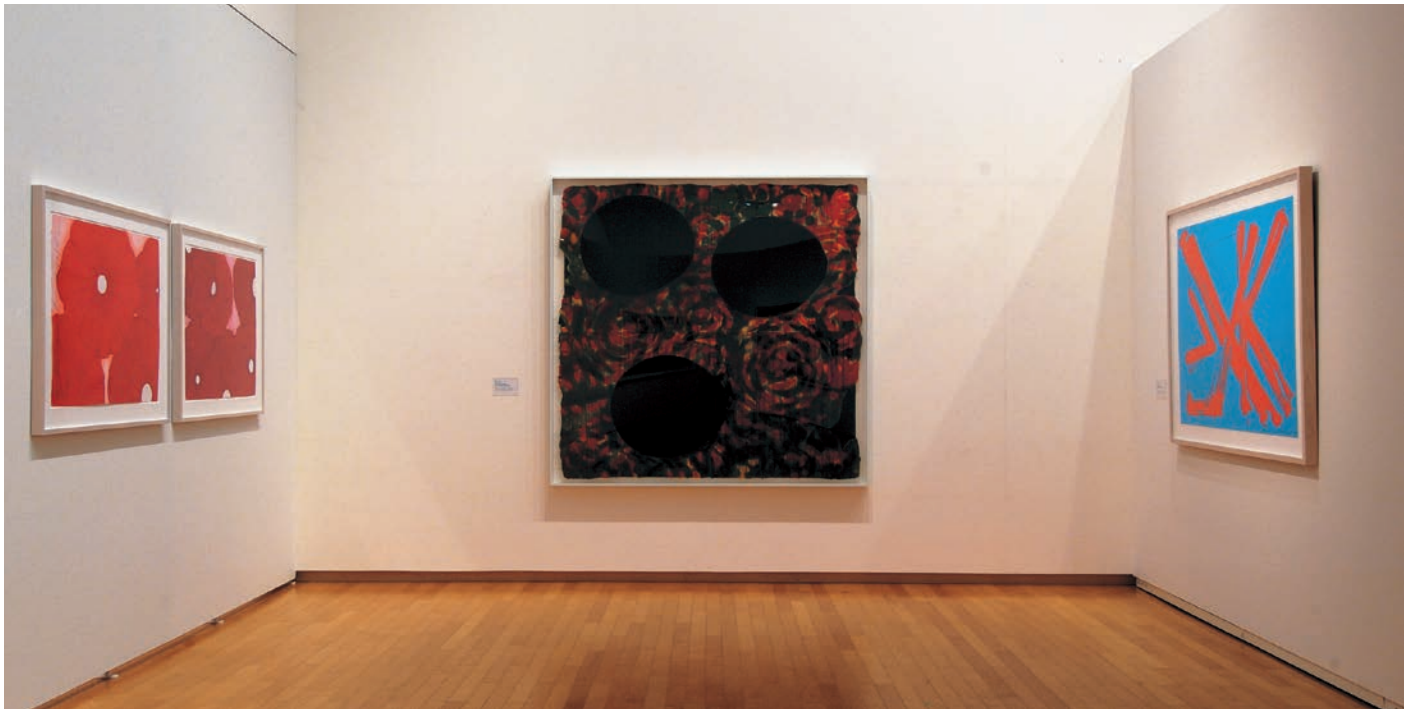


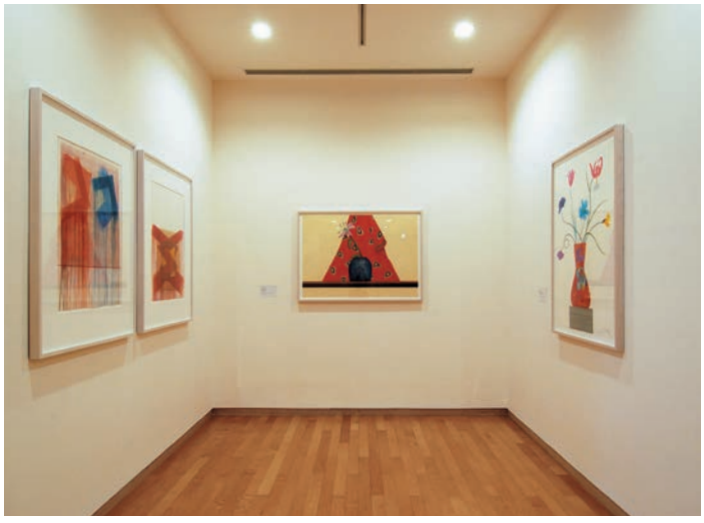
人類がはじめて手にした絵の具が赤土を材料にしたものだったということから分かるように、赤という色彩は、わたしたちと非常に深い関係にある。いのちの元である血液や、文明の起源となった火の色である赤は、太古から生命・情熱・祝賀など幅広い意味と結び付けられ、儀式や装飾に用いられてきた。絵画の世界でも、旧石器時代の洞窟壁画にはじまり、さまざまな象徴的表現あるいは視覚的効果をもたらすものとして赤は洋の東西を問わず多用され、まさに作品を彩ってきた。本展はロバート・マザウェル、ジェームズ・ローゼンクイストらの手による、赤を基調にした版画作品を展示し、赤という色彩の魅力に迫った。

Mankind's earliest paints derived from red soil, and as that fact suggests, as humans we have an extremely deep attachment to the color red. Red – the color of blood, which sustains our lives, and the color of fire, the source of human civilization – has since time immemorial been linked to a broad array of meanings: life, passion and celebration among them. Throughout history it has featured prominently in ceremonies and ornamentation.

The color red has also been a frequent player in the realm of painted art both east and west, starting from the cave paintings of Paleolithic times. Red has long conjured up symbolic associations and visual effects of every description.

This exhibition displayed red-based prints by prominent artists including Robert Motherwell and James Rosenquist. It provided visitors a first-hand appreciation of the fascinating and enduring power of the color red.





赤のちから
THE POWER OF RED

2

# 教育・普及事業

Education & Enlightenment

# ggg, ddd Gallery Talk Overview

ギャラリートーク概要

## 矢萩 喜從郎展［Magnetic Vision／新作100点］

**出演者**：矢萩喜從郎＋澤田泰廣＋松下計

本展へとつながる視覚世界の探求は、矢萩氏の創作の原動力となっている「身体をコミットさせる」、つまりものごとが見えているだけではなくて、触れたい、触る勇気を持ちたい、そうすることでグラフィックデザインの肝である視覚、見ることに対して自分で責任をとってみたいとどこかで思った気がすると話し、視覚とは何かという疑問からさらには、人間とは何か、自分とは何か、そんなことにまでつながっていく壮大な冒険であることを教えてくれました。セルフイミテーション＝自己模倣になったら作り手廃業。クリエイトというのは天地創造の創まで使っている、つまり世界でだれもやっていないことを作ろうとすること、それほど怖く厳しい世界であることの覚悟が必要であると示唆、会場が凛とした空気に包まれました。

## マックス・フーバー展

**出演者**：葵・フーバー・河野＋丸山新＋室賀清徳

マックス・フーバー氏亡き今、パートナーとして、また作家として、常に一番近くにいた葵夫人の生の声を聞くことで、20世紀を代表するグラフィックデザイナーの一人であるマックス・フーバーという人と成り、グラフィックデザイナーとしてのマックス・フーバー、そしてフーバー氏が駆け抜けたその時代など、リアリティを持って体感できる貴重な機会となりました。スイスで生まれ育ち、スイスのデザイン教育を受けたフーバー氏が、イタリアに移り住んでそこで与えた影響、また逆にイタリアから受けた影響とが相まって、マックス・フーバー独特の世界観、リベラルな作品が生み出されていった―フーバー氏の人柄を物語るエピソードです。

## 山形 季央展

**出演者**：山形季央＋上田義彦＋天児牛大／
山形季央＋葛西薫

山形氏が海みたいな人と賞する天児氏と森みたいな人と崇める上田氏。デザイナーの仕事は数ある条件や情報との格闘で、そこから価値を生み出すのは自分自身であるが、その自分がわからなくなることがある。そのときに大事なのは自分の身体に根ざした実感だと思うがその身体感覚を失いがちであるという山形氏が、日頃身体で表現している天児氏の身体の見せ方と、一方それを受け止める側である上田氏の身体の見方、そのあたりに何かヒントを見つけようとします。また企業のグラフィックデザイナーとして山形氏とは似た境遇にある葛西氏。近い立場にいるからこそお互いに感じる親近感だけではない共通の空気感を醸し出すお二人。「一瞬も一生も美しく」。簡単に使ってほしくない「美しい」という言葉も、ここではすごく生きていて資生堂の姿勢が表現されている、とは葛西氏の言葉。

## 北川一成

**出演者**：北川一成＋牛居正美／
北川一成＋永井一正＋津田淳子

「技術とセンスと翻訳能力」の三位一体を徹底しているGRAPHでは、日々トラブルと向き合いながら一つ一つの仕事を経験として積み上げ、失敗をデータとして蓄えているといいます。数々の実例印刷物を掲げながら楽しそうに紙とインキの話をする姿からは、この仕事が好きでしょうがないということがにじみ出ていました。北川氏が尊敬してやまない永井氏は北川作品を、連綿と続く日本の伝統的な良さを自身の中で解体し、その日本の良さがにじみ出つつ自分のものになっていると評します。ひっかかり、抵抗があって、それはある意味衝撃を伴うとも。それに対して現在の一般的なデザインは感覚的で、軽くて薄くて繊細。安穏とした中で生まれてくるデザインの脆弱性を危惧します。デザインには飢餓感、カオスの中から何か生まれるエネルギーが必要であると、静かな口調で鋭く指摘しました。

## 2009 ADC展

**出演者**：浅葉克己＋小野寺舞

グランプリ受賞の浅葉克己氏と、受賞作となった21_21 Design Sight「祈りの痕跡。」展コーディネーター小野寺舞氏によるギャラリートーク。同展開催の経緯からその展示内容まで、一つ一つ丁寧に解説をしてくれました。地球文字探検家である浅葉氏の文字に対する深い興味と愛着と探究心あってこそ、この展覧会が成立したということがよくわかります。浅葉氏本人の展示作品の一つが「浅葉日記」。40年間付け続けている日記には、人生のなかでいちばん大事なこと、1日を観察して、だれに会ってどういう発想をしてどういうアイデアが出て作品化されていったかが、綿密に綴られています。同じく日課となっている楷書の臨書。「書く」という行為が、古希を迎えた現在もなおエネルギー溢れるデザイン作品を作り続ける礎となっているに違いありません。

## ［ラストショウ］細谷巌アートディレクション展

**出演者**：細谷巌＋仲條正義＋葛西薫＋服部一成

細谷氏にとって仲條、葛西、服部の3氏は「スタンド･バイ･ミー」―最も信頼し、同時にライバルでもあり、ずっと離れないで寄り添っていてほしい存在だとのこと。自分を一度整理するためにもすべてをさらけ出そうと臨んだ今回の展覧会について、細谷巌作品について、それぞれの言葉で思いのたけを語りました。細谷氏がデザインするにあたってすごく大事にしているという「言葉」が、常に素直な言葉で、普段の言葉遣いとデザインされて印刷物になった言葉遣いとが同じであるとは葛西氏。服部氏は、細谷氏のレイアウトは究極、仕留めるデザインと表現で、敢えてやらなかった＝我慢したところのすごさを強調。そして、形を詰めきった、本質を突き詰めたデザインであると仲條氏。ロゴタイプがしゃべる、という表現も印象的でした。

## 銀座界隈隈ガヤガヤ青春ショー
## ～言い出しっぺ　横尾忠則～
## 灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則　4人展

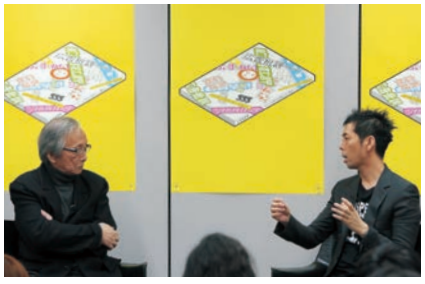
**出演者**：灘本唯人＋宇野亜喜良＋和田誠＋横尾忠則

この組み合わせで何かをやりたかったという横尾氏の発案により実現した本展。60年代当時、確かに何かがあった。デザイン界とかイラストレーション界とかに限定したものではなくて、横に拡がっていくような面白い時代に、4氏はまさに日々顔を合わせ、オンもオフもめいっぱい楽しんでいました。そんな当時を昨日のことのように話す面々。イラストレーター、デザイナー、画家というプロフェッショナルな部分だけではない友情の深さを感じる、辛口トークがありながらも軽やかな気分になる2時間でした。インスピレーションは何からも受けないとか、好奇心はどんどん低下中などとおっしゃるが、絵を描くことが好きだからいつまでたっても絵を描くことは嫌いにならないと言い切る、今も素晴らしい作品を作り続けるお若い4氏です。

## 広告批評展　ひとつの時代の終わりと始まり

**出演者**：天野祐吉＋佐藤可士和／
伊藤直樹＋高松聡＋河尻亨一

『広告批評』初代編集長として長年広告を見つめてきた天野氏が、広告の先端を行く佐藤氏と、広告の役目、新しいコミュニケーションツールと広告のあり方、そしてその中での「批評」という行為の意義などについて、天野氏の鋭い洞察力と佐藤氏の実体験から、より具体的で示唆に富んだ話に広がりました。そして雑誌媒体としての『広告批評』無き後、新しい形での広告批評を始めようとする河尻氏が、あらゆるメディアを股にかけて活躍する伊藤氏と高松氏と、その新たな広告批評の姿を模索。河尻式「2010年代コミュニケーションマップ」をもとに語られる広告のこれまでとこれから。新しい形のコミュニケーションモデルが旧来のマスコミ、広告が介在しないところで生まれ、瞬く間に広がっていく現状にプロとしてどう立ち向かっていくのか―熱い議論が繰り広げられました。



## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
## 田中一光ポスター1953-1979

**出演者**：永井一正＋横尾忠則

田中一光氏がグラフィックデザイナーとしてのキャリアをスタートさせた50年代から付き合いのある永井氏と横尾氏。日本のグラフィックデザインの黎明期に苦楽をともにしてきた仲だからこそ知りえる田中一光氏の真の姿。礼儀礼節を重んじる大変に厳しい人でよく怒られたという話、演劇やモダンダンスが好きで忘年会などの折にはよく踊っていたという話などからその人柄がうかがえると同時に、横尾氏が生活と完全に一体化していたと評するデザイン観やデザインを通じてやろうとしたことなど、早すぎる死が惜しまれる、デザイン界にとってかけがえのない存在であったことをあらためて感じさせる時間となりました。田中一光とはグラフィックデザインの正道であり、頭のてっぺんから足の先まで、グラフィックデザインとはかくあるべしというお手本だったのです。

## 感じる箱展
## ―grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証―

**出演者**：服部滋樹＋横山道雄＋坂田佐武郎＋松井貴／
服部滋樹＋三木健

グラフィックにプロダクト、大工や家具職人、シェフ、様々なカテゴリーの集団であるgraf。「暮らしをつくる」ことをコンセプトとしている彼らならではの展覧会での表現方法とは？そこから出てきた「箱」をキーワードに、二次元を三次元に、三次元を二次元に置き換える、つまり平面であるグラフィックを扱いながらも空間性を意識する彼らの思考を伝えます。服部氏が待ち望んでいたという三木氏との対談のテーマはずばり「デザインって何？」　三木氏が中学生向けに行なった講義をもとに、近頃考えるデザインのあれこれを明快な言葉と文脈で語っていきます。経験や感覚を引き出すデザインをしたい、行為をデザインの中に持ち込みたい―より人間の感度に近いところを目指している点が、二人の共通点のひとつのようです。

## Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works

Speakers : Kijuro Yahagi + Yasuhiro Sawada + Kei Matsushita

Yahagi spoke of the physical commitment that serves as the power source behind his creativity – his desire not merely for things to be seen but to touch them, to have the courage to touch them, and thereby to take personal responsibility for the visual sense that lies at the heart of graphic design. The probe of the visual world that led to this exhibition is a grand adventure – starting from his asking what our visual perception is, the adventure proceeds to questioning what humans are all about, and then to what he himself is. If one descends into self-imitation, this is the end of one's creative days. To create, a word used even to describe the creation of the universe, is to try to make something never done by anyone else in the world. Yahagi suggested that one must be prepared for such a frightening and severe world, and the audience was completely enthralled by his words.

## Max Huber - a Graphic Designer

Speakers : Aoi Huber-Kono + Arata Maruyama + Kiyonori Muroga

Now that Max Huber is no longer with us, hearing his wife Aoi – who was always closest to Max both as his partner and as an artist – speak was a rare opportunity to experience first-hand, with tremendous reality, what Max Huber, one of the 20th century's foremost graphic designers, was like as a person, what he was like as a graphic designer, and what the times were like in which he worked. She spoke of how he was born in Switzerland, received his education in design in Switzerland, and then moved to Italy, where the impact he had, in combination with the impact Italy had on him, gave birth to his unique worldview and his liberal works. Hearing Aoi speak gave valuable insight into the personality of Max Huber, a man who set high value on the ties that bind individuals.

## Toshio Yamagata Exhibition

Speakers : Toshio Yamagata + Yoshihiko Ueda + Ushio Amagatsu / Toshio Yamagata + Kaoru Kasai

Yamagata spoke highly of Amagatsu, comparing him to the oceans; Yamagata also described Ueda's esteem for the artist, comparing him to a forest. Yamagata said the job of a designer entails struggles against numerous conditions and information, and while it is one's self that produces value from that, there are times when one doesn't understand oneself. What is important at times like that, he thinks, is the true feelings rooted in one's body. Yamagata is seeking hints of some kind from the way Amagatsu shows his body, and from the way Ueda gaze at it. Kasai faces a situation similar to that of Yamagata as a corporate graphic designer. Because they are in closely similar positions, the two of them exude a common air that goes beyond mere feelings of mutual familiarity. Shiseido's corporate message is "This moment. This life. Beautifully." Kasai stated that the word "beautiful" is one that should not be used lightly, but here it comes brilliantly alive as an expression of Shiseido's stance.

## Issay Kitagawa

Speakers : Issay Kitagawa + Masami Ushii / Issay Kitagawa + Kazumasa Nagai + Junko Tsuda

At GRAPH, where the trinity of "technology, sensitivity and the ability to translate" is pursued fully, Kitagawa says that in dealing with problems on a daily basis they build up work experience, and any failures contribute to their data base. From the way he and Ushii excitedly talked about paper and ink while holding up many actual publications, it was obvious that they absolutely love what they do. Nagai, whom Kitagawa holds in highest respect, praised Kitagawa's works for the way in which they internally break down Japan's continuum of traditional excellence and, while exuding that excellence, turn it into something of their own. Hitting snags, meeting resistance, in a sense is accompanied by a shock. In contrast, design in general today is sensory, light, thin and delicate. The fragility of design born out of peace of mind is cause for concern. The soft-spoken Nagai pointed out insightfully that design requires energy that emerges from a sense of hunger or chaos.

## 2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Speakers : Katsumi Asaba + Mai Onodera

The two speakers were Katsumi Asaba, winner of the 2009 Tokyo ADC Grand Prize, and Mai Onodera, who served as coordinator for the prize-winning exhibition "Whispered Prayers" by 21_21 Design Sight. They offered an in-depth account of the exhibition, from how it came about to what it featured in content. From their discussion it was clear that the exhibition was possible thanks to Asaba's inquiring nature as well as his deep interest in and love of the written word: indeed, Asaba is an "explorer of the world's writing systems." One item on exhibit was Asaba's own diary, which he has been keeping for 40 years. It contains the most important events of his life and meticulously records how on any particular day his meeting with someone inspired him and led to the production of one of his works. Another of Asaba's daily endeavors is his practice at calligraphy. Without doubt, the act of writing forms the basis for his ongoing creation of design works overflowing with energy, even now that he has reached the age of 70.

## Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer

Speakers : Gan Hosoya + Masayoshi Nakajo + Kaoru Kasai + Kazunari Hattori

Hosoya says for him Nakajo, Kasai and Hattori are like the characters in the movie "Stand By Me" – the people he trusts most, but against whom he also competes; people he wants to stay by his side and never leave him. In their own words, they each spoke to their heart's content about this exhibition, in which Hosoya aimed to lay everything open in order to put his life in order, and about Hosoya's works. Kasai spoke of how the "words" Hosoya values so highly when designing are always words without artifice, and how the language Hosoya uses normally is the same as the language of the publications he designs. Hattori described Hosoya's layouts as the ultimate in design out to kill, and stressed the awesome way he boldly shuns something, which he equated to self-restraint. Nakajo spoke of Hosoya's designs as being packed with form and the ultimate in true essence. His description of Hosoya's "talking logotypes" also made an impression.

## Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show

Speakers : Tadahito Nadamoto + Akira Uno + Makoto Wada + Tadanori Yokoo

This exhibition came about as a result of Yokoo's idea of wanting to do something in combination with the other three members. The 1960s were indeed a special time. In those interesting days, when there were no rigid divisions between the realm of design and the realm of illustration, and everything spread across such boundaries, this foursome saw each other daily and enjoyed themselves to the fullest both at work and at play. They reminisced about those days as if it were yesterday. For two hours they spoke sardonically but lightheartedly, all the while manifesting their friendship of a depth not limited to their professional roles as illustrator, designer and painter. Though they spoke of getting inspiration from nothing these days and suffering a steady loss of curiosity, they proclaimed that because they loved to draw, they would never come to loathe drawing. Young at heart, all four continue to create wonderful works even today.

## *Kokoku Hihyo:* End of One Era, Start of Another

Speakers : Yukichi Amano + Kashiwa Sato / Naoki Ito + Satoshi Takamatsu + Koichi Kawajiri

Amano, who has mulled advertising for many years as *Kokoku Hihyo*'s first editor-in-chief, exchanged views with Sato, a designer at the vanguard of today's advertising. They talked about the role of advertising, what new communication tools and advertising should be like, and the significance of the act of "criticism" from Amano's acute insight and Sato's substantial experience. Separately, Kawajiri, who is looking to launch a new form of advertising criticism now that *Kokoku Hihyo* no longer exists in magazine format, probed new forms of advertising criticism together with Ito and Takamatsu, both of whom are active in media of every description. Their animated discussion addressed the question of how, as professionals, they should approach the new communication models that are born unrelated to earlier mass communications and advertising and spread almost instantaneously.

## DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ Ikko Tanaka Posters 1953-1979

Speakers : Kazumasa Nagai + Tadanori Yokoo

Nagai and Yokoo were close to Ikko Tanaka, having been through good times and bad together during the dawning days of graphic design in Japan, they were in a position to know Tanaka as he truly was. They offered their insight into his personality, speaking of how strict he was, especially when it came to common courtesy and good manners, and how he often got angry at them over such things; and about how he liked the theater and modern dance, and how at year-end parties and such he would often take to the dance floor. Yokoo also spoke about Tanaka's view toward design, which he said was totally integrated with his life, and about what he tried to achieve through design. The occasion drove home once again how unfortunate his early passing is and how irreplaceable his loss is for the design world. Ikko Tanaka was the true embodiment of graphic design at its best, and from the top of his head to the tips of his toes he was a model of what a graphic designer should be.

## Graphic West 2: Sensory Boxes

Speakers : Shigeki Hattori + Michio Yokoyama + Saburo Sakata + Takashi Matsui / Shigeki Hattori + Ken Miki

graf is a group that fits into an array of categories: graphic and product designers, carpenters, furniture makers, chefs. At this exhibition uniquely based on their concept of "creating lifestyles," the attempt to answer the question of what their mode of expression is resulted in the keyword "boxes." Replacing the 2D with the 3D, and the 3D with the 2D, i.e. while dealing with graphics, which are two-dimensional, they are conscious of spatiality, a notion that was conveyed in the way they exhibited. The theme of Hattori's conversation with Miki was none other than "What is Design?" Miki, basing himself on a lecture given to middle school students, spoke clearly and concisely about his latest thoughts about design. One thing the two speakers seemed to share is their quest to achieve work that is closer to our human sensitivity – their desire to create designs that draw on experiences and feelings, and their desire to infuse actions into their designs.

# Gallery Talk

矢萩喜從郎展［Magnetic Vision／新作100点］

## 矢萩喜從郎、松下計、澤田泰廣

**澤田泰廣**　僕と松下は大学時代から数えて、もう30年の付き合いです。矢萩さんとは約10年の歳の差があるんです。矢萩さんとジェネレーションの違う我々二人のグラフィックデザイナーを、なぜこのトークショーに呼んでいただいたのか、まずお話しいただきたいと思います。

**矢萩喜從郎**　僕は現在、建築、ランドスケープ、彫刻、椅子といった領域での仕事をしていて、それ等の仕事がかなりのウエートを占めています。グラフィックを止めたと捉え「まだ展覧会を開く活力があるの?」と驚かれた人もいるのではないかと推察しています(笑)。けれども、グラフィックを止めてしまうということは、毛頭考えていません。去年、私が設計した大型オフィスビルが横浜に完成した時に、二人に見に来ていただきました。その後、横浜の街で食事をした折に、どこかでグラフィック領域の展覧会を開く予定があると話したら、二人はずいぶん驚き、本当かなという顔をされたんです。ですから、その二人に展覧会が現実味を帯びた時に登場いただくように依頼したんです。

**澤田**　確かに、矢萩さんのここ数年に亘るグローバルな活動を振りかえると、もう、あえてグラフィックの世界に焦点を当てられることはないのではないかと思っていました。まして、新作ポスター100点というカタチで実現されるとは、正直、すごいエネルギーを感じています。

**松下計**　僕は駆け出しでまだ食えないころに矢萩さんの仕事を知った。個人的に会うずっと前のことで、ファイン・アートの人なのかと最初は思ったんですね。美術展の図録を手にしたとき、茶封筒で使っている紙の裏面を利用したような、あるいはお線香で穴を開けたようなデザインだったんですけれど、本当に衝撃を受けて……。

**矢萩**　ヴェニス・ビエンナーレのカタログですね。そこで日本の展覧会をやったときのもので部数が1000部ほど。炎で焦がして作品を作る日本人作家の作風が端緒になって、東急ハンズで買った"肉叩き器"を使って、カタログの箱とカタログの表紙を焼いたデザインをしました。"肉叩き器"を熱してから紙に焦げ目を入れ続けていくと、すぐに先がぼろぼろに朽ち落ちてしまいました。結果的に15個ぐらい買わなくちゃならなかった(笑)。

**松下**　いわゆるアーティストという、主体になる存在がいて、それを補うかたちでデザイナーがいるのではなくて、デザイナーが情報の最初の源泉になる、起点になる立場が作れるんだということで非常に勇気づけられた。で、いまもそのことを全うされているという方だと思う。実際にお会いするようになっても、ねばりのある非常に強い方として、ある高潔さを感じるんです。

**澤田**　僕がデザイナーを目指した起源のひとつには印刷に対する強い興味がありました。ならばと、ある先輩が見せてくれた「チェコスロバキアのキュビズム展」のカタログが矢萩さんとの最初の出会いだったと思います。透明度の高い帯紙に大胆なスミ文字が裏刷りされているものでした。他のポスターなどの仕事でも梱包用紙にわざと印刷したり、縫製をほどこしたり、現在流行している印刷トライアルを20年前に既にやりつくしていたんですね。当時の僕にはとても先鋭的に映ったことを思い出します。

**矢萩**　なぜそうやったかとその行為を考えてみると、「見ること」、つまり視覚に関する作品を作っている限り、あらゆる境界を取り払わなければ、自分の身体を素直に直面している事象とコミットすることができないと考えていたからです。その様な考えをもとに、世界的にも著名なアーティストだとしても、デザイナーとして互角に戦うべきだと考えた訳です。

**澤田**　なるほど。矢萩さんのあらゆる仕事に共通する、何かしらの表現行為に徹底して対峙していこうとするプライドみたいなものが伝わってきますね。

**矢萩**　セルフ・イミテーション(自己模倣)、これになったら、絶対、作り手を廃業したほうがいいと僕は思っています。新たに生みだす必要もなく楽だとは思うんですけれども、実はそう甘くなく、その行為が評価として自分に跳ね返ってくるからです。世界でだれもやってないものをつくろうとすること、それが創造なんですね。その勇気がなかったら、クリエイターという言葉の意味の核心が飛んで行ってしまいます。

実は今回の新作ポスターのアイデアは、延々考えていたけれど納得できないままにいたのですが、最後になって、何もない、あっけらかんとした丸になりました。でも重要なのは、自分の知り得る限り誰もやったことがない表現だと思えたから、制作に踏み切れたということです。

**澤田**　そのセルフ・イミテーションを打ち消すという意味で、次の矢萩喜從郎はどこに向かうのだろうということが、僕には非常に興味があるのですが……。

**矢萩**　そうですね。ジョン・ケージが言うインプロヴィゼーション(即興)というか、身体に振り掛かってきたものに、咄嗟に対応する身体能力、フランス語でいえばディスポニビリテでしょうか、そういう対応力があると判断できれば、まだ続けられるというジャッジを自分に下すでしょう。

それからもう一つは、文章に書いたことがあるんですけれども、「矢萩の地雷論」というのがあります。それは、これはだれ風である、またこの地雷がだれ風であるということを認識し、しかもその地雷がどこまで影響力があるかを考える訳です。それでそれぞれの地雷はもちろん、その影響力のある領域を避けて、つまりそれぞれの地雷の隙間を抜けて泳ぎたいと思ったのです。そのことを考えて実践すれば、自ずとクリエイトしたことになるんですね。この地雷がどの範囲まで影響力があるのかということを推察するには、やはり普段からセンサーを十分に働かせて洞察できる力を持つことが必要になるでしょう。

**澤田**　矢萩さんはやはり哲学の人なんですね。自己に厳しい強固な意思を感じます。

**松下**　いちばん最初の、矢萩さんとぼくとの出会いの話にまた戻るのですが、何かに寄り添って何かを演出したり、助力したりするようなデザインではなくて、デザイン自体の存在感という、一貫したものの追究が矢萩さんには見て取れるように思うんですね。

# Gallery Talk

**Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works**

## Kijuro Yahagi, Kei Matsushita, Yasuhiro Sawada

Yasuhiro Sawada Matsushita and I've known each other 30 years, ever since college days together. Yahagi-san's about 10 years our senior. To start off, I'd like to ask him why he invited the two of us, of a different generation, to this talk show today.

Kijuro Yahagi I work in a variety of fields – architecture, landscaping, sculpture, chairs – and these make up a considerable share of what I do today. Some people probably would take this to mean I've given up doing graphics and they must be surprised and wonder whether I still have the vitality to hold a show of graphics.(laughter) I have absolutely no thought of stopping my graphic work, though.

Last year, I asked the two of you to come see a newly completed office building I'd designed in Yokohama. When we went to dinner after that, I mentioned that I was scheduled to hold an exhibition of my graphics, and you looked very surprised, no doubt wondering whether what I was saying was true. So when the exhibition became a reality, I asked you two to take part this way.

Sawada It's true. Looking back on your worldwide activities these past few years, I doubted whether at this point you would set your focus on graphics again. And to be quite frank, for you to have realized this exhibition by creating 100 new posters clearly required a huge amount of energy.

Kei Matsushita I first came to know your work when I was just starting out and could barely eke out a living. That was long before I met you in person, and at first I thought you were involved in the fine arts. Then when I saw your art exhibition catalog, I was astonished by its design – looking like you'd used the back of a plain manila envelope, or like you'd punched holes using an incense stick.

Yahagi What you're referring to is my catalog for the Venice Biennale. I did it when a Japan exhibition was held there, in a print run of about 1,000 copies. I took a hint from a Japanese artist who created artworks using a flame, and I made burns in the catalog cover and its outer box using a meat pounder I bought at Tokyu Hands. By heating the pounder and scorching the paper repeatedly, the tip quickly deteriorated – and I ended up having to buy about 15 pounders before the job was done. (laughter)

Matsushita I was extremely encouraged to see how a designer can be the initial source of information, a starting point, rather just being an adjunct to what is first and foremost an "artist." I think you continue to be a designer like that today. Ever since I've gotten to know you in person, I've always sensed a kind of noble-mindedness in you as a person who is extremely strong and persevering.

Sawada One of the reasons I sought to become a designer was my strong interest in printing. When one of my fellow students heard me say that, he showed me a catalog you'd created for an exhibition of Czechoslovakian cubism, and that I think was my first introduction to your work. It featured bold black lettering back-printed on highly transparent *obi* paper. In your posters and other work too, 20 years ago you had already totally done printing trials like those in vogue today – printing on wrapping paper, adding stitching and so forth. I recall how ahead of the times it struck me at the time.

Yahagi The reason I did that, why I acted that way, was because I believed that as long as I was creating works relating to "seeing," to vision, I wouldn't be able to commit myself in good faith to the events unfolding before me unless I removed all boundaries. Based on that thinking, I felt that even if it was with a renowned artist globally, I should compete on even terms as a designer.

Sawada A good point. I sense a kind of pride that permeates throughout your work, your commitment to confront whatever act of expression thoroughly.

Yahagi The way I see it, if you start engaging in self-imitation, the best thing to do is to stop being a creative artist. I say that because although there's no need to create new things and that's the easy way out, it's not as easy as we might hope, and the act bounces back to you as a critique. Creativity is the attempt to make something no one in the world has ever done before. If you don't have the courage for that, then the words "creative artist" lose their core meaning.

In trying to come up with an idea for my new posters for this exhibition, I thought long and hard but couldn't come up with anything convincing until finally I opted for a simple circle. But what was important was that I felt it was a type of expression that, as far as I know, no one had done before, and that's when I started their production.

Sawada In the sense of avoiding self-imitation, I'm extremely interested in seeing in what direction you'll head next.

Yahagi I think I can still continue further if I determine that I have the ability to respond assiduously to whatever might happen, what John Cage called "improvisation," or what the French refer to as "disponibilité."

One more thing. This is something I've written about before, but I have what I call my "landmine theory." It involves the conscious recognition of other people's style, and of the scope of influence of those styles. What I've sought to do is to avoid all such landmines and their spheres of influence, to swim in between such landmines on my own. If I put this theory to practice, then I'm truly creating. In order to speculate how far each landmine's impact extends, it's necessary to always keep your sensors sharp and to maintain the ability to use insight.

Sawada You're a true philosopher, aren't you? I can tell you have a firm will, making strong demands on yourself.

Matsushita This brings me back to the first time I met you, Yahagi-san. What I perceive in you is a consistent pursuit – a pursuit of design that exists on its own, and not design that merely serves as an accompaniment or support to something.

# Gallery Talk

銀座界隈ガヤガヤ青春ショー ～言い出しっぺ　横尾忠則～
灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則　4人展

## 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、横尾忠則

**和田誠**　とりあえず4人の関係を言いますと、全員が若い頃、銀座のそれぞれの会社に勤めていたことが共通点かな。そして、4人ともデザイナーでもありイラストレーターでもあるわけです。その後、横尾ちゃんは画家宣言をしました。

**宇野亜喜良**　僕と横尾ちゃんは日本デザインセンターという会社にいて、そこに関西系の人がいっぱいいた。早川良雄さんの事務所にいた灘本さんを同じ歳ぐらいの人だと思って「灘さん」と言っていたのだけれど、いつか9歳僕と違うということが分かって、それから「灘本さん」と。横尾ちゃんは何て言っていたの？

**横尾忠則**　僕は「灘もっさん」（笑）。神戸時代で、僕がまだ10代だったもんね。

**和田**　まだ舌が回らなかった（笑）。

**宇野**　この「言い出しっぺ」が横尾忠則になっているのだけれど？

**横尾**　やっぱり歳のせいじゃないの？　70の声を聞くと昔のことがなつかしくなってしまうんだよね（笑）。昔はしょっちゅう4人で会っていたけれど、僕が絵のほうに行ってからあまり会うことがなくなったしね。

**宇野**　でも灘本さんは元気ですよね。

**横尾**　だってあれは80歳の人の描く絵じゃないもん。

**灘本唯人**　大きなお世話だよ（笑）。

**横尾**　でも灘もっさんのは大人の絵ですよ。ああいう色感が使えない。

**和田**　これはちょっと不公平なんですが、僕以外の3人は作品としてこのポスターをお描きになっているんですね。ですから、この展覧会の初日に間に合えばよかった。僕だけが事前の宣伝用ポスターを作れと言われたので、皆よりうんと早く締め切りが来ちゃった。横尾ちゃんが言い出したんだよね。「和田君がポスターやれ」って。

**宇野**　このポスターの中で僕たち4人それぞれが描いている絵は、和田君が描いてくれている。

**和田**　アハハ、真似して描いたんです。

**宇野**　すごく感じが出ているなと思って。調べてみたら、この横尾ちゃんの煙のフォルムが実際とは違うのね。ちょっと縦長になっている。

**灘本**　地図そのものは1960年の地図ですよ。

**和田**　ちょうどこの頃の地図を見つけて。

**宇野**　今の人は分からないと思うんですけど、「コンパル」という美人喫茶がちゃんと記載されている。

**和田**　そう。（ポスターの中の地図を指して）僕はここのライトパブリシテイに勤めていたでしょう。灘本さんはそこ。それから、デザインセンターがこっちにあって、宇野さんと横尾ちゃんが勤めていた。全員が勤めていたところを入れなきゃならないから、結構地図の拡大率とか面倒くさかった。おれが一番苦労してるんだよ（笑）。

**灘本**　銀座にいちばん長くいた人は誰？　僕は早川事務所を辞めてすぐに六本木に引っ越したから。

**宇野**　和田君がいちばん長いでしょうね。

**和田**　僕は68年まで。ライトには学校を卒業する前から行っていたから9年いたんです。

**灘本**　あるとき銀座の光蘭亭というところで横尾君と食事をしていたら和田君が入ってきた。それで横尾君に紹介してもらった。「神戸時代の節分の豆まきのポスターを知っていますよ」と和田君が言ってくれて、それがすごくうれしかったの。

**横尾**　話を昔に戻すと、灘もっさんがいなければ、僕はここに今日座っていないんですよ。

**和田**　そのぐらい恩人であると。

**横尾**　僕が10代のときに神戸新聞にカットを投書していて、そこの常連が4人集まって初めて三宮の喫茶店の2階で展覧会をやった。

**灘本**　そう。元町を散歩していたら7人の名前が出ている展覧会を見つけた。

**横尾**　4人。

**灘本**　いやいや、彫刻も入ってたやん。こっちはちゃんと記憶しています（笑）。

**横尾**　皆さん、これ絶対信用したらだめです（笑）。

**灘本**　それでね、神戸新聞の寺尾さんというえらい人に「あなたの会社が欲しがっている若者がいる」と電話して、もう一度いっしょに見に行ったんだよ。そうしたら、「これはOK」となって、横尾ちゃんは神戸新聞に入った。

**宇野**　才能を認めたんですね。

**横尾**　でも、灘もっさんにえらい目に遭わされている。僕は日宣美展を何のことか知らなかった。そうしたら灘もっさんが、全国的に大きな権威のある展覧会があるから出したらどうかと。そこで観光ポスターを描こうと思って、京都の龍安寺の石ころかなんかを置いて、ホウキのあとを渦状に。それを描いているところに灘もっさんがひょいと入ってきて、「何してんの」と言うから「日美宣に出そうと思って」と言うと、「これ、何や、蚊取り線香か」と（笑）。「いや、これは龍安寺や」と言ったら、「龍安寺に見えへん。ちょっとそれ、逆さにしてみ」と言う。それで天地逆さにしておいたら、「あ、鳴門の渦や。『鳴門』で出せばいい」って。それでそのとおり出したら落選した（笑）。

**宇野**　賞をもらったのはその次の年ぐらい？

**横尾**　2年後。僕が奨励賞で和田君は『夜のマルグリット』で日宣美賞を取った。だけど、それ以前に宇野さんと和田君の名前を僕は高校1、2年生ぐらいのときから知っていた。「コルゲンコーワ」のカエルの絵でふたりは入賞していて。

**宇野**　それから、64年に我々は「東京イラストレーターズクラブ」というのを作ったでしょう。僕が1回目の賞をもらったんだけれど。

**灘本**　そう。66年にクラブが出した『年鑑イラストレーション』の第1号を今日持ってこようと思って忘れちゃったんだよ。

**和田**　この同じ64年にデザインセンターを横尾ちゃんと宇野さんは辞めて、原田維夫君と3人で「スタジオ・イルフイル」という事務所を持ちましたよね。

**横尾**　名前は宇野さんが付けたの。「フイル」って、逆に読むと「フ・ル・イ」。フルイを逆さにすると新しいんじゃないかって。

**宇野**　それにイラストレーションの「イル」を付けた。

**和田**　新しいイラストレーション……。

**横尾**　そういうハイカラな、フランス語だかなんだかわかんないようなことをするのが宇野さんだったね（笑）。

# Gallery Talk

**Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show**

## Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Tadanori Yokoo

**Makoto Wada** To kick off, what the four of us have in common is that when we were young, we all worked in the Ginza area. Also, all of us are both designers and illustrators. Later on, Yokoo-chan declared himself a painter, though.

**Akira Uno** Yokoo-chan and I were both working at Nippon Design Center (NDC), where a lot of people from the Kansai area were working. Nadamoto-san was working for Yoshio Hayakawa, and at first I thought we were about the same age and I addressed him as "Nada-san." It was only later I found out he's nine years my senior, at which point I switched to calling him "Nadamoto-san." Yokoo-chan, what did you call him?

**Tadanori Yokoo** Nadamo-ssan! That was back in Kobe, when I was still in my teens.

**Wada** Before you learned to speak properly.

**Uno** It was you, Yokoo-chan, who suggested holding this exhibition, wasn't it?

**Yokoo** It must have been reaching the age of 70 that inspired me. When you get to 70, somehow everything from the old days seems nostalgic. The four of us used to get together all the time in those days, but not very much after I turned to painting.

**Uno** Nadamoto-san's still thriving, too.

**Yokoo** You'd never guess from his works that they were created by an 80-year-old!

**Tadahito Nadamoto** Watch your tongue, young man!

**Yokoo** Nadamo-ssan, your works are those of a mature man. No young person could use colors that way.

**Wada** Say, don't you think you guys handled all this a bit unfairly? All you had to do was have your works ready by the time the show opened; but me, I had to prepare the poster for advertising the show, so my deadline was much earlier. It was you, Yokoo-chan, who suggested I be in charge of the promotional poster, wasn't it?

**Uno** You depicted the four of us and our works in your poster.

**Wada** I tried copying each of your works.

**Uno** They're all very much on target, I must say.

**Nadamoto** The map in the background is Ginza as it was back in 1960.

**Wada** I just happened to locate one from those days.

**Uno** People nowadays wouldn't know it, but I see the map shows *Konparu*, the coffee shop that used to be famous for its pretty waitresses.

**Wada** Yeah, here. (pointing to map) I was working at Light Publicity – here. Nadamoto-san was working over here. NDC, where Uno-san and Yokoo-chan were working, was here. Since I had to show where we all were at the time, enlarging the map to the right scale took some effort. I had to work the hardest of anyone in this project, you know!

**Nadamoto** Which one of us worked in the Ginza the longest? I was at Hayakawa office only a short while before I moved to Roppongi.

**Uno** Wada-kun was there the longest, I think.

**Wada** I was there till 1968. Altogether I was at Light Publicity nine years, starting from my student days.

**Nadamoto** It was when Yokoo-kun and I were once having dinner at *Korantei* in Ginza that Wada-kun came in and Yokoo-kun introduced us. Wada-kun said he knew my "bean-throwing festival" poster from my days in Kobe, something that made me very happy.

**Yokoo** You know, if it hadn't been for Nadamo-ssan I wouldn't be sitting here today.

**Wada** You do owe him a lot, don't you?

**Yokoo** When I was in my teens I contributed illustrations to the Kobe Shimbun News. Then four of us regulars got together and held our first exhibition on the second floor of a coffee shop in Sannomiya.

**Nadamoto** Yeah, I remember happening upon that show, with the names of its seven participants, while strolling around Motomachi.

**Yokoo** You mean four.

**Nadamoto** No, seven! There were three sculptors included, too. I guess I've got the better memory!

**Yokoo** Don't believe a word he says.

**Nadamoto** After seeing the exhibition I called a bigwig at Kobe Shimbun News, a guy named Terao, and told him I'd found just the right young person his company had been looking for. He then joined me and we went to the exhibition together. He took one look, and you were hired.

**Uno** He recognized outstanding talent when he saw it.

**Yokoo** But Nadamo-ssan really pulled one over on me. At the time I knew nothing about the JAAC Exhibition. Nadamo-ssan told me there was this very prominent show of national scale, and he suggested I enter a work. I decided I'd work up a travel poster, and I started drawing some stones and broom markings like at Ryoanji Temple in Kyoto. While I was working on it, Nadamo-ssan happened to drop by and asked me what I was doing. "I thought I'd enter this in the JAAC Exhibition," I said. He took one look at what I was drawing and quipped, "What's that? A mosquito coil?" When I told him it was Ryoanji, he said it didn't look to him like Ryoanji. "Try turning it upside-down," he suggested. When I did, he said, "The Naruto whirlpools! That's what it looks like. Enter it as the Naruto whirlpools." I took his advice – and the work was rejected!

**Uno** It was the following year you won a prize?

**Yokoo** Two years later. I won the Prize of Encouragement and Wada-kun grabbed the JAAC Prize for his "Marguerite de la Nuit." Even before then, though, I was familiar with Uno-san and Wada-kun's names, from when I was in high school. The two of you had won a prize for your frog poster for Colgen Kowa.

**Uno** It was after that, in 1964, we founded the Tokyo Illustrators Club. I won the first prize.

**Nadamoto** Right. I intended to bring the club's yearbook from 1966 with me today, but forgot.

**Wada** It was in '64 that Yokoo-chan and Uno-san both quit NDC and created Studio Ilfil, along with Tsunao Harada.

**Yokoo** It was Uno-san who came up with the name. It was based on a play on the word for old, "furui." He said if you read "fu-ru-i" backwards, you get "i-ru-fu," i.e. ilf - and the opposite of old is new.

**Uno** And the ending "il" I took from the word "illustration."

**Wada** Ending up with "new illustration."

**Yokoo** That's the kind of thing Uno-san would do - come up with a highfalutin word that sounds like French or something.

# Gallery Talk

GRAPHIC WEST 2　感じる箱展―grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証―

## 服部滋樹、三木 健

**服部滋樹**　grafの服部です。今回の「感じる箱展」ではいろいろな企画・イベントをやりたいと思っていまして、僕らと同じ大阪を拠点に活動されているグラフィックデザイナーである三木さんとはぜひお話ししたかったんです。展覧会自体も完成品を見せるというわけではなくて、自分たちのスタディをどれだけの数、発表できるかなと思ってやったわけです。

grafは、建築の設計をやっているスタッフもグラフィックのスタッフも、同じ並びで仕事をしています。ですのでそれぞれの視点が3次元〜2次元へと行き来、交差しています。そんな日常を経験しながら考えました。

今回は3次元を2次元でどうトランスレーションしていくかがテーマです。

grafを立ち上げたのが12年前。1993年あたりにバブル崩壊があった。なぜ僕らがモノづくりを始めたかというと1980、90年代に自分たちの生活を取り巻いているモノに違和感を感じていた。とげとげしいデザイン、そういうものがすごく多かった。「何でこんなに自分たちにフィットするものがないんやろう。ないんやったら、自分らで考えて形にしてみよう!」というところから始まった。ここにいる6名、大工職、家具職人、プロダクトデザイナー、映像作家とシェフ、それに僕はデザインの監修。この仲間と出会えて、ピラミッド構造ではない横のつながりで、フラットなモノづくり環境が可能になりました。暮らしをデザインすること、すなわち衣食住です。

そうした中で三木さんと出会って話し合う機会があったとき、アイデアを構築するのにここまでシンプルに考えている人がおられるということが、すごく不思議だったんです。お話ししていくうちに、どんどんその気にさせられるということに衝撃を受けました。

**三木健**　中之島にあるgrafのビルは、いま1階と2階がカフェでその上にショールームがあり、隣にデザイナーのいるビルがあって、さらに少し離れたところに工場があり、この数年ですごい勢いで横に広がっている。僕はそうなる前にgrafにちょくちょく遊びに行っていた。そのころは最上階がカフェでしたっけ?

**服部**　4階でした。

**三木**　以前は、1階の工房で家具職人の方が作っている椅子やその制作風景をちょっと垣間見て、上のショールームを覗き、4階のカフェでお茶を飲みながら川の流れをゆっくり眺めるというのがすごく良かった。当時は空間的に縦に積み上げられた一棟のビルだったけど、服部さんのいうピラミッド構造ではない横のつながりをすでに体現していたように思う。

**服部**　今も毎日スタディしていますが、あのころも、自分たちの商品やセレクトしたものが、いかに新しく見えるのか、組合せを変えながら試行錯誤していました。

**三木**　では、まだ変わっていく可能性がある?

**服部**　ハードとソフトが循環していくことで、新しいものが生まれていくべきだと思う。新しいソフトが動き出し溢れた瞬間、新しいハードが必要になったり……いつでもスタディしているという状態です。あと今まで出会った人たちといかにコラボレートしやすい状況を作るかということ。色々なクリエイターの方達が行き来しやすい環境があると内部の刺激もどんどんふくらんでいく。ワークショップも沢山やっていて、ミュージシャンといっしょに音楽づくりをしてみたり、本当に色々な出会いを形にしています。

**三木**　僕はこうやって話している間も服部さんの考えに刺激を受けていて、服部さんの脳を拝借している感じがある。これを最近『借脳(しゃくのう)』と呼んでいて、話し相手とコラボレーションをするようにコンセプトを探している。それを僕は話すようにデザインする「話すデザイン」と呼んでいる。今こうやって服部さんと話している間もキーワードがポンポンと結びついていく感覚がある。対話する相手によってコンセプトが刺激され、デザインの方向が変化していくんです。

**服部**　たしかに誰か人がかかわったり、環境が介在したりした瞬間に形状は変わるのですよね。

**三木**　時代の空気とか雰囲気もあるし、クライアントとの関係も大きいと思う。

ところで、ずいぶん前に息子が通っていた中学校でデザインの話をしたことがある。「暮らしの中には、たくさんのデザインがある。ペンもノートも机も椅子も……。みんなデザイン。使いやすくて気持ちよくて、見えないところもちゃんと考えられているのがデザイン。そして、ワクワクしたり、ドキドキしてくる気持ちまでも一緒に届けるのがデザイン。だから暮らしの全てを見つめ、みんなの嬉しそうな顔を想像しながらデザインを考える。つまり、デザインは喜びをリレーしていく仕事なんだ」と話したら中学生の目が輝いてきたんです。

**服部**　なるほど。すでに三木さんのお話の端々にファンタジーがあるという感じです。

**三木**　デザインって、機能的価値と、感性的価値の両方が必要なのね。

**服部**　本来の機能からデザインできればいいのだけれども、不便がなくなってしまったこの時代。今デザインというと、どう表面をコントロールするかというほうにいってしまう人たちがすごく多いと思うのです。

**三木**　だから、タバコの吸い過ぎじゃないけど、デザインのしすぎに注意しましょうという感じがありますよね。

**服部**　なんとうまい比喩(笑)。

**三木**　デザインの痕跡が見えすぎてくると、ちょっと長く付き合いきれないという感じがする。

それでデザインについてあらためて考えると、デザインはその人たちの生き方だとか、暮らし方に関係していて、いわゆるソリューションだけじゃないように思うのね。だから、生き方や暮らし方に重心を置かなきゃと思うわけ。答えを導くことだけがデザインじゃなくて、デザインに触れる人の感覚を開くことが重要なんだと思う。

**服部**　僕らも数年前に考えていたのが、grafらしい自分たちの方程式を作ること。どんなものを放り込んでも、正しいものが生まれてくるのではないか。方程式の違いが個性になればいいな。そこから、生まれる刺激的な状況を楽しみにしている。僕らと三木さんとの共通点は、そういうところにあるのではないか。人間の感覚に近いものをどうやって開くかという三木さんのお話をすてきだなと思います。

# Gallery Talk

**Graphic West 2: Sensory Boxes**

## Shigeki Hattori, Ken Miki

Shigeki Hattori I'm Shigeki Hattori of graf. In conjunction with this exhibition, we were eager to undertake a variety of special events, and especially we wanted to have a discussion with Ken Miki, a graphic designer who, like us, is based in Osaka. For the exhibition itself, rather than showing finished works, we wanted to show as many of our studies as possible. At graf we have people doing graphics side-by-side with other staff members who perform architectural design. As a result, perspectives are constantly shifting back and forth between the two- and three-dimensional, often intersecting. This is what we experience on a daily basis as we were considering how to exhibit.

Our theme this time was how to translate the three-dimensional into the two-dimensional.

We started graf 12 years ago. Around 1993 Japan's economic bubble burst. The reason we began making things is because we felt at odds with the things that surrounded us in our everyday lives during the 80s and 90s, an awful lot of things had sharp, edgy designs. "Why isn't there anything that fits what we want?" we wondered, and that got us to thinking that if there wasn't, then we should try making it ourselves. There are 6 of us in all here today: a carpenter, furniture maker, product designer, filmmaker, chef and me, supervisor of design. It was meeting these colleagues that enabled us to create things in a non-hierarchical environment – we linked horizontally rather than being part of a pyramid structure. What we do is design lifestyles: in other words, clothing, food and our living environment.

It was when I met Miki-san and had a chance to talk with him that I was struck by how odd it was to find someone who thinks so concisely how to give structure to ideas. In talking with him, I was astonished to realize how much he inspired me.

Ken Miki The graf building in Nakanoshima houses a café on the first and second floors, a showroom on the third, designers are in a building next-door, and not far away is the workshop where things are made. Things have been spreading out horizontally at an awesome pace the past several years. I began visiting graf on frequent occasions before all this took place. In those days the 1st floor contained the workshop where you could see chairs being made by the furniture maker, you could peep into the showroom above that, and then have tea up on the 4th floor as you leisurely gazed down on the river flowing by below. Everything was in one building, everything all stacked vertically; but already the structure seemed to embody horizontal links, as opposed to what Hattori-san calls a pyramid structure.

Hattori We kept experimenting how the products we made and the things we selected look new, changing how we combined them.

Miki So there may still be more changes?

Hattori I think new things should be born from the continuous cycles of hardware and software. When new software starts in motion, the moment it overflows, new hardware becomes necessary... That's why we're always making studies. One other thing is how to create situations that make it easiest to collaborate with the people we've met. When the environment is conducive to having the various creative artists you've met come and go, that's all the more inspiring inside. Doing a lot of workshops, creating music together with musicians... we really give shape to a variety of encounters.

Miki Even as we're talking now, I'm stimulated by the way you think, as though I were borrowing your brain. I've been doing a lot of this "brain borrowing" lately, looking for concepts in collaboration with the person I'm talking to. I refer to designing like talking as "talking design." Even now as we're conversing, I have a sensation of key words popping up, connected, one after another. The concept that's aroused and the direction of the design change depending on who I'm talking with.

Hattori It's true – things take on a different shape when someone else is involved or when the environment you work in is different.

Miki The air, the atmosphere of the times also has a great impact, as does the relationship with the client.

Quite a long while ago I once gave a talk about design at my son's middle school. I talked about how their lives are filled with design – even in their pens and notebooks, their desks and chairs. Everything involves design, I said, designed for ease of use or just feeling good. Even places you don't see, the design has been thought out. I also pointed out how design generates feelings of excitement and even thrills, and I said that's why I always think about designing while mulling every aspect of our lives and conjuring up happy faces. Design, I told them, is a job that delivers joy, and what I said brought a sparkle to their eyes.

Hattori There's an element of fantasy in what you say.

Miki Design has to have both functional value and sensual value.

Hattori It's fine when you can design something based on its inherent function, but these are times when there are no longer any inconveniences. Today I think when you talk about design, there are a lot of people who focus on how to control what's on the surface.

Miki That's why it seems we have to be careful not to design too much – in the same way we shouldn't smoke too much.

Hattori That's a good way of putting it!

Miki When the traces of design become too visible, it's hard to stick with such a design for very long. Thinking about design again, I think there's more to it than just a solution; it's also related to the way people live, their lifestyles. And that's why I think you have to put weight on lifestyles. Coming up with an answer isn't the only thing design is all about; I think it's also important to open up feelings in the person who comes in contact with the design.

Hattori A few years ago we decided to create our own formula that would be truly indicative of graf. No matter what you throw into it, the right thing will come out of it, right? I hope a different formula will make for individual uniqueness. I can't wait to see what stimulating things will come out of it. I think that's where we have something in common with you. I really like what you've said about how to open up things close to human feelings.

# Gallery Talk

広告批評展　ひとつの時代の終わりと始まり

## 天野 祐吉、佐藤 可士和／高松 聡、伊藤 直樹、河尻 亨一

**天野祐吉**　このあいだ『CM天気図』というコラムで、ユニクロのヒートテックのコマーシャルを取り上げさせてもらいました。薄着のモデルたちが、真冬の東京、ニューヨーク、パリ、ロンドンの街を歩くシーンに続いて、「冬の着こなしを変える。世界の冬を変える」というコピーが出るCMで、僕はとても面白いと思いました。

**佐藤可士和**　ヒートテックを着ると冬でも薄着で過ごせますからね。

**天野**　僕なんかの若い頃は、冬にはごついオーバーコートを着て、らくだの股引をはいたりして街を歩いていたものです。ところが、この商品が開発されたことで、冬の景色が一変してしまった。ただ温かくて便利だというだけではなく、街の景色という文化現象をも変えてしまう力がある。このコマーシャルは、その変化をしゃれた映像で見せてくれているんですね。

**佐藤**　ヒートテックという商品は発売から数年は日本だけで展開していたのですが、一昨年から世界戦略商品にポジショニングされ、ああいったCMを世界中でオンエアし始めました。欧米のユニクロのCEOたちは、こういった機能性下着は日本でしか売れないと最初は発売に消極的だったのですが、蓋を開けてみれば「服を変え、常識を変え、世界を変えていく」というファーストリテイリングのコーポレートスローガン通りになりました。この仕事で僕が一番うれしかったのは、コミュニケーション戦略もあいまって、新しいマーケットを作れたことですね。すごく画期的な出来事だと思います。まさに景色を変えるというか、常識を変える仕事だったのです。

**天野**　おっしゃる通りです。僕は商品だけでなく、広告も常識を変えることができると考えているんです。

**佐藤**　今日、トークショーが始まる前に展示を見てきたのですが、改めて見るとこれまでの常識を変えたような広告ばかりが並んでいますね。

**天野**　ええ、広告というのは販売のための告知であり、欲望を喚起する手段でもあるのですが、それと同時に「こんな常識にとらわれた生活でいいんですか?」という提言を世の中にするものだと思う。つまり、広告そのものが一種の批評的表現なんですね。『広告批評』では、商品に内在する批評性がうまく表現されているかどうかという物差しで、広告を測ってきたんです。糸井重里さんや川崎徹さん、大貫卓也さん、佐藤雅彦さんの代表的な仕事をはじめ、今回展示させてもらった広告には、いずれも世の中に対するあたたかい提言が含まれていると思っています。

**佐藤**　そうですね。僕は大貫さんに憧れて広告の世界に入ったので、ずっと大貫さんみたいなことをやるのが広告だと思っていたのですが、様々なことを学ぶうちに、自分には自分のやり方があるんじゃないかと考え始めました。モヤモヤが完全に吹っ切れたのは、独立して最初に手がけた「SMAP」からです。

**天野**　その“可士和流”は、最近のユニクロにいたるまで貫かれていますね。
それにしても僕たちは、本当に素晴らしいクリエイターのみなさんと出会えて幸運でした。『広告批評』という雑誌を30年間やってきて、僕らが少しでもいい仕事ができたとすれば、それは優れたクリエイターのおかげです。優れたクリエイターの人たちと、この雑誌の姿勢を支持しつづけてくれた読者の人たちのおかげです。

**河尻亨一**　この展覧会は「広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり」というタイトルになっているのですが、次の時代の新しい『広告批評』があるとすれば、それはどういうものなのかをお二人と考えてみたいと思います。

**高松聡**　ギャラリーの1階には、過去の広告の傑作がたくさん展示されていて、一時代の終わりを偲ぶ印象もありました。つまり、いまはそれだけ世の中と広告が変わりつつあるわけで、それが『広告批評』休刊の大きな理由ではないかと推察しますが、“終わり”と“始まり”の両時代にまたがっている僕などは、ちょっと複雑な気持ちになりました。

**伊藤直樹**　僕は『広告批評』を昔からずっと読んでいるんです。学生の頃のはほとんど全部とってあるくらいです。だから次の“広告批評”が生まれるなら、そこに期するものは大きいですね。

**河尻**　では、次の時代の“広告”を批評するメディアとして、どういったものがふさわしいと思われますか。もちろん、オンラインは視野に入れているのですが。

**高松**　日本の面白い事例が、広告賞を受賞しない限り海外の方になかなか見てもらえない現実がありますから、『オンライン広告批評』はバイリンガル化するといいかもしれません。

**伊藤**　広告を作る側が批評に参加するのも面白いと思います。僕も海外の広告賞の審査をたまにするのですが、広告に対してすごく批評家になれる瞬間があるんです。クリエイティブを客観的な位置から批評することは、作り手にとってすごくいい訓練になりますから。

**河尻**　どういったメディアにするかは、今後、広告がどこに向かうかということと分けて考えられないのですが、そこはいかがでしょう?

**高松**　正確に予測するのは難しいのですが、ひとつのヒントとして「オルタナティブ」という言葉が挙げられるのではないかと思います。

**伊藤**　僕も同感です。高松さんと同じく、僕も途中でクリエイティブに移りましたから、常にオルタナティブなところで仕事をしてきたという自覚があります。

**河尻**　本当に新しくて刺激的な動きはそういうところから出てきますから、時代のオルタナティブをピックアップするメディアは必要でしょうね。

**高松**　ええ、だから『広告批評』には生まれ変わってほしいですね。インタラクティブにしても、いまはそのブランドの生き様が素敵だと思えるようなアクティビティを僕らは発信していくことを求められているのですが、それを批評するメディアがないと新しい試みの価値が世の中に伝わりませんから。

**伊藤**　いまの広告に関して言うと、マスとオルタナティブのハイブリッドを構築する必要があります。アメリカのAKQAというインタラクティブ・エージェンシーが標榜している「Best advertising isn't advertising」も、そういうことを提示しているのだと思います。

**高松**　そうですね。ネット上に成熟した集合知が形成される中、僕らはそことどうケミストリーを起こせるのか、プロとしていかに戦略的に取り組むかを問われるでしょう。

**河尻**　そうなると次の『広告批評』は、表現を読み解くだけでなく、企業や作り手のストラテジーや集合知に深くコミットする必要があるでしょう。

いまは、そうしないと広告と時代の接点を見い出せませんから。“終わり”どころかやることはまだまだありそうです。しかし、その活動を『広告批評』と呼べるかと言えば、難しいものがありますね。根底に流れるマインドは引き継ぎたいのですが。

**伊藤**　「集合知」や「戦略」以外に、僕は広い意味での「デザイン」も重要だと思っています。例えば、建築やプロダクトデザインに広告的コミュニケーションが絡むと面白くなるのではないでしょうか。会社でも周囲に、僕らは10年後はビルを作っているんじゃないかなんて言ってるくらいで。

**河尻**　僕も作ってみたいですね、「広告批評ビル」（笑）。これからの社会が面白くなるような“始まり”を一緒に作っていきましょう。

# Gallery Talk

***Kokoku Hihyo*: End of One Era, Start of Another**

## Yukichi Amano, Kashiwa Sato／ Satoshi Takamatsu, Naoki Ito, Koichi Kawajiri

Yukichi Amano　In my column “Commercial Advertising Weather Map” in the Asahi, I recently wrote about Uniqlo’s commercial for its “Heat Tech” products. The commercial begins with models walking down the streets of Tokyo, New York, Paris and London in midwinter, but thinly clad. Then the copy says: “It’ll change how you dress in winter. It’ll change winter, everywhere.” I think it’s quite interesting as commercials go.

Kashiwa Sato　I guess when you wear Heat Tech, you can go through the winter even thinly dressed.

Amano　When I was young, in winter I went walking around wearing a bulky overcoat and flannel underwear. With the invention of Heat Tech, the winter landscape has now changed completely. But Heat Tech’s more than just warm and convenient; it also has the power even to change a cultural phenomenon, the landscape around town. This commercial demonstrates that change in a very fashionable visual way.

Sato　For the first few years Heat Tech was available only in Japan, but after the company adopted a global strategy in 2008, commercials like that began appearing all over the world. Uniqlo CEOs in the States and in Europe initially weren’t very enthusiastic about launching in their markets, believing functional underwear like Heat Tech would sell only in Japan. But as it turned out, the product is changing clothes, changing conventional wisdom, and changing the world – just like Fast Retailing’s corporate slogan says. The thing that’s made me most happy about this job is, along with a communication strategy, it’s been possible to create new markets – something I think is truly revolutionary. It’s really been a job that can change the landscape and change conventional wisdom.

Amano　You’re absolutely right. I think it’s not just products but also advertising that has the ability to change conventional wisdom.

Sato　I took a look around the exhibition before coming here for this talk show. Looking at the ads on display again, they’re all of a kind that has changed conventional wisdom, aren’t they?

Amano　They are. Advertising serves to announce a product’s being on sale and also acts as a means of arousing desire to own it; but simultaneously I think it also serves to suggest that maybe we should reconsider whether a life focused on conventional wisdom is really what we want. In other words, advertising itself is a kind of critical expression. In *Kokoku Hihyo*, all along we measured advertising using a yardstick of whether or not the critical aspect inherent in the product is expressed well. In the advertisements now on exhibit as well as in the representative works of people like Shigesato Itoi, Toru Kawasaki, Takuya Onuki and Masahiko Sato, I think they all contain well-meant suggestions offered to the world.

Sato　I agree. It was wanting to be like Onuki-san that inspired me to enter the world of advertising, and all along I used to think that advertising is doing things the way he does. But then as I learned all sorts of things I began to think that maybe I had my own way of doing things. My vague feelings of uncertainty got completely blown away starting with my first job after going freelance: “SMAP.”

Amano　Your “Kashiwa” way of doing things is evident in everything you’ve done, right up to your recent Uniqlo work. You and I, we’ve both been very lucky in being able to meet so many wonderful creative people. For 30 years I’ve been working with *Kokoku Hihyo*, and if any work of any good has come out of all this, it’s thanks to outstanding creative artists – as well of course to the readers who continued to give their solid support to the magazine’s stance.

Koichi Kawajiri　The title of this exhibition is “*Kokoku Hihyo*: End of One Era, Start of Another.” If a new era is coming, what will it be like? That’s what I’d like to discuss here with the two of you.

Satoshi Takamatsu　The first floor of the gallery displays many masterpieces of advertising from the past, and I had the impression it was marking the end of an era. Today, advertising’s place in the world is changing, and I imagine this is a major reason behind the end of

# Gallery Talk

***Kokoku Hihyo*: End of One Era, Start of Another**

*Kokoku Hihyo*'s publication. As someone who spans both eras, the one ending and the one starting, my feelings are somewhat ambiguous.

Naoki Ito I've been reading *Kokoku Hihyo* for many years. In fact, I've still got almost every issue from my student days. So if "Kokoku Hihyo" is about to be reborn, I have high expectations for what it's going to be.

Kawajiri As media for critiquing the "advertising" of the next era, what do you think would be appropriate? I'm including online media, of course.

Takamatsu Japan's interesting ads rarely gain any attention overseas unless they win some advertising award, so it might help if the online *Kokoku Hihyo* were bilingual.

Ito I think it's interesting when those who create advertising participate in their criticism. From time to time I'm invited to serve as a judge for overseas advertising awards, and there are moments when you can become a really good critic of advertising. Critiquing creative works from an objective position makes for really good training for someone on the creating side.

Kawajiri The kind of media we should make will inevitably be linked to what direction advertising takes going forward, don't you think?

Takamatsu It's difficult to project with any accuracy, but as a hint I would suggest the word "alternative."

Ito I agree. Ever since I, like Takamatsu-san, shifted to creative work, I've always had the feeling of having worked in alternative areas.

Kawajiri It's from places like that that truly new and stimulating movements start, so media are necessary that deal with such alternatives of the times.

Takamatsu Right – and that's why I hope it will be reborn as the new *Kokoku Hihyo*. In the case of interactive too, today we're called on to launch activities that suggest that the stance of a given brand is attractive; and without media to critique it, the value of new forays won't be known by the world at large.

Ito As for current advertising, there's a need to forge a hybrid of mass and alternative advertising. I think this is what AKQA, the American interactive agency, is suggesting with its slogan "The best advertising isn't advertising."

Takamatsu I agree. Amid the formation of a mature collective intelligence on the Internet, we're going to have to ask ourselves how to generate chemistry there, and how to approach this strategically as professionals.

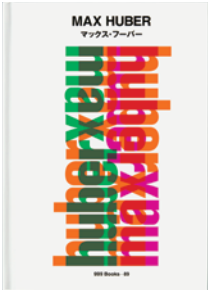
Kawajiri If that's so, then the next *Kokoku Hihyo* will have to not only decipher the expression but also be deeply committed to the strategy and collective intelligence of the corporation or producer. That's so because nowadays unless you do this, no point of contact can be found between advertising and the times. Far from being "the end," there would still seem to be much to do. But whether or not such activities can be called *Kokoku Hihyo* is a difficult issue. I do want to carry on the underlying mindset, though.

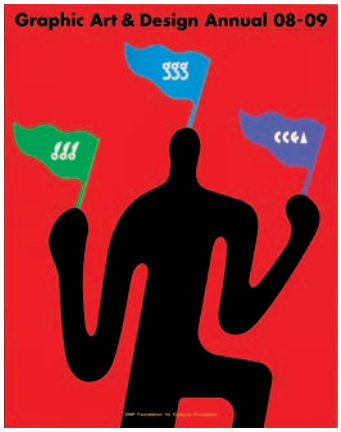
Ito Besides collective intelligence and strategy, I think design in the broad sense is also important. For example, when advertising communication gets mixed in with architecture or product design, I think things get interesting. At work, the people around are even saying that 10 years from now we'll be building buildings.

Kawajiri I'd like to try my hand at that myself: the "Kokoku Hihyo Building!" Together, let's make the start of that new era one in which society will become even more interesting than before.

# Publications 2009−2010

出版活動



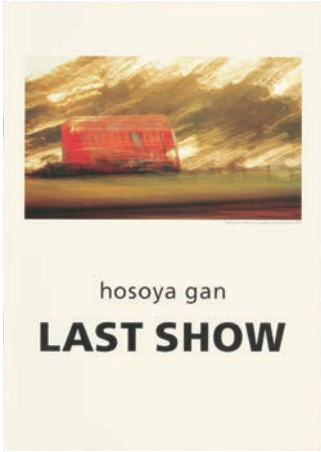



■ Graphic Art & Design Annual 08-09

■ ggg Books 89　マックス・フーバー
■ ggg Books 90　細谷巌
■ ggg Books 91　山形季央
■ ggg Books 92　北川一成

■ DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター1953−1979
■ DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

■ 矢萩喜從郎　アトラクティヴ・ヴィジョン
■ hosoya gan　LAST SHOW




■ ggg Books 89　Max Huber
■ ggg Books 90　Gan Hosoya
■ ggg Books 91　Toshio Yamagata
■ ggg Books 92　Issay Kitagawa

■ DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ
Ikko Tanaka Posters 1953−1979
■ DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

■ Kijuro Yahagi　Attractive Vision
■ Hosoya Gan　Last Show

③

# アーカイブ事業

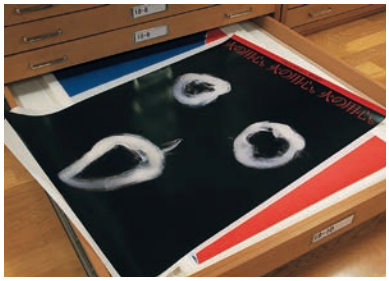
Archiving

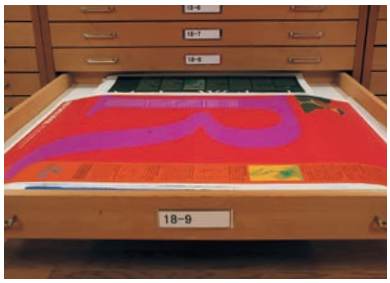
# DNP Graphic Design Archives

## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ

DNP文化振興財団は、2000年に「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ」を立ち上げ、歴史的に優れた作品の収集・保存・整理を行ってきました。現在のコレクションは、日本人作家64名、約7,300点に及び、海外作家の収蔵作品も500点以上になりました。
今年度の主なアーカイブ活動は、2008年の田中一光アーカイブにつづき、2009年8月、福田繁雄氏のご遺族より60,000点余りのポスターをご寄贈いただき、福田繁雄ポスターアーカイブを設立しました。福田氏のポスターの一部は、永久保存用としてCCGAに搬入され、アーカイブのお披露目と追悼をかねて、2010年3月にgggで展覧会が開催されました（本展は年内にCCGAとdddギャラリーに巡回）。また、永井一正氏よりポスターや版画作品等約25,000点をご寄贈いただくことになり、データベース作成作業を開始しました。
コレクション普及の展覧会活動としては、カナダのトロント日本文化センターで開催された「花開くグラフィックス 佐藤晃一ポスター展」に、DNPグラフィックデザイン・アーカイブ所蔵の佐藤晃一ポスター作品から70点の貸出を行いました。
今後は、田中一光アーカイブ、福田繁雄ポスターアーカイブを中心とした事業を推進し、本アーカイブの整備と一般への公開や、海外への寄贈なども視野に入れ活動していきます。

In 2000 the DNP Foundation for Cultural Promotion launched the DNP Graphic Design Archives to collect, preserve and catalogue graphic works of outstanding historical value. Currently the collection includes some 7,300 works by 64 Japanese graphic designers and more than 500 graphic works by overseas designers.
After concentrating on cataloguing the works of Ikko Tanaka in 2008, in 2009 the Archives' activities were devoted largely to creating an archive of the posters of Shigeo Fukuda, following a donation by the family of the late master designer of more than 60,000 posters. A selection of Mr. Fukuda's posters were transferred to CCGA for permanent preservation, and in March 2010, to honor Mr. Fukuda and mark the launch of his archive, an exhibition was held at ggg (subsequently traveling this year to CCGA and ddd gallery).
Another major project of 2009 involved starting preparation of a database for approximately 25,000 posters, prints, etc. donated to the Archives by Kazumasa Nagai.
In conjunction with the Archives' commitment to exhibiting its collection more widely, a loan of 70 posters by Koichi Sato was made for "Graphics in Bloom," a show of his posters held at the Japan Foundation's Japan Cultural Centre in Toronto, Canada.
Going forward, the DNP Graphic Design Archives' operations will continue to focus on the Ikko Tanaka Archives and the Shigeo Fukuda Poster Archives, as well as on activities in cataloguing and exhibiting its works to the public. Donations to overseas collections will also be probed.





## 収蔵作家

青葉 益輝　秋田 寛　秋月 繁　秋山 育
秋山 具義　浅葉 克己　新井 苑子　粟津 潔
五十嵐 威暢　伊藤 憲治　宇野 亜喜良　蝦名 龍郎
太田 徹也　大橋 正　葛西 薫　勝井 三雄
上條 喬久　亀倉 雄策　河村 要助　河原 敏文
木田 安彦　北川 一成　木村 勝　木村 恒久
清原 悦志　K2　小島 良平　佐藤 可士和
佐藤 晃一　U.G.サトー　佐野 研二郎　澤田 泰廣
下谷 二助　新村 則人　鈴木 八朗　副田 高行
タイクーングラフィックス　田中 一光　戸田 正寿
永井 一史　永井 一正　中島 英樹　仲條 正義
中村 誠　灘本 唯人　新島 実　服部 一成
早川 良雄　平野 甲賀　福島 治　福田 繁雄
松永 真　三木 健　宮田 識　森本 千絵
矢萩 喜從郎　矢吹 申彦　山形 季央　山口 はるみ
山本 容子　湯村 輝彦　横尾 忠則　吉田 カツ
若尾 真一郎

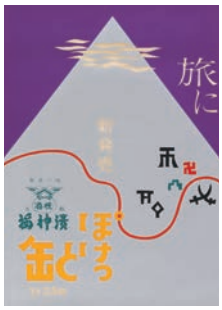
## Artists List

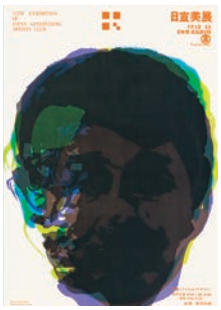
AOBA Masuteru　AKITA Kan　AKIZUKI Shigeru　AKIYAMA Iku
AKIYAMA Gugi　ASABA Katsumi　ARAI Sonoko　AWAZU Kiyoshi
IGARASHI Takenobu　ITOH Kenji　UNO Akira　EBINA Tatsuo
OHTA Tetsuya　OHASHI Tadashi　KASAI Kaoru　KATSUI Mitsuo
KAMIJYO Takahisa　KAMEKURA Yusaku　KAWAMURA Yosuke　KAWAHARA Toshifumi
KIDA Yasuhiko　KITAGAWA Issay　KIMURA Katsu　KIMURA Tsunehisa
KIYOHARA Etsushi　K2　KOJIMA Ryohei　SATO Kashiwa
SATO Koichi　SATO U.G.　SANO Kenjiro　SAWADA Yasuhiro
SHIMOTANI Nisuke　SHINMURA Norito　SUZUKI Hachiro　SOEDA Takayuki
TYCOON GRAPHICS　TANAKA Ikko　TODA Seiju　NAGAI Kazufumi
NAGAI Kazumasa　NAKAJIMA Hideki　NAKAJO Masayoshi　NAKAMURA Makoto
NADAMOTO Tadahito　NIIJIMA Minoru　HATTORI Kazunari　HAYAKAWA Yoshio
HIRANO Kouga　FUKUSHIMA Osamu　FUKUDA Shigeo　MATSUNAGA Shin
MIKI Ken　MIYATA Satoru　MORIMOTO Chie　YAHAGI Kijuro
YABUKI Nobuhiko　YAMAGATA Toshio　YAMAGUCHI Harumi　YAMAMOTO Yoko
YUMURA Teruhiko　YOKOO Tadanori　YOSHIDA Katsu　WAKAO Shinichiro

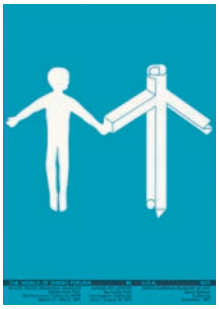
DNP Graphic Design Archives

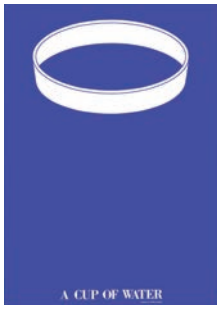
# Shigeo Fukuda Poster Archives

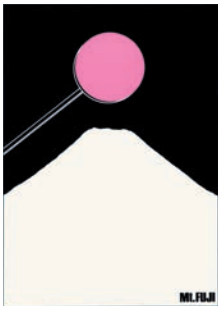
福田繁雄ポスターアーカイブ

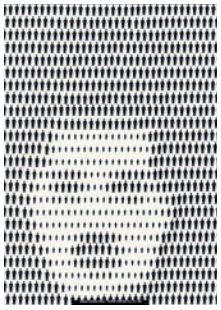










収蔵作品の一部　Part of the archive collection

作業風景　Archiving the collection

# Graphics in Bloom: Koichi Sato Poster Exhibition

**September 2 – November 7, 2009**

## 花開くグラフィックス　佐藤晃一ポスター展

カナダのトロント日本文化センターで、「花開くグラフィックス 佐藤晃一ポスター展」が開催され、DNPグラフィックデザイン・アーカイブ所蔵の佐藤晃一ポスター作品から70点の貸出を行った。
国際交流基金トロント日本文化センターは、日本デザインコミッティー協力の下、1988年以降、永井一正、田中一光、亀倉雄策、福田繁雄、松永真、佐藤卓、原研哉らの個展を開催、松永氏他はその後サンパウロ等に巡回するなど、積極的に日本文化のひとつであるグラフィックデザインを紹介してきた。
今回の展覧会では、佐藤氏の作品の色彩とイメージの鮮烈さが、来場者に目もくらむようなショックを与えた。また、印刷をはじめ、日本のポスター制作技術の秀逸さが、カナダでは到底得がたいものであるとして、特に地元のデザイナー達の羨望を煽った。さらに、70年代、80年代の旧作品は、未だに全くインパクトを失っておらず、佐藤デザインの超時代性に、トロントの来場者は感銘を受けたようだ。
実質開館日数：51日間、総入場者数は、3,182名。

This exhibition, held at the Japan Foundation's Japan Cultural Centre in Toronto, was a show of 70 posters by Koichi Sato on loan from the DNP Graphic Design Archives. Since 1988, the Centre, working in cooperation with the Japan Design Committee, has proactively introduced graphic design as an integral facet of Japanese culture by hosting one-man exhibitions by graphic designers including Kazumasa Nagai, Ikko Tanaka, Yusaku Kamekura, Shigeo Fukuda, Shin Matsunaga, Taku Satoh and Kenya Hara, Matsunaga and some others also traveled to São Paulo etc.
At this exhibition, the brilliance of Sato's color palette and imagery both stunned and dazzled visitors. Local designers were especially envious of the superlative printing and other poster production skills of Japan, achievements of a level unattainable in Canada today. Visitors were also enthralled by the enduring timelessness of Sato's early design works, their impact no less forceful now than when they were created during the 70s and 80s. During its 51-day run, the show attracted a total of 3,182 visitors.

4

# 国際交流事業

International Exchange

# Support of AGI Japan Membership Secretariat

## AGI日本会員事務局　支援活動

DNP文化振興財団は、国際交流事業を推進するテーマのひとつとして、2009年6月よりAGI日本会員事務局の支援活動を開始しました。
主な支援内容は、日本会員の交流の場を提供する、AGI本部からの情報を要訳し日本会員へ配信する、日本のデザイン情報を海外へ配信する、そして年に1度のAGI総会へ参加し概要報告を行う、などです。

### AGI（Alliance Graphique Internationale）＝国際グラフィック連盟とは

1952年、国・文化を越えて興味や友情を分かち合う事を目的に創設されたグラフィックデザイナーの団体です。10カ国65名ではじまった会は、現在世界32カ国、約350名の会員で構成されています。
会員資格として、クライアント依頼型のコマーシャル分野での活躍のみならず、社会に対する貢献度の高さや、新たなアイディアや表現、技術などを社会に提示できる作家性が強く求められます。日本会員は現在25名、会長は浅葉克己氏、事務局長は新島実氏が務められています。

### ポーラ・シェア（AGI会長）より

グラフィックデザインは単なる職業（プロフェッション）ではない。それは天職（コーリング）である。グラフィックデザイナーは、見る者の心に響くと同時に、情報を正確に伝達し、かつクライアントのビジネス上のあるいは企業としてのニーズを満たすコミュニケーションを創造しなければならない。しかし、卓越した領域に真に踏み込んだ献身的なグラフィックデザイナーとは、そうした目的を達成するばかりでなく、「デザインがいかなるものになり得るか」、期待を高めるような者である。
AGIは、そうした期待を絶えず高めることを目標に、卓越性の追求に常に献身する、志を同じくするデザイナーからなる国際的組織である。新たにAGIの会員になるためには、会員からの指名と選挙を経なければならない。日本のAGI会員は、40年以上にわたって、自らの重要な作品を通じてグラフィックデザインの営みにレベルの高い美学、ウィット、社会的良心をもたらし、他の会員そして世界中の人々にインスピレーションと影響を与えてきた。グラフィックアートの美を思うとき、田中一光を思い出す。ウィットなら福田繁雄、環境なら原研哉。私は日本の大勢の優れたデザイナーとの面識を得、彼らから学び、そのインスピレーションを受け取ることができたことをたいへん幸せに思う。そして日本の会員がますます増えることを、また、新しい分野の若い日本人デザイナーの入会を期待している。我々がつねに新領域を開拓し、「デザインがいかなるものになり得るか」という期待を高めることができるという確信を、新たに持ちたいと願っている。

写真：クリスチャン・ウィトキン　Photo：Christian Witkin

### AGI総会イスタンブール2009
### 2009年10月13日（火）- 10月17日（土）

本年、AGI日本会員事務局としてはじめてAGI総会に参加しました。イスタンブールにて行われた総会2009には、会員とその関係者合わせて、世界各国から約120名が集結。総会イベントの一つとして行われた「アラン・フレッチャー／福田繁雄／モルテザ・モマヤズ」追悼展用に、財団から福田氏のポスター作品資料を提供しました。

In June 2009 the DNP Foundation for Cultural Promotion launched activities to support the Japan Membership Secretariat of AGI in line with its commitment to promote international exchanges. Support is carried out primarily in the forms of providing venues for exchanges among Japanese members, translating and distributing information from AGI headquarters to Japanese members, dispatching Japanese design information abroad, and participating in and reporting on the annual AGI Congress.

AGI (Alliance Graphique Internationale) is an organization of graphic designers founded in 1952 with the aim of sharing friendship and mutual interests across all national and cultural boundaries. Inaugurated with 65 members in 10 countries, AGI today has some 350 members in 32 countries. Membership qualifications include not only activity in a commercial area but also outstanding contributions to society plus artistry capable of presenting new ideas, means of artistic expression and technology to society. There are currently 25 Japanese members; Katsumi Asaba serves as their president and Minoru Niijima as secretary-general.

### A Message from Paula Scher, President, AGI

Graphic Design is more than a profession, it's a calling. A graphic designer needs to create communications that resonate with audiences, while accurately conveying the information, and satisfy business or institutional needs of clients. But a dedicated graphic designer, one who is truly committed to excellence, is the one who accomplishes these goals, while at the same time, raises the expectations about what design can be.

AGI (Alliance Graphique Internationale) is an international organization of like-minded designers who are dedicated to the continual pursuit of excellence with the goal of continually raising those expectations. AGI members are all nominated and elected into the organization by their peers. The Japanese members of AGI have brought a very special level of aesthetics, wit, social conscience to the practice of graphic design and have inspired and influenced the other AGI members and the whole world through their important work for over 40 years. When I think of graphic beauty I think of Ikko Tanaka, when I think of wit, it's Shigeo Fukuda, and when I think of our environment it's Kenya Hara. I feel amazingly fortunate to have been able to know so many of Japan's best designers personally, to learn from them and be inspired by them. I am looking forward to growth of Japanese membership, the introduction of young Japanese designers in new disciplines, and a renewed conviction that we are always capable of inventing new territories and raising the expectations of what design can be.

### AGI Congress Istanbul 2009 October 13-17, 2009

This year, for the first time the Foundation participated in the AGI Congress as the Japan Membership Secretariat. The 2009 Congress, held in Istanbul, Turkey, attracted some 120 members and affiliated participants from all over the world. The Foundation provided poster works by Shigeo Fukuda for a joint exhibition held in conjunction with the Congress honoring the memories of Mr. Fukuda as well as Alan Fletcher and Morteza Momayez.

写真(一部)：浅葉克己氏
Photos (in part) : Katsumi Asaba

# 2009 Tokyo Art Directors Club Awards Exhibition in Frankfurt

**November 26, 2009–February 14, 2010**

## 2009ADC展 ドイツ・フランクフルト巡回

昨年の夏から秋にかけてギンザ・グラフィック・ギャラリー、クリエイションギャラリーG8、dddギャラリーで開催された「2009 ADC展」が、ドイツ・フランクフルト、マイン河畔の一角にあるフランクフルト市立応用芸術博物館に巡回され、日本の広告・グラフィックデザインの今が紹介された。フランクフルトでの展覧会名は「Tokyo Art Directors Club Award 2009」、会期は2009年11月26日から2010年2月14日まで開催された。

ドイツでの東京ADCの紹介は今回2回目となる。（1回目は1960年にミュンヘンで開催。）日本のグラフィックデザインはドイツでの評価は高いが、いままでほとんど紹介されてこなかった。今日、インターネット上で世界中のグラフィックデザインを見ることはたやすい。しかし、今回の開催目的の一つは、実物のポスターや広告を見たり触れたりすることによって来場者に、紙や印刷、繊細なデザインの質を感じてもらい、日本のグラフィックデザインの素晴らしさを伝えることだった。この展覧会には専門家や学生、また一般の人々も多数訪れ、大変注目が集まった。3ヶ月足らずで約12,000人の集客があり、美術館の学芸員の方から、今後も定期的に巡回して欲しいという声も上がった。

オープニングとレクチャーには、フランクフルトのデザイン関係者が150人以上集まり盛況だった。パネルディスカッションでは、「日本とドイツのコミュニケーションデザインの未来」をテーマに、日本からは、東京ADCを代表してアートディレクターの永井一史氏が、ドイツからは、タイポグラファーでデザイン史家のフリードリッヒ・フリーデル教授、ドイツADC理事のステファン・フォーゲル博士等が出演し、白熱した意見が取り交わされた。

The exhibition marked only the second occasion the Tokyo ADC has been introduced in Germany, the first being a show held in Munich back in 1960, and this time at Frankfurt Museum für Angewandte Kunst. Although Japanese graphic design is held in high regard in Germany, only rarely has it actually been shown there. Today, the Internet makes it possible to view graphic design from all over the world with remarkable ease. However, one aim in holding this exhibition was to give visitors the opportunity to see actual posters and advertising first-hand, thereby enabling them to have a better feeling of the quality of their paper, printing and detailed design, and thus to convey the brilliance of Japanese graphic design. During its run, the show attracted a large number of visitors and garnered great attention. So large were the attendance numbers – close to 12,000 visitors during the span of less than three months – that the museum curator voiced interest in holding subsequent shows on a continuing basis.

The exhibition's opening and lecture program attracted more than 150 people involved in design in Frankfurt. An accompanying panel discussion focused on the theme of the future of communication design in Japan and Germany. Among those participating in this lively exchange of views were art director Kazufumi Nagai representing the Tokyo ADC, typographer and design historian Prof. Friedrich Friedl, and German ADC board member Dr. Stephan Vogel.

TOKYO ADC AWARD 2009
26.11.2009-
14.02.2010
Ausstellung des Wettbewerbs des Tokyo Art Directors Club 2009
im Museum für Angewandte Kunst, Frankfurt am Main
Schaumainkai 17 • 60948 Frankfurt am Main
Öffnungszeiten:
Di. bis So. 10.00 bis 17.00 Uhr
Mi. 10.00 bis 21.00 Uhr
ADC

ADC
ADC

5

# 研究助成事業

Research Support

# 研究助成に期待すること

広本 伸幸
アート・アドバイザー、桜美林大学講師

【文化】(culture)...「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展のニュアンスが強い文明と区別する。」

広辞苑には上記のように定義される文化。それを「ふるいおこして物事を盛んにする」振興。DNP文化振興財団が研究助成の対象とすべきは、言うまでもなく上記の学問・芸術の分野に関してであろう。公的な財団として機能するためには、従来のDNP自前の施設運営のみならず、今後の多岐に亘る開かれた助成活動が期待される。
具体的に下記3点の提案をさせていただきたい。
1. 他美術館・ギャラリーとのコラボレーション(共同研究)の推進
2. DNP3施設で開催される展覧会の地方巡回
3. 地方中小美術館の研究助成(企画展覧会支援)

1. 外部美術館やギャラリーとの関係をさらに実質あるものとするために、日本の西洋美術史研究者の研究を目的とする海外美術館派遣の募集。すでに実施されているものであるが、ルーブル美術館から研究者の来日時、日本の研究者を含めたシンポジウムないしパネルディスカッションの計画的開催。それら研究成果の出版及び大学等への配布。
2. 地方の公立美術館では専門学芸員不在のためもあり、グラフィックデザイン関連の展覧会が皆無の状況である。ggg、dddで開催される展覧会の地方美術館巡回を実現することが望まれる。一つの展覧会が小規模であれば複数の展覧会を組み合わせることも可能であろう。
同様に現代アメリカ美術に関する展覧会の機会が少ない公立美術館に対して、CCGAの優れたコレクションによる展覧会巡回は必要と考えられる。
3. 公立美術館の事業予算は年々削減の一途をたどっているが、中でも展覧会予算の削減が著しい。市立、町立ともなれば一回の展覧会予算が100万円以下のところも少なくない。単館企画のオリジナリティをもった展覧会には何らかの経済的支援が必要である。
日本で開催される展覧会が研究活動と呼べるか、疑問な点もあるかもしれない。テレビ局や新聞社文化事業部主催による《○○美術館展》と称されるコレクション展の類は、一種の移動コレクション展、巡回常設展とでもいうもので研究活動とは呼べない。しかし、展覧会開催の収支が黒字となる入館者の大量動員が見込めるこの種の展覧会は援助を必要としないため助成対象から除外してかまわないであろう。
一方、主に公立の地方美術館が企画する地域の美術史やその延長としての現代の美術活動をテーマとする展覧会は地道な研究成果である。入館者数は上記大型企画展の百分の一以下かもしれないが、欧米の西欧近現代美術史と比較して著しく遅れをとっている日本近現代美術史の底辺を広げていく意味でも、それら小型の展覧会には重要な意味があるものと思われる。

上記助成を実施する上で想定される煩雑な運営事務については、外部委託が可能と考えられる。
あくまで叩き台として例をあげれば、
1. に関しては美術史学会あるいは東京大学、東京藝術大学などの美術史研究室などとの連携。
2. に関してはDNP artscape上で、あるいは美術館連絡協議会を通じて、開催希望館を募集。
3. に関しては美術館連絡協議会を介して、協賛依頼館を募集。

これら助成に関しての最終決定は、有識者でありアートの現場経験者でもあるDNP文化振興財団評議員の方々の意見が有効となるであろう。その前に各助成の内容、件数、予算に関して一部評議員による作業部会開催が必要となるかもしれない。
国をはじめ、地方公共団体の文化予算が大幅に削減されつつある現在、DNP文化振興財団による研究助成の実現は重要な事業に違いない。

最後に具体的提案というより希望することが一つ。
文化・芸術の推進者はデザイナー、クリエイター、アーティストなどの個人である。彼ら貴重な人材の活動に対しての国および地方公共団体による助成は、削減される以前にほとんど存在していないのが現状である。
既存の財団、企業メセナ協議会による助成対象は組織および団体が主となり、個人に対しての助成はきわめて小規模であると言わざるをえない。
米国のPollock-Krasner Foundationのように、年齢、国籍を問わず申請さえすればアーティストに対して支援を行うのが理想であるが、日本の実情を踏まえた支援に関して今後議論が行われるべきであろう。
たとえば、一般大学に比較して学費の高い美術大学にとって、新しい奨学金制度がDNP文化振興財団によって設けられることは歓迎されるに違いない。奨学金はアルバイトのため制作時間が削られている学生のためのみならず、奨学生を目指して良い作品を制作する大きなモチベーションともなるであろう。
対象をデザイン科の学生に限定することなく、幅広い分野の美術専攻学生のための奨学金制度実現を期待したい。
今作られつつある作品の集積こそが、未来の文化形成の基礎なのであるから。

# Aspirations for Research Funding

## Nobuyuki Hiromoto

**Art Advisor & Lecturer at J.F. Obirin University**

As an organization that by its own identity takes the promotion of culture as its overriding mission, the DNP Foundation for Cultural Promotion should inherently be funding research in scholarly and artistic pursuits. In order for it to function as a public foundation, it is hoped that the Foundation, in addition to continuing to operate DNP's own facilities, will carry out funding activities across a broad spectrum going forward.

Specifically, I wish to propose the following pursuits: 1) collaboration with museums and art galleries; 2) traveling exhibitions in Japan of works originally shown at DNP's three galleries; and 3) funding of research and financial assistance to mount exhibitions at smaller art museums located outside Japan's major urban centers.

1) In order to make the relationship with museums and art galleries more fruitful, a funding program should be instituted to send Japanese scholars of Western art history to overseas museums to conduct research. Also, to enhance a program already under way, when researchers from the Louvre come to Japan, symposiums and panel discussions should be conducted on a regular basis and their research findings should be published and distributed to universities, etc.
2) Today, virtually no graphic design exhibitions are held at public art museums outside the major cities, partly owing to the absence of specialized curators. Exhibitions held at ggg and ddd should be sent traveling to such museums. In cases when the scale of the original gallery exhibition is small, multiple exhibitions could be combined into a larger one. Similarly, because public art museums have few opportunities to hold exhibitions relating to contemporary American art, traveling exhibitions should be organized of the outstanding works in the CCGA collection.
3) The operating budgets of the nation's public art museums are being cut year after year, and the situation surrounding exhibition budgeting is especially severe. At museums at the municipal level or lower, in many instances the budget per exhibition is less than 1 million yen. Economic assistance of some kind is needed to support highly original exhibitions at individual venues.
Whether or not exhibitions held in Japan can be called research activities may be open to question. Art museum exhibitions supported by TV stations or newspaper publishing houses qualify as traveling exhibitions of collections, permanent or otherwise, and cannot be called research activities. However, because exhibitions of that kind can be expected to attract large numbers of visitors – and thus turn a profit – they can be excluded as funding targets by the Foundation.
By contrast, exhibitions mounted primarily at local art museums, which introduce the regional art history and, by extension, contemporary art activities, are the result of assiduous scholarship. The number of visitors to these exhibitions may not reach 1 percent of the number who visit the large-scale exhibitions noted above, but in order to give greater breadth to Japanese contemporary art, which lags markedly compared to Western contemporary art, such small-scale exhibitions have important meaning.

To perform the complex and time-consuming administrative work thought necessary to implement the foregoing funding programs, outsourcing is a conceivable option. As a very rough idea of resources that might be tapped, I suggest the following:
In conjunction with 1): liaison with The Japan Art History Society, the Department of Art History of Tokyo University and Tokyo University of the Arts, etc.
In conjunction with 2): call for museums to hold exhibits via the DNP "artscape" website or through The Japan Association of Art Museums.
In conjunction with 3): call for cooperating museums through The Japan Association of Art Museums.

To reach final decisions relating to these funding initiatives, it would be effective to hear the opinions of the councilors of the DNP Foundation for Cultural Promotion, who are well versed in these areas and who have experience in actual art production. First, it may be necessary to hold working committee meetings comprised of a certain number of councilors to consider the funding content, number of programs to be funded, and budgeting.
Today, at a time when cultural budgeting is being cut substantially at both the national and local levels, the realization of research funding by the DNP Foundation for Cultural Promotion is unquestionably a task of utmost importance.

In closing, I wish to state not a specific suggestion but rather a hope.
The true promoters of culture and the arts are all those individuals who engage in design, art and other creative work. Today, instead of facing funding cuts, funding of the activities of these precious human assets by national and local organizations and groups is virtually non-existent from the outset.
The Association for Corporate Support of the Arts, one of the few foundations that does support the arts, provides funding primarily to organizations and groups; its funding of individuals is of extremely small scale.
The ideal is an organization like The Pollock-Krasner Foundation of the United States, which supports artists of any age and nationality who apply for consideration. The situation specific to Japan must be considered, however, when undertaking any discussions on such support in the future.
As an example, the nation's art universities, which must charge higher tuitions than typical universities, would inarguably welcome the creation of a new scholarship program by the DNP Foundation for Cultural Promotion. Scholarships would not only be a boon to students whose creative time is eroded by the need to earn extra money, but would also be a great motivation for scholarship hopefuls to produce outstanding creative works.
Instead of limiting recipients to students in design courses, I would like to see the creation of a scholarship program for art students spanning a broad range of related areas. My reason is clear: the works being created today will form the basis for the formation of the culture of tomorrow.

# 2009-2010 Financial Support Activities

## 2009−10年度助成実績

1

| | | | |
|---|---|---|---|
| 対 象 | 第21回すかがわ国際短編映画祭へ協賛 | Target | 21st Sukagawa International Short Film Festival |
| 主 催 | すかがわ国際短編映画祭実行委員／<br>須賀川市教育委員会 | Organizers | Sukagawa International Short Film Festival Executive Committee,<br>Sukagawa Board of Education |
| 年 月 | 2009/5 | Date | May, 2009 |
| 金 額 | 30,000円 | Amount | JPY30,000 |
| 備 考 | 短編映画フェスティバルおよびコンペ。 | Remarks | Short film festival and competition |

2

| | | | |
|---|---|---|---|
| 対 象 | 須賀川地区高等学校美術部研修会への助成 | Target | Sukagawa Area High School Art Departments Training Session |
| 主 催 | 須賀川地区高等学校美術部連盟 | Organizer | Federation of Sukagawa Area High School Art Departments |
| 年 月 | 2009/5 | Date | May, 2009 |
| 金 額 | 50,000円 | Amount | JPY50,000 |
| 備 考 | 須賀川地区内4つの県立高校美術部による合同研修会として、<br>CCGA展覧会を観覧。<br>送迎バスの手配、ギャラリートークを行った。 | Remarks | Visit to CCGA exhibition as joint training session for the art departments of 4 prefectural high schools in the Sukagawa area; provision of transport and holding of gallery talk |

3

| | | | |
|---|---|---|---|
| 対 象 | 「版で発信する作家たち2009」展へ協賛 | Target | “Print Art in Fukushima 2009” exhibition |
| 主 催 | 版で発信する作家たち展実行委員会 | Organizer | Print Art in Fukushima Executive Committee |
| 年 月 | 2009/9 | Date | September, 2009 |
| 金 額 | 60,000円 | Amount | JPY60,000 |
| 備 考 | 福島県央地区の複数の画廊が共催する地元作家中心の版画展。<br>会期9/5〜9/13、5会場で同時開催。<br>来場者数約300名 | Remarks | Print exhibition, mostly of local artists, jointly held by multiple galleries in central Fukushima Prefecture; simultaneously held at 5 venues September 5-13, 2009; approx. 300 visitors |

4

| | | | |
|---|---|---|---|
| 対 象 | 第21回田善顕彰版画展へ協賛 | Target | “21st Denzen Print Exhibition” |
| 主 催 | 須賀川商工会議所青年部／<br>須賀川市教育委員会後援 | Organizers | Sukagawa Chamber of Commerce Youth Division,<br>Sukagawa Board of Education |
| 年 月 | 2010/2 | Date | February, 2010 |
| 金 額 | 30,000円 | Amount | JPY30,000 |
| 備 考 | 須賀川出身の江戸期の銅版画家、<br>亜欧堂田善（あおうどうでんぜん）顕彰を目的とする、<br>市内小中学生対象の版画コンクール。 | Remarks | Print contest for Sukagawa elementary and middle school students aimed at spreading recognition of copperplate artist and Sukagawa native Aodo Denzen (1748-1822) |

## 09 TDC展

**会期**＝2009年4月3日―25日
**受賞作家**＝○グランプリ＝中村勇吾＋THA　○TDC賞＝浅葉克己、植原亮輔、レス・ソン、立花文穂、中村至男　○インタラクティブデザイン賞＝該当なし　○タイプデザイン賞＝エマヌエラ・コニディ　○ブックデザイン賞＝井上嗣也　○特別賞＝仲條正義
**展示概要**＝毎年先端的なタイポグラフィ作品が一堂に会するコンペティションとしてその名を確固たるものにしつつある、東京タイプディレクターズクラブが主催する国際デザインコンペティション「東京TDC賞」の成果を紹介するTDC展。国内外での評価・注目がますます高まる「東京TDC賞」の、2008年秋の公募に寄せられた3,316作品（国内：2,386作品、海外27カ国より930作品）を数える応募作品の中から、厳正な審査の結果選ばれた「東京TDC賞2009」。この受賞作品9作品をはじめ、ノミネート作品、優秀作品をあわせた約160作品を展覧。最新鋭の作品や、新しい可能性を含んだ実験作品など、日本だけにとどまらない、世界からのエッジの効いた作品の数々が所狭しと並び、日本発のユニークなデザインセレクションの妙を展開した。

## 矢萩喜從郎展［Magnetic Vision／新作100点］

**会期**＝2009年5月8日―30日
**作家略歴**＝1952年山形県生まれ。建築家、デザイナー。早稲田大学大学院理工学研究科修了。慶應義塾大学理工学部非常勤講師。建築、ランドスケープ、グラフィック、プロダクト、家具、写真、アート、彫刻、評論を手がける。ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ特別賞（80）／金賞（90）、原弘賞（88）、桑沢賞（95）、講談社出版文化賞ブックデザイン賞（95）、勝見勝賞（99）等。『VISIONS OF JAPAN』（91）ほか著書、作品集多数。また建築作品「市川の家」（2003）で2004年千葉県建築文化奨励賞、「コンカード横浜」（08）で神奈川県建築コンクール奨励賞を受賞。
**展示概要**＝100点におよぶ新作で臨んだ「Magnetic Vision（引き寄せられる視野）」は、1988年「Shot by Sight」から続く視覚世界への探求の新たな展開。虫眼鏡の原理の逆、レンズの内側の世界がその周囲の景色まで含んだより広い世界を凝縮した状態、つまり周囲の世界を磁力によって引き寄せたような映像とすることで、作品のフレームに切り取られた映像が周囲と連綿と続いているという意識を掬い上げ、意識して見ている世界に肉薄しようという試み。

## マックス・フーバー展

**会期**＝2009年6月5日―29日
**作家略歴**＝1919年スイス、バール生まれ。クンストゲヴェルベシューレ工芸専門学校（現チューリッヒ芸術大学）卒業後、40年ボッジェーリ・スタジオ（ミラノ）勤務。41年スイスに帰国、抽象芸術団体「アリアンツ」メンバーとなる。45年ミラノへ移住。第8回ミラノトリエンナーレ、エイナウディ出版、ラ・リナシェンテ等のグラフィック、ブランディングのほか、カスティリオーニ兄弟との仕事も多数。ブルーノ・ムナーリ等と共に具体芸術運動（MAC）の立ち上げに参加。92年11月16日逝去。
**展示概要**＝前衛的な美的感覚を巧みに商業デザインに持ち込んだ一人のグラフィックデザイナー＝商業デザイナーとしてのマックス・フーバーに焦点をあてた展覧会。モンツァレースのポスター、エイナウディやエタスの雑誌や装丁といった代表作や、盟友カスティリオーニ兄弟との共同プロジェクトのほか、ラ・リナシェンテ、オリベッティ、ボルサリーノなどイタリア有名企業の仕事に数多くたずさわっていたマックス・フーバーのデザインワーク全容を紹介。同時開催：Max Huber-Jazz Time+（ギャラリー5610）
**後援**＝スイス大使館、イタリア大使館

## Tokyo Type Directors Club Exhibition 2009

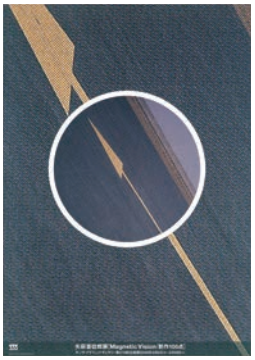
**Dates** = April 3-25, 2009
**Award Winners** = ○Grand Prix = Yugo Nakamura + THA ○TDC Prizes = Katsumi Asaba, Ryosuke Uehara, Les Suen, Fumio Tachibana, Norio Nakamura ○Interactive Design Prize = N/A ○Type Design Prize = Emanuela Conidi ○Book Design Prize = Tsuguya Inoue ○Special Prize = Masayoshi Nakajo
**Exhibition Overview** = The exhibition showcased works by the 2009 winners of the Tokyo TDC Awards, an annual international design competition held by the Tokyo Type Directors Club that is garnering solid recognition and increasing attention both in Japan and overseas as a contest that brings together the newest and most innovative works in typography design. This year, 9 award winners were selected from among 3,316 entries received in autumn 2008: 2,386 from Japan and 930 from 27 other countries. The exhibition featured the 9 prize-winning works plus some 150 others that were either nominated or judged to be of outstanding merit. The exhibition rooms were filled with cutting-edge works from around the world, including experimental works demonstrating new possibilities, making for a unique display of today's most exciting developments in design.

## Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works

**Dates** = May 8-30, 2009
**Artist Profile** = Architect and designer, born in Yamagata Prefecture in 1952. Graduated from Waseda University with a degree in Creative Science and Engineering (Architecture). Currently an instructor in the Faculty of Science and Technology of Keio University. Actively engaged in architecture, landscape design, graphic design, product design, furniture design, photography, fine art, sculpture and criticism. Among his architectural works, "House of Ichikawa" (2003) won the 2004 "Selected Architectural Design" award from Chiba Prefecture, and "Concurred Yokohama" (2008) an award of merit in the Kanagawa Architecture Competition.
**Exhibition Overview** = The exhibition featured "Magnetic Vision," the latest in Yahagi's ongoing explorations into the realm of visual perception, a quest that began with "Shot by Sight" in 1988. In defiance of the rule of a magnifying glass, in his works the world within the lens frame is compressed in a way that incorporates the surrounding scenery, creating a broader image in which the outer perimeter is magnetically pulled into the central focus. By arousing this perception of the framed image continuing seamlessly with its surroundings, Yahagi endeavors to approach closely the world as we consciously view it.

## Max Huber – a Graphic Designer

**Dates** = June 5-29, 2009
**Artist Profile** = Born in Baar, Switzerland, in 1919. After graduating from what is today Zurich University of the Art, in 1940 joined Studio Boggeri in Milan, Italy. The following year, returned to Switzerland and became a member of the Allianz group of abstract artists. In 1945, relocated to Milan. Besides graphics and branding for the 8th Milan Triennial, Einaudi, La Rinascente, etc. frequently collaborated with the Castiglioni brothers. Together with Bruno Munari et al., launched the "Concrete Art Movement" (MAC). Died November 16, 1992.
**Exhibition Overview** = The exhibition placed the spotlight on Switzerland's Max Huber, one of the 20th century's foremost graphic designers. Huber masterfully infused his avant-garde aesthetic sensibilities with commercial design. The exhibition presented an overview of the full scope of his design work, including his posters for the Monza racetrack, magazine and book design for Einaudi and Etas, collaborative projects with the Castiglioni brothers, and numerous works for such renowned Italian enterprises as La Rinascente, Olivetti and Borsalino.
**Supported by** Embassy of Switzerland, Embassy of Italy



## 2009 ADC展

**会期**＝2009年7月6日―29日
**受賞作家**＝○グランプリ＝浅葉克己　○ADC会員賞＝工藤青石、中島祥文　○原弘賞＝仲條正義＜以下G8にて展示＞○ADC賞＝福里真一＋八木敏幸、八木義博、高岡一弥、八木敏幸＋東畑幸多、木村裕治＋木村伊量、丹野英之＋上田義彦、八木秀人、澤本嘉光＋山内健司＋川西純、岡田善敬＋倉橋寛之、田中竜介、色部義昭
**展示概要**＝ADC（東京アートディレクターズクラブ）は、1952年の創立以来日本の広告・デザインを牽引する活動を続けており、会員により選出されるADC賞は、その年の日本の広告・デザイン界の最も名誉あるものの一つとして注目を集める。2009年度ADC賞は、08年5月から09年4月までの1年間に発表されたポスター、新聞・雑誌広告、エディトリアル、パッケージ、CI・マーク&ロゴ、ディスプレイ、TVCMなど、多ジャンル約10,000点の応募作品の中から、78名のADC会員によって厳正な審査が行なわれ選出された。本展ではこの審査会で選ばれた受賞作品、優秀作品を、ggg［会員作品］、G8［一般作品］の2会場で紹介。グラフィック、広告作品の最高峰に輝く作品の数々が勢ぞろいした。

## ［ラストショウ］細谷巌アートディレクション展

**会期**＝2009年8月4日―27日
**作家略歴**＝1935年神奈川県生まれ。53年神奈川工業高校工芸図案科卒。同年ライトパブリシテイ入社。現在代表取締役会長。東京ADC会長。日宣美展特選（55,56）、東京ADC金賞・銀賞（59）・最高賞（71,78,84,88）、朝日広告最高賞（88）、日本宣伝賞山名賞（90）、紫綬褒章（2001）ほか受賞多数。主な展覧会に「ペルソナ展」（松屋銀座、65）、「細谷巌アートディレクション展」（GAギャラリー、88）、「タイム・トンネル：細谷巌アートディレクション1954→展」（クリエイションギャラリーG8／ガーディアン・ガーデン、04）など。『イメージの翼・細谷巌アートディレクション』（74）、『細谷巌のデザインロード69』（04）ほか出版。
**展示概要**＝ストレートでシンプルなコミュニケーションをデザインに美しく定着させ、時代とともに数々の名作を残してきたアートディレクター、細谷巌。本展では、1階に数ある作品の中から細谷巌自選の珠玉の名作24点を展示。そして地階には今回の個展のために作られた、細谷が20歳くらいから今日まで50年以上にわたって語り、記した言葉をヴィジュアルにした新作48点を展示した。

## 銀座界隈隈ガヤガヤ青春ショー ～言い出しっぺ 横尾忠則～ 灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則 4人展

**会期**＝2009年9月2日―29日
**作家略歴**＝灘本唯人：1926年神戸生まれ。61年早川良雄デザイン事務所入所。67年よりフリー。東京イラストレーターズ・ソサエティ代表。宇野亜喜良：1934年名古屋生まれ。名古屋市立工芸高校図案科卒。日本デザインセンター、スタジオ・イルフイル等を経てフリー。キュレーターや舞台美術、芸術監督も務める。和田誠：1936年生まれ。多摩美術大学卒。ライトパブリシテイを経て、68年よりフリーでイラストレーションとグラフィックデザイン。映画監督、ステージ演出をすることも。横尾忠則：1936年兵庫県生まれ。美術家。60年代よりグラフィックデザイナーとして国際的に活躍し、72年にNYMoMAで個展。81年に画家に転向。
**展示概要**＝横尾忠則の思いつきにより、60年代の銀座とイラストレーションをテーマに、灘本、宇野、和田、横尾の4人の展覧会が実現した。才能溢れるクリエイターたちがジャンルを越えて刺激しあっていた当時の活気溢れる時代性と、4人の深い絆を堪能できる展覧会となった。

## 山形季央展

**会期**＝2009年10月5日―28日
**作家略歴**＝1953年大阪市生まれ。76年大阪芸術大学デザイン学科卒業。同年資生堂入社。アートディレクター、クリエイティブディレクターを経て制作室長。82～86年宣伝部初代パリ駐在、セルジュ・ルタンスとコラボレーション。以降様々な資生堂ブランド・展覧会の立ち上げやアートディレクション等にたずさわりながら、田原桂一『艶のかたち金沢』、上田義彦『AMAGATSU』他装丁、ダンスカンパニー山海塾のグラフィック等数多くてがける。東京ADC賞、東京ADC会員賞、ニューヨークADC金賞ほか受賞。東京ADC、東京TDC、JAGDA会員。
**展示概要**＝化粧や女性の美について考えてきた山形季央の、『顔』をテーマにした実験的新作の紹介となった1階と、それまでの資生堂でのアートディレクションの仕事、『AMAGATSU』など装丁を担当した写真集、山海塾のポスターをはじめとする文化公演のためのグラフィックなどを展開した地階。資生堂広告の中枢を担う活躍を続けながら、日本の美や身体美にこだわり非日常的な他にない美しい世界を表現する山形の、特異な美学が惜しみなく再現された展覧会。

## 2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition

**Dates** = July 6-29, 2009
**Award Winners** = ○Grand Prize = Katsumi Asaba ○ADC Members' Prize = Aoshi Kudo, Shobun Nakashima ○Hiromu Hara Prize = Masayoshi Nakajo ○ADC Prize (Exhibited at Creation Gallery G8) = Shinichi Fukusato + Toshiyuki Yagi, Yoshihiro Yagi, Kazuya Takaoka, Toshiyuki Yagi + Kota Tohata, Yuji Kimura + Tadakazu Kimura, Hideyuki Tanno + Yoshihiko Ueda, Hideto Yagi, Yoshimitsu Sawamoto + Kenji Yamauchi + Jun Kawanishi, Yoshinori Okada + Hiroyuki Kurahashi, Ryusuke Tanaka, Yoshiaki Irobe
**Exhibition Overview** = The Tokyo Art Directors Club (ADC) has been a driving force in Japan's advertising and design realms since its establishment in 1952. The annual ADC Awards, which are selected by its members, attract great attention as one of the most prestigious honors bestowed in these fields. The 2009 award winners were chosen by 78 ADC members from among some 10,000 entries. For this exhibition, prize-winning and outstanding works were shown at 2 venues: works by ADC members at ggg and works by non-members at Creation Gallery G8. Together, they made for an exciting show of the year's top works in graphic and advertising design.

## Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer

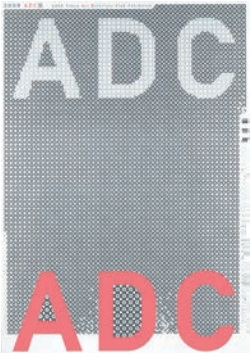
**Dates** = August 4-27, 2009
**Artist Profile** = Born in Kanagawa Prefecture in 1935. Upon graduation from Kanagawa Technical High School in 1953, joined Light Publicity where he currently serves as chairman. Also chairman of Tokyo ADC. His numerous awards include Japan Advertising Artists Club "Special Selection" (1955, 1956), Tokyo ADC Gold and Silver (1959) and Grand Prizes (1971, 1978, 1984, 1988), Asahi Advertising Grand Prize (1988), Japan Advertising Club Yamana Prize (1990) and the Japanese Government's Medal with Purple Ribbon (2001). His major exhibitions include "Persona" (Tokyo, 1965), "Gan Hosoya Art Direction" (Tokyo, 1988) and "Time Tunnel: Gan Hosoya Art Direction 1954→" (Creation Gallery G8 / Guardian Garden, 2004).
**Exhibition Overview** = Through the years Gan Hosoya has created numerous renowned works contemporary with their times, beautifully turning straightforward and simple communication into design. For this exhibition, he selected 24 of his best works for display on the ground floor; and for the basement exhibition room he created 48 new works giving visual form to words he has spoken or recorded in the more than half-century since he began designing at around age 20.

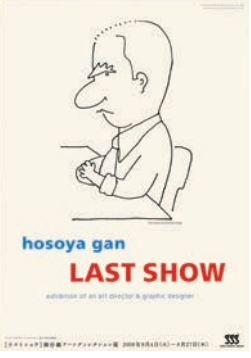
## Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show

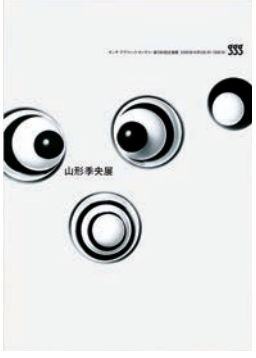
**Dates** = September 2-29, 2009
**Artist Profiles** = T.Nadamoto: Born in Kobe in 1926. Joined Yoshio Hayakawa Design Office in 1961, then went freelance in 1967. President of Tokyo Illustrators Society. A.Uno: Born in Nagoya in 1934. Graduated from Nagoya City Industrial Arts High School. After working for Nippon Design Center, Studio Ilfil, etc., went freelance. Besides graphic design, also serves as curator, set designer and artistic director. M.Wada: Born in 1936. Graduated from Tama Art University. After working for Light Publicity, in 1968 became freelance illustrator and graphic designer. Also involved in film direction and stage production. T. Yokoo: Born in Kobe in 1936. Artist. Globally active graphic designer since the 1960s. Held one-man show at NYMoMA in 1972. In 1981, made career change to painting.
**Exhibition Overview** = Suggested on a whim by Yokoo, this exhibition of the works of Nadamoto, Uno, Wada and Yokoo was realized on the dual themes of the Ginza during the 1960s and illustration. The exhibition gave visitors a sense of the Ginza's vibrancy in those days when abundantly talented creative artists inspired each other across genre boundaries, and afforded them insight into the bonds linking the four featured artists.

## Toshio Yamagata Exhibition

**Dates** = October 5-28, 2009
**Artist Profile** = Born in Osaka in 1953. In 1967 graduated from Osaka University of Arts with a concentration in design and joined Shiseido. After stints as art director and creative director, currently head of Shiseido's Design Creation Group. In 1982-86 served as company's first representative in Paris, collaborating with Serge Lutens. Since then, while participating in various Shiseido brand and exhibition launches, performing art direction, etc., he has also undertaken numerous book designs and graphic works. Awards to date include Tokyo ADC Award, Tokyo ADC Members Prize, New York ADC Gold Prize. Member of Tokyo ADC, Tokyo TDC and JAGDA.
**Exhibition Overview** = The ground floor was dedicated to experimental new works on the theme of "faces" by Yamagata, who has spent his career pondering feminine beauty and cosmetics. The basement focused on his previous works as art director for Shiseido, photo books for which he performed book design, and graphics created for cultural presentations. While continuing his work as the linchpin of advertising at Shiseido, Yamagata pursues the essence of both Japanese beauty and feminine beauty, creating artistic expressions of extraordinary beauty not found elsewhere. His unique aesthetic prowess was abundantly on display.





## 北川一成

**会期**＝2009年11月4日―28日
**作家略歴**＝GRAPHヘッドデザイナー。1965年兵庫県加西市生まれ。筑波大学卒業。『NEW BLOOD』(01)で、建築・美術・デザイン・ファッションの今日を動かす20人の一人として紹介され、また『アイデア』に掲載された作品の圧倒的なクオリティが世界のデザイン界に波紋を呼び、英国D&AD賞とNYADC賞の審査員に相次いで選出。AGI会員。フランス国立図書館"近年のデザインと印刷の優れた本"として作品永久保存。2008年ロンドンFRIEZE ART FAIR出展。JAGDA新人賞、東京TDC賞他受賞多数。
**展示概要**＝ものごとの合理化や概念化、そして近年におけるコンピュータへの依存の拡大、これらによって引き起こされた人間力の低下に警鐘を鳴らす北川一成が、ギャラリーとしての空間全体を使って、来館者の身体に働きかけるインスタレーションを展開。1階では大型キャンバス出力作品を壁面いっぱいに敷き詰め、地階ではプロジェクターにより壁面に投影された北川デザインによるマークやロゴが縦横無尽に動き回る。来館者の動きにも反応し、北川の創り出す独特の世界観が炸裂。

## 広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり

**会期**＝2009年12月3日―24日
**広告批評**＝1979年に創刊された、TVCMなどの広告の批評を中心とした月刊誌。1～2年ごとにアートディレクションが替わり誌面が大きく変化することが特徴の一つ。2009年4月号を最後に休刊となる。表紙デザイン＝天野祐吉＋広重昌彦他(79-) 横尾忠則＋横尾美美他(82-) 奥村靫正(88-) 天野祐吉＋かとうゆめこ(89-) 大貫卓也(90-) 羽良多平吉(92-) 天野祐吉＋賀川優香(93-) 大槻あかね(97-)／表紙デザイン＋アートディレクション＝佐藤可士和(98-) 中村至男(99-) 服部一成(00-) 玉野哲也(01-) 秋山具義(02-) グルーヴィジョンズ(04-) 森本千絵(08-)
**展示概要**＝1979年の創刊から2009年の休刊までの30年間、大衆の視点で広告を追いながら時代を読み解いてきた『広告批評』の軌跡。この30年の時代を代表するCMや新聞広告(初代編集長・天野祐吉選)、この間誌面を彩った100余人の人たち、数年ごとにアートディレクションが大きく変わるロゴと表紙などの展示により、マス広告の全盛期をかけぬけた同誌の意義を問い直し、ウェブとの連携時代を迎えたこれからの「広告批評」のあり方を考察する試み。

## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 田中一光ポスター1953-1979

**会期**＝2010年1月12日―2月25日
**企画監修**＝永井一正
**作家略歴**＝1930年奈良市生まれ。50年京都市立美術専門学校(現・京都芸大)卒業。鐘淵紡績、産経新聞等を経て、60年日本デザインセンター創立に参加。63年田中一光デザイン室主宰。日宣美会員賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ銀賞、毎日デザイン賞、NYADC金賞、東京ADC会員最高賞など受賞多数。紫綬褒章受章、文化功労者表彰。西武美術館、ミラノ市現代美術館、サンパウロ現代美術館などで個展開催。02年1月10日永眠。
**展示概要**＝2008年に設立された田中一光アーカイブ収蔵作品から、1950年代から70年代に制作されたポスター作品161点を精選して展示することで、田中一光の生涯にわたる豊かな創造活動の初期から中期までの軌跡をたどった。神戸勤労者音楽協議会や産経観世能といった傑作はもちろん、これまで展覧会や作品集でも紹介されてこなかった知られざる優品も多数紹介。その創作活動の原点を振り返るとともに、世界屈指のポスター作家へと着実にステップを踏んでいた時代の奥深い魅力を探る展覧会となった。

## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

**会期**＝2010年3月4日―27日
**企画監修**＝片岸昭二(富山県立近代美術館)
**作家略歴**＝1932年東京生まれ。56年東京藝術大学デザイン科卒業。日本万国博覧会ポスター制作をはじめ、国内外の公式イベントのポスター、サイン計画、公共空間デザイン制作に参画。チェコ、ポーランド、アメリカ、フランス他各国際コンクールで入賞、審査委員を歴任。ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞、毎日芸術賞他受賞多数。AGI日本代表。東京ADC委員。日本デザインコミッティー理事。2001年よりJAGDA会長。09年1月11日逝去。
**展示概要**＝DGAに寄贈された福田繁雄が生涯にわたり作り続けたポスター作品1200点。急逝から1年、追悼特別展として、またアーカイブを記念しての展覧会。同アーカイブから精選した108点のポスターにより、電光石火のごとく創造されたヴィジュアル表現が、共通言語としていかに国際的に抜きんでて、しかも説得力があったかについて焦点を当てた。海外からのメッセージや貴重なインタビュー映像も交え、クリエイティブの現場を紹介、その偉業を浮き彫りにした。

## Issay Kitagawa

**Dates** = November 4-28, 2009
**Artist Profile** = Head Designer of GRAPH. Born in 1965 in Hyogo Prefecture. Graduated from University of Tsukuba. Kitagawa was cited in *New Blood* as one of 20 contemporary Japanese "movers and shakers" in the realms of art and design. His works featured in *Idea* grabbed the attention of designers worldwide, leading to his selection to serve on the juries of the D&AD and NY ADC. His works are in the permanent collection of the Bibliothèque Nationale de France. In 2008, he exhibited at London's Frieze Art Fair. Recipient of numerous awards including JAGDA New Designer Award and Tokyo TDC Award. Member of AGI.
**Exhibition Overview** = Kitagawa's works are meant to sound alarms against our rationalization and conceptualization of everything around us, our growing dependency on computers in recent years, and the deterioration in human powers these trends are bringing about. For this exhibition, he utilized the entire gallery as an installation designed to have physical impact on visitors. On the ground floor the walls were filled with his oversize canvases; in the basement marks and logos of his design were projected onto the walls, moving about in all directions. The displays also reacted to the movements of visitors, allowing Kitagawa's unique worldview to burst forth for all to see and appreciate.

## *Kokoku Hihyo:* End of One Era, Start of Another

**Dates** = December 3-24, 2009
*Kokoku Hihyo* = This monthly magazine, (1979-2009) primarily critiqued advertising. It was characterized by frequent design revamps and changes in art direction every 1-2 years. The cover design was successively created by Y. Amano et al. (79-), T. Yokoo + M. Yokoo et al. (82-), Y. Okumura (88-), Y. Amano + Y. Kato (89-), T. Onuki (90-), H. Harata (92-), Y. Amano + Y. Kagawa (93-), and A. Otsuki (97-). Cover design and art direction were subsequently performed by K. Sato (98-), N. Nakamura (99-), K. Hattori (00-), T. Tamano (01-), G. Akiyama (02-), Groovisions (04-) and C. Morimoto (08-).
**Exhibition Overview** = This exhibition traced the three decades of *Kokoku Hihyo*'s publication run, during which the magazine focused on advertising to analyze current trends from the viewpoint of the masses. On exhibit were the works of the more than 100 individuals who graced the magazine's pages, the publication's various logos and covers under its frequent and dramatic changes in art direction, and the commercials and newspaper ads representing the past 30 years (selected by Yukichi Amano). The show fostered a review of *Kokoku Hihyo*'s significance in the heydays of mass-media advertising, and also served as an attempt to ponder the role of advertising criticism in the new era of Web-linked advertising.

## DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ Ikko Tanaka Posters 1953-1979

**Dates** = January 12 – February 25, 2010
**Planning & Direction** = Kazumasa Nagai
**Artist Profile** = Born in 1930 in Nara. Graduated from Kyoto City College of Fine Arts. After working at Kanegafuchi Spinning Co., Ltd., Sankei Shimbun, etc., in 1960 participated in founding Nippon Design Center. In 1963, established Ikko Tanaka Design Studio. Recipient of numerous awards. One-man shows at Padiglione d'Arte Contemporanea in Milan, Museu de Arte de São Paulo, etc. Tanaka passed away on January 10, 2002.
**Exhibition Overview** = On display were 161 posters, all produced between 1953 and 1979, selected from the Ikko Tanaka Archives founded in 2008. The exhibition traced Tanaka's abundant creative activities, which continued throughout his life, during their early and middle periods. In addition to his masterpieces such as the Kobe Workers' Music Association and Sankei Kanze Noh series, the show also introduced numerous outstanding "unknown" works never featured in previous exhibitions or published collections. Besides serving as a retrospective of the origin of Tanaka's creative activities, the exhibition probed the profound appeal of the period when he made steady progress on his way to becoming one of the world's foremost poster artists.

## DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ Shigeo Fukuda's Visual Jumping

**Dates** = March 4-27, 2010
**Planning & Direction** = Shoji Katagishi (Museum of Modern Art, Toyama)
**Artist Profile** = Born in Tokyo in 1932. Graduated from Tokyo National University of Fine Arts. Besides creating the poster for the Osaka Expo '70, he participated in designing posters, signage and public space for official events both in Japan and overseas. He won numerous awards in international competitions and also served on many judging panels. He was Japan's representative to AGI, a member of the Tokyo ADC, and a board member of JDC. He served as JAGDA president from 2001 until his death in January 11, 2009.
**Exhibition Overview** = The DGA contains 1,200 Fukuda's posters created during his lifetime. This exhibition was mounted to mourn his death a year after his passing, and to commemorate the inclusion of his works donated to the archives. The 108 works chosen for the event shed light on how internationally outstanding and persuasive his visual expressions, created in flashes of brilliance, are as a lingua franca. Incorporating messages from overseas and rare interviews of Fukuda, the exhibition introduced visitors to Fukuda's creative setting and brought his monumental achievements into sharp relief.

### 感じる箱展—grafの考える グラフィックデザインの実験と検証—

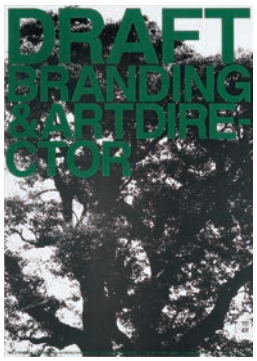
**会期**＝2010年1月19日—3月13日
**作家略歴**＝有限会社デコラティブモードナンバースリー：グラフィック、スペース、家具、照明、プロダクト、アートから食に至るまで「暮らしのための構造」を考えてものづくりをするクリエイティブユニット。decorative mode no.3として93年から活動を続け、98年4月大阪南堀江にショールームgrafオープン。2000年大阪中之島へ移転。ショップ・ショールーム、レストラン・サロンを運営。家具製造の工場をもつ。母体であるdecorative mode no.3の活動を総称してgraf（グラフ）と呼ぶ。
**展示概要**＝多面的にデフォルメされた構造体である箱。それは立体と平面の中間のような存在として捉えることができ、またその用途には様々な可能性が潜んでいて、用途に応じて関わる人や置かれている空間との関係性が変化する。グラフィックデザイン事務所であると同時に設計、プロダクトにもたずさわり、家具の生産もするgrafにとって、箱を様々な切り口で捉えることで、空間性や立体性、たたずまい、人との関係性といった要素を意識するような、グラフィック表現の新たな可能性を探る機会となった。

### Graphic West 2: Sensory Boxes

Dates = January 19 – March 13, 2010
Artist Profile = Decorative Mode No.3 Design Products, Inc. is a creative unit that produces items – everything from graphics, spatial designs, furniture and lighting to products and art – fabricated as structures for everyday living. The company was launched in 1993 and opened its own showroom, “Graf” in Osaka in April 1998. Since relocating within Osaka in 2000, Graf functions as a showroom, shop, restaurant and salon. The company also operates its own furniture factory.
Exhibition Overview = Boxes are multifaceted deformed structures that can be understood as objects existing midway between the two- and three-dimensional. Boxes also have a variety of potential uses, and depending on the usage their relationship changes with the people who are involved and with the space in which the box is placed. For Graf, which not only is a graphic design office but also is involved in product design and produces furniture, this exhibition was an opportunity, by considering boxes from various angles, to probe new possibilities in graphic design with a conscious focus on such elements as spatiality, three-dimensionality, appearance and relationship with people.

### DRAFT: Branding & Art Director
Draft: Branding and Art Directors

**会期**＝2009年4月24日—6月5日
Dates = April 24 – June 5, 2009

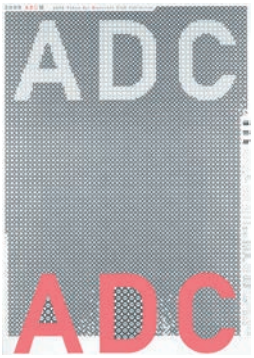



### 09 TDC展
Tokyo Type Directors Club Exhibition 2009

**会期**＝2009年6月16日—7月22日
Dates = June 16 – July 22, 2009

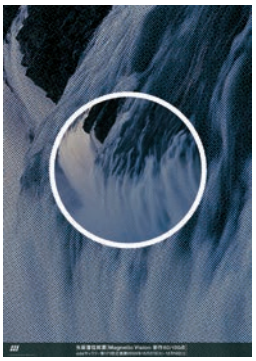
### 2009 ADC展
2009 Tokyo Art Directors Club Exhibition

**会期**＝2009年8月18日—10月9日
Dates = August 18 – October 9, 2009




### 矢萩喜從郎展 [Magnetic Vision　新作60/100点]
Kijuro Yahagi:
Magnetic Vision 60/100 New Works

**会期**＝2009年10月27日—12月19日
Dates = October 27 – December 19, 2009



**作品と題名：**
**タイラーグラフィックス・**
**アーカイブコレクション展 Vol.20**

Prints and Titles: 20th Exhibition of Prints
from the Tyler Graphics Archive Collection

**会期**＝2009年2月28日―6月7日
**Dates** = February 28 – June 7, 2009

**きらめくデザイナーたちの競演―**
**DNPグラフィックデザイン・アーカイブ**
**収蔵品展**

Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers
in the DNP Archives of Graphic Design

**会期**＝2009年6月13日―9月13日
**Dates** = June 13 – September 13, 2009

**赤のちから：**
**タイラーグラフィックス・**
**アーカイブコレクション展 Vol.21**

The Power of Red: 21st Exhibition of Prints
from the Tyler Graphics Archive Collection

**会期**＝2009年9月19日―12月23日
**Dates** = September 19 – December 23, 2009

# ggg

## 1986-2010

**1986**

3月 1回 大橋正展　野菜のイラストレーション
4月 2回 福田繁雄展　Illustric412
5月 3回 奥村靫正展　燦々彩譜
6月 4回 秋山育展　ピクチャーレリーフ
7月 5回 '86 Tokyo ADC展
8月 6回 アートワークス展Ⅰ
9月 7回 佐藤晃一展 箱について―2
10月 8回 栗津潔展 エノタメノジブンカクメイ
11月 9回 追悼・ハーバート・バイヤー展
12月 10回 K2 Live!展

**1987**

1月 11回 辻修平　いろはの絵展
2月 12回 花の万博＋博覧会のシンボルマーク展
3月 13回 藤幡正樹展　geometric love
4月 14回 松永真　毎日デザイン賞受賞記念展
5月 15回 安西水丸　二色展
6月 16回 ルウ・ドーフスマンとCBSの
クリエイティブワークス展
7月 17回 '87 Tokyo ADC展
8月 18回 アートワークス展Ⅱ
9月 19回 五十嵐威暢の立体数字展
10月 20回 青葉益輝プリンティングアート展
11月 21回 オルガー・マチスのポスター展
12月 22回 ミルトン・グレイザー展

**1988**

1月 23回 木村勝・パッケージングディレクション展
2月 24回 谷口広樹展　猿の記憶
3月 25回 銀座百点　表紙原画展
4月 26回 吉田カツ展　描き下し刷り下し
5月 27回 AGI '88 Tokyo展
6月 28回 イッセイ・ミヤケのポスター展
7月 29回 '88 Tokyo ADC展
8月 30回 アートワークス展Ⅲ
9月 31回 情報ポスター・リクルート展
10月 32回 早川良雄「女」原画展
11月 33回 仲條正義展　NAKAJOISH
12月 34回 スタシスのポスターとイラストレーション展

**1989**

1月 35回 ショッピングバッグ・デザイン展
2月 36回 矢萩喜從郎展
3月 37回 Texture展
皆川魔鬼子＋田原桂一＋山岡茂
4月 38回 タナカノリユキ展　Gokan-都市の表層
5月 39回 オトル・アイヒャー展
6月 40回 操上和美展　Photographies
7月 41回 若尾真一郎展　Wakao Collection
8月 42回 アートワークス展Ⅳ
9月 43回 永井一正展
10月 44回 Europalia '89 Japan
新作ポスター 12人展
11月 45回 チャールズ・アンダーソン展
12月 46回 清原悦志の仕事展　Hommage

**1990**

1月 47回 秋月繁展　遊びの箱
2月 48回 菊地信義展　装幀の本「棚」
3月 49回 原田維夫展　木版画「馬」
4月 50回 田中一光展　グラフィックアート植物園
5月 51回 山城隆一展　猫のいないイラスト
6月 52回 松井桂三展　3D
7月 53回 寺門孝之展　遺伝子導入天使
8月 54回 アートワークス展Ⅴ
9月 55回 田原桂一展　光の香り
10月 56回 浅葉克己の新作展　アジアの文字
11月 57回 伊勢克也展　イメージのマカロニ
12月 58回 篷田やすひろ展　ピープル

**1991**

1月 59回 舟橋全二展
2月 60回 太田徹也展　ダイヤグラム
3月 61回 ペア・アーノルディ展
4月 62回 澤田泰廣展　P2（Painting×Printing）
5月 63回 新井苑子展　インスピレーションを描く
6月 64回 Communication & Print
新作ポスター 10人展
7月 65回 中垣信夫＋中垣デザイン事務所展
8月 66回 アートワークス展Ⅵ
10月 67回 Trans-Art 91展
12月 68回 '91 Tokyo ADC展

**1992**

1月 69回 アイヴァン・チャマイエフ展　コラージュ
2月 70回 立花ハジメ初の個展
3月 71回 第4回東京TDC展
4月 72回 ヘンリク・トマシェフスキ展
5月 73回 シーモア・クワスト展　メタル彫刻
6月 74回 鹿目尚志展　BOX・XX
7月 75回 中村誠 個展
8月 76回 リック・バリセンティ展
9月 77回 葛西薫展 'AERO'
10月 78回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
山口はるみ展
11月 79回 ポール・ランド展
12月 80回 フロシキ展

**1993**

1月 81回 小島良平展　Tropica Grafica
2月 82回 稲越功一展　アウト・オブ・シーズン
3月 83回 '92 Tokyo ADC展
4月 84回 第5回東京TDC展
5月 85回 U.G.サトーのポスター展 "Treedom"
6月 86回 オマージュ　向秀男展
7月 87回 文字からのイマジネーション展
8月 88回 現代香港のデザイン8人展
9月 89回 勝井三雄展　光の国
10月 90回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、
安西水丸展
11月 91回 ソール・バス展
12月 92回 グリーティング・ポップアップ13人展

**1994**

1月 93回 栗津潔展　$H^2O$ Earthman
2月 94回 第6回東京TDC展
3月 95回 上條喬久展　Windscape Mindscape
4月 96回 片山利弘展
5月 97回 永井一正展
6月 98回 オランダのグラフィックデザイン100年展
7月 99回 '94 Tokyo ADC展
8月 100回 グラフィック・グッズ展
10月 101回 平野甲賀「文字の力」展
10月 九州の九人の九つの個性展
11月 102回 亀倉雄策ポスター新作展
12月 103回 原研哉展
12月 土橋とし子、中村幸子、メグ・ホソキ3人展

**1995**

1月 104回 ブルーノ・ムナーリ展
2月 105回 日本のブックデザイン展1946-95
3月 106回 第7回東京TDC展
4月 107回 ピーター・ブラッティンガ展
5月 108回 田中一光展　人間と文字
6月 109回 ニクラウス・トロックスラーポスター展
7月 110回 '95 Tokyo ADC展
8月 111回 リズム&ヒューズの
コンピュータグラフィックス展
9月 112回 八木保展　自然観
9月 特別展 世界のグラフィック20人展
ggg Books 20冊刊行記念
10月 113回 モダン・タイポグラフィの流れ展―1
11月 114回 戸田正寿・イヤイヤランド展
12月 115回 日本のイラストレーション50年展

**1996**

1月 116回 篷田やすひろ展　お江戸で、ゆらゆら
2月 117回 モダン・タイポグラフィの流れ展―2
3月 118回 ポスター 23人展　イン・サンパウロ
4月 119回 第8回東京TDC展
5月 120回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
6月 121回 勝岡重夫タイポグラフィックアート展
7月 122回 '96 Tokyo ADC展
8月 123回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
9月 124回 K2-黒田征太郎／長友啓典「二脚の椅子」展
10月 125回 チェコ・アヴァンギャルド・ブックデザイン
1920s-'30s
11月 126回 Graphic Wave 1996
青木克憲＋佐藤卓＋山形季央
12月 127回 アラン・ル・ケルネ展

**1997**

1月 128回 下谷二助展　人じん
1月 特別展（CCGA）ジョセフ・アルバース展
2月 129回 大橋正展　体温をもつ野菜たち
3月 130回 東京TDC展
4月 131回 仲條正義○○○展
5月 132回 今日の雑誌8誌による・特集エコロジー展
6月 133回 横尾忠則ポスター展
吉祥招福繁昌描き下ろし!!
7月 134回 '97 Tokyo ADC展
8月 135回 河原敏文とポリゴン・ピクチュアズ展
9月 136回 メキシコ10人展
10月 137回 Graphic Wave 1997
秋田寛＋井上里枝＋福島治
10月 特別展「勝見勝賞」10周年記念展
11月 138回 福田繁雄のポスター〈SUPPORTER〉
12月 139回 GLOBAL展　世界33人の
デザイナーによるデュオポスター

**1998**

1月 140回 鈴木八朗展　8RO ART & AD
2月 141回 オーデルマット＋ティッシ展
3月 142回 スタシス・エイドゥリゲヴィチウス展
4月 143回 東京TDC展'98
5月 144回 スタジオ・ドゥンバー展
6月 145回 山本容子展　オペラレッスン
7月 146回 '98 Tokyo ADC展
8月 147回 河口洋一郎展　電脳宇宙への旅
9月 148回 Graphic Wave 1998
蝦名龍郎＋平野敬子＋三木健
10月 149回 グンター・ランボー展
11月 150回 フィリップ・アペローグ展
12月 151回 ヘルベルト・ロイピン展

**1999**

1月 152回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
2月 153回 日本のタイポグラフィック1946-95展
3月 154回 木村恒久構成フォト・グラフィックス展
3月 特別展 堀内誠一の仕事展雑誌づくりの決定的瞬間
4月 155回 '99 TDC展
5月 156回 現代ブルガリアのグラフィックデザイン展
6月 157回 日比野克彦展　誘拐したい
7月 158回 '99 ADC展
7月 特別展 前田ジョン　One-line.com
8月 159回 矢萩喜從郎展
9月 160回 Graphic Wave 1999
鈴木守＋松下計＋米村浩
10月 161回 FUSE展
11月 162回 松井桂三展
12月 163回 ポール・デイヴィスのポスター展
12月 特別展 アーヴィング・ペン
三宅一生の仕事への視点

**2000**

1月 164回 Graphic Message for Ecology展
1月 特別展 篠山紀信&マニュエル・ルグリ展
2月 165回 ブルーノ・モングッツィ展
形と機能の詩人
3月 166回 伊藤憲治展　医学誌「ステトスコープ」の
表紙デザイン半世紀
4月 167回 '00 TDC展
5月 168回 Poster Works Nagoya 12
岡本滋夫＋11人のデザイナーたち
6月 169回 なにわの、こてこてグラフィック展
7月 170回 2000 ADC展
8月 171回 日宣美の時代
日本のグラフィックデザイン1951-70展
9月 172回 Graphic Wave 2000
秋山具義＋Tycoon Graphics＋中島英樹
10月 173回 D-ZONE／戸田ツトム展
11月 174回 ピエール・ベルナール展
12月 175回 本とコンピュータ展

**2001**

1月 176回 二〇〇一年木田安彦展
2月 177回 イタロ・ルビ展
3月 178回 "Spring has come"
松永真、ディテールの競演。
4月 179回 01 TDC展
5月 180回 コントラプンクト展
6月 181回 原弘のタイポグラフィ展
7月 182回 2001 ADC展
8月 183回 灘本唯人展　にんげんもよう
9月 184回 Graphic Wave 2001
澁谷克彦＋永井一史＋ひびのこづえ
10月 185回 ハングルポスター展
11月 186回 サイトウマコト展
12月 187回 チップ・キッド展

**2002**

1月 188回 ウーヴェ・レシュ展
2月 189回 宇野亜喜良展
3月 190回 デザイン教育の現場から：
セント・ジュースト大学院の新手法
4月 191回 02 TDC展
5月 192回 DRAFT展
6月 193回 アラン・チャン展　東情西韻
6月 特別展 花森安治と暮しの手帖展
7月 194回 2002 ADC展
8月 195回 タナカノリユキ展　OUT OF DESIGN
9月 196回 Graphic Wave 2002
左合ひとみ＋澤田泰廣＋新村則人
10月 197回 SUN-AD人展
11月 198回 ブラジルのグラフィックデザイン展
ブックデザインにみる今日のブラジル
12月 199回 ハーブ・ルバリン展

# 1992-2010

## 2003
1月 200回 田中一光　ポスターとグラフィックアート展
2月 201回 サディク・カラムスターファ展
3月 202回 現代中国平面設計展
4月 203回 03 TDC展
5月 204回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
6月 205回 空山基展
7月 206回 2003 ADC展
8月 207回 新島実展　色彩とフォントの相互作用
9月 208回 Graphic Wave 2003
佐野研二郎＋野田凪＋服部一成
10月 209回 副田高行「広告の告白」展
11月 210回 ステファン・サグマイスター展
12月 211回 河野鷹思展

## 2004
1月 212回 永井一正ポスター展
2月 213回 伊藤桂司・谷口広樹・ヒロ杉山展
3月 214回 雑誌をデザインする集団キャップ展
4月 215回 04 TDC展
5月 216回 佐藤卓展　PLASTICITY
6月 217回 現代デンマークポスターの10年
7月 218回 2004 ADC展
8月 219回 バーンブルック・デザイン展
Friendly Fire
9月 220回 Graphic Wave 2004
工藤青石＋GRAPH＋生意気
10月 221回 杉浦康平雑誌デザインの半世紀展
11月 222回 佐藤可士和展　BEYOND
12月 223回 もう一人の山名文夫展　1920s－70s

## 2005
1月 224回 七つの顔のアサバ展
2月 225回 パラリンジ・デザイン展
3月 226回 青木克憲XX展
4月 227回 05 TDC展
5月 228回 和田誠のグラフィックデザイン
6月 229回 チャマイエフ&ガイスマー展
7月 230回 2005 ADC展
8月 231回 佐藤雅彦研究室展
9月 232回 Graphic Wave 2005
谷田一郎＋東泉一郎＋森本千絵
10月 233回 CCCP研究所展
11月 234回 祖父江慎＋cozfish展
12月 235回 スイスポスター 100年展

## 2006
1月 236回 亀倉雄策1915-1997展
2月 237回 野田凪展
3月 238回 シアン展
4月 239回 06 TDC展
5月 240回 永井一史／HAKUHODO DESIGN
6月 241回 田名網敬一主義展
7月 242回 2006 ADC展
8月 243回 アレクサンダー・ゲルマン展
9月 244回 Graphic Wave 2006: School of Design
古平正義＋平林奈緒美＋水野学＋山田英二
9月 特別展 AGI日本デザイン総会開催記念：掛け軸展
10月 245回 勝手に広告展（中村至男＋佐藤雅彦）
11月 246回 中島英樹展　CLEAR in the FOG
12月 247回 早川良雄展　日本のデザイン黎明期の証人

## 2007
1月 248回 EXHIBITIONS（Part Ⅰ）
2月 EXHIBITIONS（Part Ⅱ）
3月 249回 キムラカツ展：問いボックス店
4月 250回 07 TDC展
5月 251回 ヘルムート・シュミット：
デザイン イズ アティテュード
6月 252回 廣村正彰：2D⇔3D
7月 253回 2007 ADC展
8月 254回 ワルシャワの風 1966-2006
9月 255回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ
10月 256回 中島信也CM展：
中島信也と29人のアートディレクター
11月 257回 Welcome to Magazine Pool：
雑誌デザイン10人の越境者たち
12月 258回 Aoba Show：
青葉益輝ワン・マン・ショー

## 2008
1月 259回 アーットダ！戸田正寿ポスターアート展
2月 260回 グラフィックデザインの時代を築いた
20人の証言　Interviews by 柏木博
3月 261回 TEXTASY:
プロディ・ノイエンシュヴァンダー展
4月 262回 08 TDC展
5月 263回 アラン・フレッチャー：
英国グラフィックデザインの父
6月 264回 がんばれニッポン、を広告してきたんだ
そう言えば、俺。応援団長佐々木●宏
7月 265回 2008 ADC展
8月 266回 Now Updating… THA／
中村勇吾のインタラクティブデザイン
9月 267回 平野敬子「デザインの起点と終点と起点」
10月 268回 「白」原研哉展
11月 269回 M/M(Paris) The Theatre Posters
12月 270回 OYKOT Wieden+Kennedy Tokyo:
10 Years of Fusion

## 2009
1月 271回 きらめくデザイナーたちの競演―
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
2月 272回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
3月 273回 DRAFT Branding & Art Director
4月 274回 09 TDC展
5月 275回 矢萩喜從郎展
[Magnetic Vision／新作100点]
6月 276回 マックス・フーバー展
7月 277回 2009 ADC展
8月 278回 [ラストショウ]細谷巌アートディレクション展
9月 279回 銀座界隈隈ガヤガヤ青春ショー
～言い出しっぺ 横尾忠則～
灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則4人展
10月 280回 山形季央展
11月 281回 北川一成
12月 282回 広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり

## 2010
1-2月 283回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953―1979
3月 284回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

## 1992
1月 1回 Trans-Art 91展
3月 2回 アイヴァン・チャマイエフ展　コラージュ
4月 3回 第4回東京TDC展
5月 4回 リック・パリセンティ展
6月 5回 シーモア・クワスト展　メタル彫刻
7月 6回 デザイン・プリント・ペーパー展
8月 7回 ヴァン・オリバー展
10月 8回 中村誠 個展
10月 9回 マイケル・メイヴリー展
11月 10回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
山口はるみ展

## 1993
1月 11回 フロシキ展
2月 12回 ホワイ・ノット・アソシエイツ展
3月 13回 アレン・ホリ＋ロバート・ナカタ展
4月 14回 '92 Tokyo ADC展
5月 15回 ラッセル・ウォーレン－フィッシャー展
6月 16回 第5回東京TDC展
7月 17回 文字からのイマジネーション展
8月 18回 デザイン・プリント・ペーパー展　PartⅡ
9月 19回 ビル・ソーバーン展
10月 20回 U.G.サトーのポスター展 "Treedom"
11月 21回 勝井三雄展　光の国
12月 22回 現代香港のデザイン8人展

## 1994
1月 23回 ソール・バス展
2月 24回 グリーティング・ポップアップ13人展
3月 25回 リュディ・バウア／
インテグラルコンセプト展
4月 26回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、
安西水丸展
5月 27回 ジェニファ・モーラ展
6月 28回 永井一正展
7月 29回 ウーヴェ・レシュ展
8月 30回 '94 Tokyo ADC展
9月 31回 デザイン・プリント・ペーパー展　PartⅢ
10月 32回 デビッド・カーソン&
ゲーリー・ケプキ展
12月 33回 亀倉雄策ポスター新作展

## 1995
1月 34回 ヘルマン・モンタルボ展
2月 35回 ブルーノ・ムナーリ展
3月 36回 グラッパ・デザイン展
4月 37回 第7回東京TDC展
5月 38回 ミシェル・ブーヴェ展
6月 39回 田中一光展　人間と文字
7月 40回 テレロング展
8月 41回 '95 Tokyo ADC展
9月 42回 デザイン・プリント・ペーパー展 Ⅳ
10月 43回 ペレ・トレント展
11月 44回 アジアのデザイナー 6人展

## 1996
1月 45回 日本のイラストレーション50年展
2月 46回 マーゴ・チェイス展
3月 47回 ヴェルネル・イェカー展
4月 48回 グンター・ランボー展
5月 49回 第8回東京TDC展
6月 50回 カリ・ピッポ展
7月 51回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
8月 52回 '96 Tokyo ADC展
9月 53回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
10月 54回 アラン・ル・ケルネ展
11月 55回 ウッディ・パートル展

## 1997
1月 56回 ジョアン・マシャド展
2月 57回 K2オオサカ展　黒田征太郎＋長友啓典
3月 58回 グラフィックデザイン・イン・チャイナ展
4月 59回 東京TDC展
5月 60回 メキシコ10人展
6月 61回 カトー・デザイン展　思考するデザイン
7月 62回 '97 Tokyo ADC展
8月 63回 ラルフ・シュライフォーゲル展
10月 64回 ジェームズ・ビクトル展
11月 65回 GLOBAL展　世界33人の
デザイナーによるデュオポスター

## 1998
1月 66回 ファイトヘルベ／デ・ヴリンゲル展
2月 67回 ジャン・ベノア・レヴィ展
3月 68回 〈トロイカ〉ロシア3人展
4月 69回 フィリップ・アペローグ展
6月 70回 東京TDC展'98
7月 71回 スタジオ・ドゥンバー展
8月 72回 '98 Tokyo ADC展
9月 73回 ザフリキ展
10月 74回 デビッド・タルタコーバ展
11月 75回 台湾四人展

## 1999
1月 76回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
2月 77回 ピエール・ニューマン展
3月 78回 ポーラ・シェアのグラフィックデザイン展
5月 79回 ハンブルクのグラフィックデザイン展
6月 80回 '99 TDC展
7月 81回 ヤン・ライリッヒJr.展
8月 82回 '99 ADC展
9月 83回 スコット・マケラ［WIDE OPEN］展
10月 84回 チャズ・マヴィヤネ―
デイヴィースの世界展
11月 85回 マカオ2人展

## 2000
1月 86回 Graphic Message for Ecology展
2月 87回 松井桂三展
3月 88回 ポール・デイヴィス展
4月 89回 なにわの、ここここグラフィック展
5月 90回 '00 TDC展
6月 91回 アントン・ベイク展
7月 92回 ピエール・ベルナール展
9月 93回 2000 ADC展
10月 94回 イタロ・ルビ展
11月 95回 デザイン教育の現場から：
ベルリン芸術大学
オルガー・マチス教室によるアプローチ

## 2001
1月 96回 二〇〇一年木田安彦展
2月 97回 コントラプンクト展
3月 98回 ザルツブルク音楽祭ポスター展
5月 99回 01 TDC展
6月 100回 チップ・キッド展
7月 101回 ハングルポスター展
8月 102回 2001 ADC展
9月 103回 ウォルフガング・ワインガルト展
10月 104回 "Spring has come"
松永真、ディテールの競演。
11月 105回 デザイン教育の現場からⅡ：
セント・ジューント大学院の新手法

CCGA

1995-2009

**2002**

1月 106回 灘本唯人展　にんげんもよう
2月 107回 サイトウマコト展
3月 108回 オット+シュタイン展
4月 109回 タピロ展
5月 110回 02 TDC展
7月 111回 ウィーンのポスター展：
ウィーン市立図書館アーカイブ1883-2002
7月 112回 三木健展
9月 113回 2002 ADC展
10月 114回 サディク・カラムスターファ展
11月 115回 中国グラフィックデザイン展

**2003**

1月 116回 SUN-AD人展
2月 117回 田中一光　ポスターとグラフィックアート展
3月 118回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
4月 119回 カン・タイキュン+フリーマン・ラウ展
6月 120回 03 TDC展
7月 121回 ルーバ・ルコーバ展
8月 122回 2003 ADC展
9月 123回 ステファン・サグマイスター展
10月 124回 ヨーロッパの文化ポスター展：
ノイエ・ザムルング・ミュンヘンの
収蔵作品より
11月 125回 空山基展

**2004**

1月 126回 副田高行「広告の告白」展
2月 127回 永井一正ポスター展
3月 128回 現代デンマークポスターの10年
4月 129回 雑誌をデザインする集団キャップ展
5月 130回 04 TDC展
6月 131回 ピエール・メンデル展
8月 132回 2004 ADC展
9月 133回 バーンブルック・デザイン展　Friendly Fire
10月 134回 チェコのポスター展：
プラハ美術工芸博物館
コレクション1960-2003
11月 135回 パラリンジ・デザイン展

**2005**

1月 136回 杉浦康平の雑誌デザイン半世紀展
2月 137回 シアン展　ベルリンでの13年
3月 138回 佐藤可士和展　BEYOND
4月 139回 メーフィス&ファン・デュールセン展
5月 140回 05 TDC展
7月 141回 CCCP研究所展
8月 142回 2005 ADC展
9月 143回 青木克憲XX展
10月 144回 ドイツAGIグラフィックデザイン展
11月 145回 和田誠のグラフィックデザイン

**2006**

1月 146回 スイスポスター 100年展
2月 147回 グラフィック・ソート・ファシリティ展
3月 148回 野田凪展
4月 149回 ブルーノ・オルダーニ展
5月 150回 06 TDC展
6月 151回 ブラック&ホワイトポスター展
8月 152回 2006 ADC展

**2007**

5月 153回 EXHIBITIONS
7月 154回 07 TDC展
8月 155回 ヘルムート・シュミット：
デザイン イズ アティテュード
10月 156回 2007 ADC展
11月 157回 キムラカツ展：問いボックス店

**2008**

1月 158回 Welcome to Magazine Pool：
雑誌デザイン10人の越境者たち
2月 159回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ・オーサカ
4月 160回 中島信也CM展：
中島信也と29人のアートディレクター
6月 161回 08 TDC展
8月 162回 Now Updating… THA／
中村勇吾のインタラクティブデザイン
9月 163回 2008 ADC展
10月 164回 Aoba Show：
青葉益輝ワン・マン・ショー
11月 165回 真 and / or 善　杉崎真之助と高橋善丸の
グラフィックデザイン

**2009**

1月 166回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
3月 167回 きらめくデザイナーたちの競演―DNP
グラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
4月 168回 DRAFT: Branding & Art Director
6月 169回 09 TDC展
8月 170回 2009 ADC展
10月 171回 矢萩喜從郎展
［Magnetic Vision　新作60/100点］

**2010**

1月 172回 感じる箱展
grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証

**1995**

4-7月 グラフィック・ビジョン：
ケネス・タイラーとアメリカ現代版画の30年
8-10月 ロイ・リキテンスタイン：
エンタブラチュア→ヌード
11-1月 一瞬の刻印：ロバート・マザウェル展

**1996**

3-4月 アメリカ版画の現在地点：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.1
4-7月 デイヴィッド・ホックニー展
7-10月 ジョセフ・アルバース展
10-1月 スタイルを越えて：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.2

**1997**

3-6月 ジェームズ・ローゼンクイスト展
6-9月 版画における抽象：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.3
10-11月 大竹伸朗：Printing / Painting
12-1月 線／色彩／イメージ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.4

**1998**

3-5月 フランク・ステラ／ケネス・タイラー
構築する版画：
アーティストとプリンター、30年の軌跡
5-9月 主張する黒：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.5
9-12月 形象としての紙：アラン・シールズ

**1999**

3-5月 福田美蘭展
6-9月 かたる かたち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.6
9-12月 版画の話展

**2000**

3-6月 New Works 1998-1999：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.7
6-9月 太田三郎：存在と日常
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ設立展：
ポスターグラフィックス 1950-2000

**2001**

3-5月 版画集への招待：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.8
5-7月 折元立身：1972-2000
8-10月 藤本由紀夫：四次元の読書
10-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.2：
グラフィックデザインの時代

**2002**

3-6月 空間に躍りでた版画たち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.9
6-9月 矢萩喜從郎：視触、視弾、そして眼差しの記憶
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.3：
個性の時代

**2003**

3-4月 絵画－永遠の現在を求めて：
リチャード・ゴーマン展
4-6月 色彩としての紙：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.10
6-9月 ヘレン・フランケンサーラー木版画展
9-12月 タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション 新収蔵作品展

**2004**

3-6月 イラストレーションの黄金時代
6-9月 パスワード：日本とデンマークの
アーティストによる対話
9-10月 版で発信する作家たち2004

**2005**

3-6月 アメリカ現代木版画の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.12
6-9月 Breathing Light：吉田重信
10-12月 decade―CCGAと6人の作家たち

**2006**

3-6月 版に描く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.13
6-9月 藤幡正樹：不完全さの克服
イメージとメディアによって創り出される、
新たな現実感。
9-12月 野田哲也：日記

**2007**

3-6月 凹版表現の魅力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.14
6-9月 再生する版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.15
9-12月 ユニーク・インプレッション：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.16

**2008**

3-6月 厚い色：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.17
6-9月 大きな版画、小さな版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.18
9-11月 黒のモノローグ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.19

**2009**

2-6月 作品と題名：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.20
6-9月 きらめくデザイナーたちの競演―
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
9-12月 赤のちから：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.21

# ggg

## 1986-2010

**1986**

Mar. 1 Tadashi Ohashi Exhibition
Apr. 2 Shigeo Fukuda Exhibition
May 3 Yukimasa Okumura Exhibition
Jun. 4 Iku Akiyama Exhibition
Jul. 5 '86 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 6 Art Works Exhibition Ⅰ
Sep. 7 Koichi Sato Exhibition
Oct. 8 Kiyoshi Awazu Exhibition
Nov. 9 Herbert Bayer Exhibition
Dec. 10 K2 Live! Exhibition

**1987**

Jan. 11 Shuhei Tsuji Iroha Exhibition
Feb. 12 Flower Expo + Expo Logo Exhibition
Mar. 13 Masaki Fujihata Exhibition
Apr. 14 Shin Matsunaga Exhibition
May 15 Mizumaru Anzai Exhibition
Jun. 16 Lou Dorfsman and CBS's Creative Works Exhibition
Jul. 17 '87 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 18 Art Works Exhibition Ⅱ
Sep. 19 Takenobu Igarashi Exhibition
Oct. 20 Masuteru Aoba Exhibition
Nov. 21 Holger Matthies Exhibition
Dec. 22 Milton Glaser Exhibition

**1988**

Jan. 23 Katsu Kimura Exhibition
Feb. 24 Hiroki Taniguchi Exhibition
Mar. 25 Ginza Hyakuten Original Pictures for Cover Exhibition
Apr. 26 Katsu Yoshida Exhibition
May 27 AGI '88 Tokyo Exhibition
Jun. 28 Issey Miyake Poster Exhibition
Jul. 29 '88 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 30 Art Works Exhibition Ⅲ
Sep. 31 Information Posters Recruit Exhibition
Oct. 32 Yoshio Hayakawa Exhibition
Nov. 33 Masayoshi Nakajo Exhibition
Dec. 34 Stasys Eidrigevic̆ius Exhibitionn

**1989**

Jan. 35 Shopping Bag Design Exhibition
Feb. 36 Kijuro Yahagi Exhibition
Mar. 37 Texture Exhibition
Apr. 38 Noriyuki Tanaka Exhibition
May 39 Otl Aicher Exhibition
Jun. 40 Kazumi Kurigami Exhibition
Jul. 41 Shinichiro Wakao Exhibition
Aug. 42 Art Works Exhibition Ⅳ
Sep. 43 Kazumasa Nagai Exhibition
Oct. 44 Europalia '89 Japan 12 Artists' Original Poster Exhibition
Nov. 45 Charles Anderson Exhibition
Dec. 46 Etsushi Kiyohara Exhibition

**1990**

Jan. 47 Shigeru Akizuki Exhibition
Feb. 48 Nobuyoshi Kikuchi Exhibition
Mar. 49 Tsunao Harada Exhibition
Apr. 50 Ikko Tanaka Exhibition
May 51 Ryuichi Yamashiro Exhibition
Jun. 52 Keizo Matsui Exhibition
Jul. 53 Takayuki Terakado Exhibition
Aug. 54 Art Works Exhibition Ⅴ
Sep. 55 Keiichi Tahara Exhibition
Oct. 56 Katsumi Asaba Exhibition
Nov. 57 Katsuya Ise Exhibition
Dec. 58 Yasuhiro Yomogida Exhibition

**1991**

Jan. 59 Zenji Funabashi Exhibition
Feb. 60 Tetsuya Ohta Exhibition
Mar. 61 Per Arn oldi Exhibition
Apr. 62 Yasuhiro Sawada Exhibition
May 63 Sonoko Arai Exhibition
Jun. 64 Communication & PrintExhibition
Jul. 65 Nobuo Nakagaki Design Office Exhibition
Aug. 66 Art Works Exhibition
Oct. 67 Trans-Art '91 Exhibition
Dec. 68 '91 Tokyo ADC Exhibition

**1992**

Jan. 69 Ivan Chermayeff Exhibition
Feb. 70 Hajime Tachibana Exhibition
Mar. 71 The 4th Tokyo TDC Exhibition
Apr. 72 Henryk Tomaszewski Exhibition
May 73 Seymour Chwast Exhibition
Jun. 74 Takashi Kanome Exhibition
Jul. 75 Makoto Nakamura Exhibition
Aug. 76 Rick Valicenti Exhibition
Sep. 77 Kaoru Kasai Exhibition
Oct. 78 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition
Nov. 79 Paul Rand Exhibition
Dec. 80 Furoshiki Exhibition

**1993**

Jan. 81 Ryohei Kojima Exhibition
Feb. 82 Koichi Inakoshi Exhibition
Mar. 83 '92 Tokyo ADC Exhibition
Apr. 84 The 5th Tokyo TDC Exhibition
May 85 U.G. Sato Exhibition
Jun. 86 Hideo Mukai Exhibition
Jul. 87 Imagination of Letters Exhibition
Aug. 88 8 Designers in Today's Hong Kong
Sep. 89 Mitsuo Katsui Exhibition
Oct. 90 Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
Nov. 91 Saul Bass Exhibition
Dec. 92 Pop-up Greetings Exhibition

**1994**

Jan. 93 Kiyoshi Awazu Exhibition
Feb. 94 The 6th Tokyo TDC Exhibition
Mar. 95 Takahisa Kamijyo Exhibition
Apr. 96 Toshihiro Katayama Exhibition
May 97 Kazumasa Nagai Exhibition
Jun. 98 Dutch Graphic Design A Century Exhibition
Jul. 99 '94 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 100 Graphic Goods Exhibition
Oct. 101 Koga Hirano Exhibition
Oct. Kyushu 9 Designers Exhibition
Nov. 102 Yusaku Kamekura Exhibition
Dec. 103 Kenya Hara Exhibition
Dec. Toshiko Tsuchihashi, Sachiko Nakamura, Meg Hosoki Exhibition

**1995**

Jan. 104 Bruno Munari Exhibition
Feb. 105 Book Design in Japan 1946-95 Exhibition
Mar. 106 The 7th Tokyo TDC Exhibition
Apr. 107 Pieter Brattinga Exhibition
May 108 Ikko Tanaka Exhibition
Jun. 109 Niklaus Troxler Exhibition
Jul. 110 '95 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 111 Rhythm & Hues Computer Graphics
Sep. 112 Tamotsu Yagi Exhibition
Sep. Special: 20 Graphic Designers of the World, 10th Anniversary of ggg
Oct. 113 Transition of Modern Typography-1 Exhibition
Nov. 114 Masatoshi Toda Exhibition
Dec. 115 50 Years in Japanese Illustrations Exhibition

**1996**

Jan. 116 Yasuhiro Yomogida Exhibition
Feb. 117 Transition of Modern Typography-2 Exhibition
Mar. 118 Mar. 118 Posters by 23 Artists in São Paulo Exhibition
Apr. 119 The 8th Tokyo TDC Exhibition
May 120 Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Jun. 121 Shigeo Katsuoka Exhibition
Jul. 122 '96 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 123 John Maeda Paper and Computers Exhibition
Sep. 124 K2–Seitaro Kuroda / Keisuke Nagatomo Exhibition
Oct. 125 Czech Avant-Garde Book Design 1920s-'30s Exhibition
Nov. 126 Graphic Wave 1996: Katsunori Aoki / Taku Satoh / Toshio Yamagata
Dec. 127 Alain Le Quernec Exhibition

**1997**

Jan. 128 Nisuke Shimotani Exhibition
Jan. Special: CCGA– The Prints of Josef Albers
Feb. 129 Tadashi Ohashi Exhibition
Mar. 130 The 10th of Tokyo TDC Exhibition
Apr. 131 Masayoshi Nakajo Exhibition
May 132 Magazines Today Exhibition
Jun. 133 Tadanori Yokoo's Poster Exhibition
Jul. 134 '97 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 135 Toshifumi Kawahara and Polygon Pictures Exhibition
Sep. 136 Mexican 10 Graphic Designers Exhibition
Oct. 137 Graphic Wave 1997: Kan Akita / Satoe Inoue / Osamu Fukushima
Oct. Special: The 10th Anniversary of Masaru Katsumi Award Exhibition
Nov. 138 Shigeo Fukuda Exhibition
Dec. 139 Global Exhibition

**1998**

Jan. 140 8ro Art & AD Exhibition
Feb. 141 Odermatt + Tissi Exhibition
Mar. 142 Stasys Eidrigevic̆ius Exhibition
Apr. 143 Tokyo TDC '98 Exhibition
May 144 Studio Dumbar Exhibition
Jun. 145 Yoko Yamamoto Exhibition
Jul. 146 '98 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 147 Yoichiro Kawaguchi Exhibition
Sep. 148 Graphic Wave 1998:Tatsuo Ebina / Keiko Hirano / Ken Miki
Oct. 149 Gunter Rambow Exhibition
Nov. 150 Philippe Apeloig Exhibition
Dec. 151 Herbert Leupin Exhibition

**1999**

Jan. 152 Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World exhibition
Feb. 153 Transition of Modern Typography in Japan 1946-95 Exhibition
Mar. 154 Tsunehisa Kimura Exhibition
Mar. Special: The Works of Seiichi Horiuchi
Apr. 155 Tokyo TDC '99 Exhibition
May 156 Contemporary Bulgarian Graphic Design Exhibition
Jun. 157 Katsuhiko Hibino Exhibition
Jul. 158 '99 Tokyo ADC Exhibition
Jul. Special: John Maeda One-line.com
Aug. 159 Kijuro Yahagi Exhibition
Sep. 160 Graphic Wave 1999: Mamoru Suzuki / Kei Matsushita / Hiroshi Yonemura
Oct. 161 Fuse Posters and Fonts Exhibition
Nov. 162 Keizo Matsui Exhibition
Dec. 163 Paul Davis Posters Exhibition
Dec. Special: Irving Penn regards the works of Issey Miyake

**2000**

Jan. 164 Graphic Message for Ecology Exhibition
Jan. Special: Kishin Shinoyama & Manuel Legris
Feb. 165 Bruno Monguzzi Exhibition
Mar. 166 Kenji Itoh Exhibition
Apr. 167 Tokyo Type Directors Club 2000
May 168 Poster Works Nagoya 12 Exhibition
Jun. 169 Osaka Pop Exhibition
Jul. 170 2000 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 171 The Epoch of the JAAC Exhibition
Sep. 172 Graphic Wave 2000: Gugi Akiyama / Tycoon Graphics / Hideki Nakajima
Oct. 173 Tztom Toda Exhibition
Nov. 174 Pierre Bernard Exhibition
Dec. 175 The Book & The Computer Exhibition

**2001**

Jan. 176 2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb. 177 Italo Lupi Exhibition
Mar. 178 Shin Matsunaga Exhibition
Apr. 179 Tokyo Type Directors Club 2001
May 180 Kontrapunkt Exhibition
Jun. 181 Typography of Hiromu Hara Exhibition
Jul. 182 2001 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 183 Tadahito Nadamoto Exhibition
Sep. 184 Graphic Wave 2001: Katsuhiko Shibuya / Kazufumi Nagai / Kozue Hibino
Oct. 185 Hangul Poster Exhibition
Nov. 186 Makoto Saito Exhibition
Dec. 187 Chip Kidd Exhibition

**2002**

Jan. 188 Uwe Loesch Exhibition
Feb. 189 Akira Uno Exhibition
Mar. 190 Design Education: Post-St.Joost's New Method
Apr. 191 Tokyo Type Directors Club 2002
May 192 Draft Exhibition
Jun. 193 Alan Chan Exhibition
Jun. Special: Yasuji Hanamori and Kurashi-no-Techo Exhibition
Jul. 194 2002 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 195 Noriyuki Tanaka Exhibition

# 1992-2010

Sep. 196 Graphic Wave 2002:Hitomi Sago / Yasuhiro Sawada / Norito Shinmura
Oct. 197 Sun-ad:The People Exhibition
Nov. 198 Graphic Shows Brazil Exhibition
Dec. 199 Herb Lubalin Exhibition

**2003**

Jan. 200 Ikko Tanaka Exhibition
Feb. 201 Sadik Karamustafa Exhibition
Mar. 202 Contemporary Chinese Graphic Design Exhibition
Apr. 203 Tokyo Type Directors Club 2003
May 204 Fabrica 1994-03 Exhibition
Jun. 205 Hajime Sorayama Exhibition
Jul. 206 2003 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 207 Minoru Niijima Exhibition
Sep. 208 Graphic Wave 2003:Kenjiro Sano / Nagi Noda / Kazunari Hattori
Oct. 209 Takayuki Soeda Exhibition
Nov. 210 Stefan Sagmeister Exhibition
Dec. 211 Takashi Kono Exhibition

**2004**

Jan. 212 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Feb. 213 Keiji Ito / Hiroki Taniguchi / Hiro Sugiyama Exhibition
Mar. 214 The Magazine Design Studio Cap Exhibition
Apr. 215 Tokyo Type Directors Club 2004
May 216 Taku Satoh Exhibition
Jun. 217 Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
Jul. 218 2004 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 219 The Work of Barnbrook Design Exhibition
Sep. 220 Graphic Wave 2004: Aoshi Kudo / Graph / Namaiki
Oct. 221 A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
Nov. 222 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Dec. 223 Another Side of Ayao Yamana Exhibition

**2005**

Jan. 224 The Seven Faces of Asaba Exhibition
Feb. 225 Balarinji Design Exhibition
Mar. 226 Katsunori Aoki XX Exhibition
Apr. 227 Tokyo Type Directors Club 2005
May 228 The Graphic Design of Makoto Wada
Jun. 229 Chermayeff & Geismar Inc. Exhibition
Jul. 230 2005 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 231 Masahiko Sato Laboratory Exhibition
Sep. 232 Graphic Wave 2005: Ichiro Tanida / Ichiro Higashiizumi / Chie Morimoto
Oct. 233 Laboratoires CCCP Exhibition
Nov. 234 Shin Sobue + Cozfish Exhibition
Dec. 235 Swiss Poster Art Exhibition

**2006**

Jan. 236 Yusaku Kamekura 1915-1997 Exhibition
Feb. 237 Nagi Noda Exhibition
Mar. 238 Cyan Exhibition
Apr. 239 Tokyo Type Directors Club 2006
May 240 Kazufumi Nagai Exhibition
Jun. 241 Keiichi Tanaami-ism Exhibition
Jul. 242 2006 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 243 Alexander Gelman Exhibition
Sep. 244 Graphic Wave 2006: Masayoshi Kodaira/Naomi Hirabayashi/ Manabu Mizuno/Eiji Yamada
Sep. Special: AGI Congress 2006 in Japan, Kakejiku Exhibition
Oct. 245 Radical Advertisement Exhibition
Nov. 246 Hideki Nakajima Exhibition
Dec. 247 Yoshio Hayakawa Exhibition

**2007**

Jan. 248 Exhibitions (Part Ⅰ)
Feb. Exhibitions (Part Ⅱ)
Mar. 249 Katsu Kimura: Toi Boxes
Apr. 250 Tokyo Type Directors Club 2007
May 251 Helmut Schmid: Design is Attitude
Jun. 252 Masaaki Hiromura: 2D 3D
Jul. 253 2007 Tokyo Art Directors Club
Aug. 254 The Warsaw Wind 1966-2006
Sep. 255 Ginza Salone: Kenjiro Sano
Oct. 256 Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
Nov. 257 Welcome to Magazine Pool
Dec. 258 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show

**2008**

Jan. 259 Toda Today: Poster Art by Seiju Toda
Feb. 260 Testimonies from Twenty Pioneers of the Graphic Design Era: Interviews by Hiroshi Kashiwagi
Mar. 261 Textasy:Brody Neuenschwander
Apr. 262 Tokyo Type Directors Club 2008
May 263 Alan Fletcher:The Father of British Graphic Design
Jun. 264 Hiroshi Sasaki, Leader of a Cheering Squad for the Japanese Advertising World
Jul. 265 2008 Tokyo Art Directors Club
Ayg. 266 Now Updating… The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
Sep. 267 The Design Cycle of Keiko Hirano: Origin, Terminus, Origin
Oct. 268 White:Kenya Hara Exhibition
Nov. 269 M/M(Paris) The Theatre Posters
Dec. 270 OYKOT Wieden + Kennedy Tokyo: 10 Years of Fusion

**2009**

Jan. 271 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Feb. 272 Helvetica forever:Story of a typeface
Mar. 273 DRAFT:Branding and Art Directors
Apr. 274 Tokyo Type Directors Club 2009
May 275 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works
Jun. 276 Max Huber - a Graphic Designer
Jul. 277 2009 Tokyo Art Directors Club
Aug. 278 Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer
Sep. 279 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show
Oct. 280 Toshio Yamagata Exhibition
Nov. 281 Issay Kitagawa
Dec. 282 Kokoku Hihyo: End of One Era, Start of Another

**2010**

Jan.-Feb. 283 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ Ikko Tanaka Posters 1953-1979
Mar. 284 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ Shigeo Fukuda's Visual Jumping

**1992**

Jan. 1 Trans-Art '91 Exhibition
Mar. 2 Ivan Chermayeff Exhibition
Apr. 3 The 4th Tokyo TDC Exhibition
May 4 Rick Valicenti Exhibition
Jun. 5 Seymour Chwast Exhibition
Jul. 6 Design Print & Paper Exhibition
Aug. 7 Vaughan Oliver Exhibition
Oct. 8 Makoto Nakamura Exhibition
Oct. 9 Michael Mabry Exhibition
Nov. 10 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition

**1993**

Jan. 11 Furoshiki Exhibition
Feb. 12 Why Not Associates Exhibition
Mar. 13 Allen Hori + Robert Nakata Exhibition
Apr. 14 '92 Tokyo ADC Exhibition
May 15 Russell Warren-Fisher Exhibition
Jun. 16 The 5th Tokyo TDC Exhibition
Jul. 17 Imagination of Letters Exhibition
Aug. 18 Design, Prints, Paper Exhibition Part Ⅱ
Sep. 19 Bill Thorburn Exhibition
Oct. 20 U.G. Sato Exhibition
Nov. 21 Mitsuo Katsui Exhibition
Dec. 22 8 Designers in Today's Hong Kong

**1994**

Jan. 23 Saul Bass Exhibition
Feb. 24 Pop-up Greetings Exhibition
Mar. 25 Ruedi Baur/Integral Concept Exhibition
Apr. 26 Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
May 27 Jennifer Morla Exhibition
Jun. 28 Kazumasa Nagai Exhibition
Jul. 29 Uwe Loesch Exhibition
Aug. 30 '94 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 31 Design, Print, Paper Exhibition Part Ⅲ
Oct. 32 David Carson + Gary Koepke Exhibition
Dec. 33 Yusaku Kamekura Exhibition

**1995**

Jan. 34 German Montalvo Exhibition
Feb. 35 Bruno Munari Exhibition
Mar. 36 Grappa Design Exhibition
Apr. 37 The 7th Tokyo TDC Exhibition
May 38 Michel Bouvet Exhibition
Jun. 39 Ikko Tanaka Exhibition
Jul. 40 Terrelonge Exhibition
Aug. 41 '95 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 42 Design, Print, Paper Exhibition Ⅳ
Oct. 43 Peret Torrent Exhibition
Nov. 44 6 Designers in Asia Exhibition

**1996**

Jan. 45 Illustration in Japan 1946-1995 Exhibition
Feb. 46 Margo Chase Exhibition
Mar. 47 Werner Jeker Exhibition
Apr. 48 Gunter Rambow Exhibition
May 49 The 8th Tokyo TDC Exhibition
Jun. 50 Kari Piippo Exhibition
Jul. 51 Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Aug. 52 '96 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 53 John Maeda Paper and Computers Exhibition
Oct. 54 Alain Le Quernec Exhibition
Nov. 55 Woody Pirtle Exhibition

**1997**

Jan. 56 João Machado Exhibition
Feb. 57 K2 Osaka Exhibition
Mar. 58 Graphic Design in China Exhibition
Apr. 59 '97 Tokyo TDC Exhibition
May 60 Mexican 10 Graphic Designers
Jun. 61 Cato Design Inc. Exhibition
Jul. 62 '97 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 63 Ralph Schraivogel Exhibition
Oct. 64 James Victore Exhibition
Nov. 65 Global Exhibition

**1998**

Jan. 66 Faydherbe/De Vringer Exhibition
Feb. 67 Jean-BenoÎt Lévy Exhibition
Mar. 68 3 Dimensions of Russian Graphic Design Exhibition
Apr. 69 Philippe Apeloig Exhibition
Jun. 70 Tokyo TDC '98 Exhibition
Jul. 71 Studio Dumbar Exhibition
Aug. 72 '98 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 73 Zafryki Exhibition
Oct. 74 David Tartakover Exhibition
Nov. 75 Taiwan 4 Exhibition

**1999**

Jan. 76 Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World Exhibition
Feb. 77 Pierre Neumann Exhibition
Mar. 78 Paula Scher Exhibition
May 79 Graphic Design from Hamburg Exhibition
Jun. 80 Tokyo TDC '99 Exhibition
Jul. 81 Jan Rajlich Jr.Exhibition
Aug. 82 '99 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 83 Scott Makela Exhibition
Oct. 84 Chaz Maviyane-Davies Exhibition
Nov. 85 2 Men from Macau Exhibition Ung Vai Meng / Victor Hugo Marreiros

**2000**

Jan. 86 Graphic Message for Ecology Exhibition
Feb. 87 Keizo Matsui Exhibition
Mar. 88 Paul Davis Posters Exhibition
Apr. 89 Osaka Pop Exhibition
May 90 Tokyo Type Directors Club 2000
Jun. 91 Anthon Beeke Posters Exhibition
Jul. 92 Pierre Bernard Exhibition
Sep. 93 2000 Tokyo ADC Exhibition
Oct. 94 Italo Lupi Exhibition
Nov. 95 Design Education: The Classroom Approach of Holger Matthies, Berlin University of the Arts

**2001**

Jan. 96 2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb. 97 Kontrapunkt Exhibition
Mar. 98 Poster of Salzburg Festival Exhibition
May 99 Tokyo Type Directors Club 2001
Jun. 100 Chip Kidd Exhibition
Jul. 101 Hangul Poster Exhibition
Aug. 102 2001 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 103 Wolfgang Weingart Exhibition
Oct. 104 Shin Matsunaga Exhibition
Nov. 105 Design Education Ⅱ: Post-St.Joost's New Method

CCGA

# 1995-2009

**2002**

Jan. 106 Tadahito Nadamoto Exhibition
Feb. 107 Makoto Saito Exhibition
Mar. 108 Ott + Stein Exhibition
Apr. 109 Studio Tapiro Exhibition
May 110 Tokyo Type Directors Club 2002
Jul. 111 Posters from the Vienna Municipal Library Archive Exhibition
Jul. 112 Ken Miki Exhibition
Sep. 113 2002 Tokyo ADC Exhibition
Oct. 114 Sadik Karamustafa Exhibition
Nov. 115 Chinese Graphic Design Exhibition

**2003**

Jan. 116 San-ad :The People Exhibitionn
Feb. 117 Ikko Tanaka Exhibition
Mar. 118 Fabrica 1994-03 Exhibition
Apr. 119 Kan Tai-Keung and Freeman Lau Exhibition
Jun. 120 Tokyo Type Directors Club 2003
Jul. 121 Luba Lukova Exhibition
Aug. 122 2003 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 123 Stefan Sagmeister Exhibition
Oct. 124 Cultural Posters from the Collection of Die Neue Sammulung München Exhibition
Nov. 125 Hajime Sorayama Exhibition

**2004**

Jan. 126 Takayuki Soeda Exhibition
Feb. 127 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Mar. 128 Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
Apr. 129 The Magazine Design Studio CAP Exhibition
May 130 Tokyo Type Directors Club 2004
Jun. 131 Pierre Mendell Exhibition
Aug. 132 2004 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 133 The Work of Barnbrook Design Exhibition
Oct. 134 Posters from the Museum of Decorative Arts in Prague Exhibition
Nov. 135 Balarinji Design Exhibition

**2005**

Jun. 136 A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
Feb. 137 Cyan Exhibition 13 Years in Berlin
Mar. 138 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Apr. 139 Mevis & Van Deursen Exhibition
May 140 Tokyo Type Directors Club 2005
Jun. 141 Laboratoires CCCP Exhibition
Aug. 142 2005 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 143 Katsunori Aoki XX Exhibition
Oct. 144 German AGI Graphic Design Exhibition
Nov. 145 The Graphic Design of Makoto Wada

**2006**

Jan. 146 Swiss Poster Art Exhibition
Feb. 147 Graphic Thought Facility Exhibition
Mar. 148 Nagi Noda Exhibition
Apr. 149 Bruno Oldani Exhibition
May 150 Tokyo Type Directors Club 2006
Jun. 151 Black and White Posters Exhibition
Aug. 152 2006 Tokyo ADC Exhibition

**2007**

May 153 Exhibitions
Jun. 154 Tokyo Type Directors Club 2007
Aug. 155 Helmut Schmid: Design is Attitude
Oct. 156 2007 Tokyo Art Directors Club
Nov. 157 Katsu Kimura: Toi Boxes

**2008**

Jan. 158 Welcome to Magazine Pool
Feb. 159 Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano
Apr. 160 Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
Jun. 161 Tokyo Type Directors Club 2008
Aug. 162 Now Updating… The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
Sep. 163 2008 Tokyo Art Directors Club
Oct. 164 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show
Nov. 165 Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi

**2009**

Jan. 166 Helvetica forever: Story of a Typeface
Mar. 167 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Apr. 168 Draft: Branding and Art Directors
Jun. 169 Tokyo Type Directors Club 2009
Aug. 170 2009 Tokyo Art Directors Club
Oct. 171 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works

**2010**

Jan. 172 Graphic West 2: Sensory Boxes

**1995**

Apr.-Jul. Graphic Vision Kenneth Tyler Retrospective Exhibition: Thirty Years of Contemporary American Prints
Aug.-Oct. Lichtenstein: Entablature→Nudes
Nov.-Jan. The Prints of Robert Motherwell

**1996**

Mar.-Apr. American Prints Today: 1st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Apr.-Jul. The Prints of David Hockney
Jul.-Oct. Autonomous Color: Josef Albers
Oct.-Jan. Transcending Style: 2nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**1997**

Mar.-Apr. The Graphics of James Rosenquist
Jun.-Sep. Printed Abstraction: 3rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Oct.-Nov. Shinro Ohtake: Printing / Painting
Dec.-Jan. Line-Color-Image: 4th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**1998**

Mar.-May Frank Stella and Kenneth Tyler: A Unique 30-Year Collaboration
May-Sep. Statements in Black: 5th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Alan Shields: Images in Paper

**1999**

Mar.-May Miran Fukuda New Works: Prints
Jun.-Sep. Forms That Speak: 6th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. The Story of Prints

**2000**

Mar.-May New Works 1998-1999: 7th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
May-Jul. Saburo Ota: Existence and Everyday
Aug.-Oct. DNP Archives of Graphic Design Inaugural Exhibition: Poster Graphics 1950-2000

**2001**

Mar.-May Invitation to Print Portfolios: 8th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
May-Jul. Tatsumi Orimoto:1972-2000
Aug.-Oct. Yukio Fujimoto: Reading to Another Dimension 2nd Exhibition of DNP Archives of
Oct.-Dec. Graphic Design: The Era of Graphic Design

**2002**

Mar.-Jun. Prints Leaping Into Space: 9th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Kijuro Yahagi: Touching, Piercing, and Tracing with Vision
Sep.-Dec. 3rd Exhibition of DNP Archives of Graphic Design: The Age of Individ-uality

**2003**

Mar.-Apr. Richard Gorman: Paintings and Paper Works
Apr.-Jun. Paper as Color: 10th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Frankenthaler: The Woodcuts
Sep.-Dec. 11th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**2004**

Mar.-Jun. The Golden Age of Illustration
Jun.-Sep. Password: A Danish / Japanese Dialogue
Sep.-Dec. Print Art of Today in Fukushima

**2005**

Mar.-Jun. The World of Contemporary American Woodcuts: 12th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Breathing Light: Shigenobu Yoshida
Sep.-Dec. decade – CCGA and Six artists

**2006**

Mar.-Jun. Painting on Stone: 13th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Masaki Fujihata: The Conquest of Imperfection- New Realities Created with Images and Media
Sep.-Dec. Tetsuya Noda: Diary

**2007**

Mar.-Jun. The Wonder of Intaglio: 14th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Prints Given New Life: 15th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Unique Impressions: 16th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**2008**

Mar.-Jun. Thick with Color: 17th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Big Prints, Small Prints: 18th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Nov. Monologues in Black: 19th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

**2009**

Feb.-Jun. Prints and Titles: 20th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Sep.-Dec. The Power of Red: 21st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

## ギンザ・グラフィック・ギャラリー

開　設　1986年3月4日
名　称　ギンザ・グラフィック・ギャラリー（略称／ggg）
所在地　〒104-0061
東京都中央区銀座7丁目7番2号 DNP銀座ビル
Phone：03-3571-5206
Fax：03-3289-1389
開館時間　午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）
休　館　日曜日、祝日
監　修　永井一正

## ddd ギャラリー

開　設　1991年11月5日
名　称　dddギャラリー
所在地　〒550-8508
大阪府大阪市西区南堀江1丁目17－28 なんばSSビル
Phone：06-6110-4635
Fax：06-6110-4639
開館時間　午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）
休　館　日曜日、月曜日、祝日
監　修　永井一正

## CCGA 現代グラフィックアートセンター

開　設　1995年4月20日
名　称　CCGA現代グラフィックアートセンター
所在地　〒962-0711
福島県須賀川市塩田宮田1
Phone：0248-79-4811
Fax：0248-79-4816
開館時間　午前10時～午後5時（入館は午後4時45分まで）
休　館　月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）、
祝日の翌日（土・日にあたる場合は開館）、
展示替え期間中、冬期（12月下旬～2月末）
入館料　一般＝300円、学生＝200円、
小学生以下と65歳以上および障がい者手帳をお持ちの方は無料、
特別展示によっては特別料金を適用する場合もあります。
サロン利用料　200円

企画・運営　財団法人DNP文化振興財団
http://www.dnp.co.jp/foundation

## ginza graphic gallery

Establishment: March 4, 1986
Name: ginza graphic gallery (ggg)
Location: DNP Ginza Building, 7-2 Ginza 7-chome,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 3571 5206
Fax: +81 3 3289 1389
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

## ddd gallery

Establishment: November 5, 1991
Name: ddd gallery
Location: Namba SS Building, 17-28 Minami-horie 1-chome,
Nishi-ku, Osaka 550-8508
Phone: +81 6 6110 4635
Fax: +81 6 6110 4639
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays, Mondays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

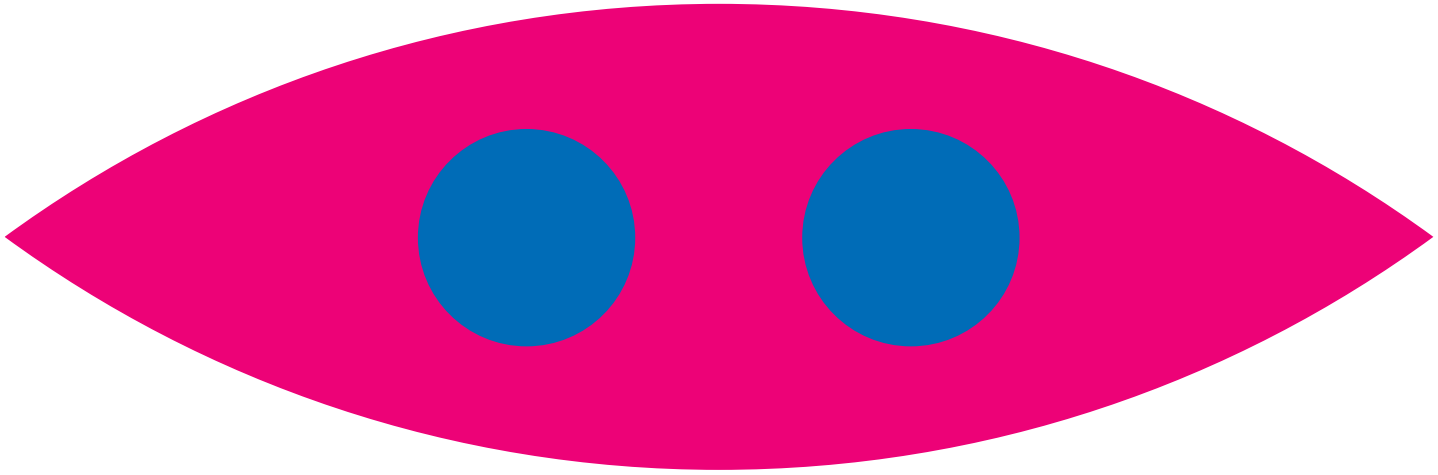
## Center for Contemporary Graphic Art

Establishment: April 20, 1995
Name: Center for Contemporary Graphic Art (CCGA)
Location: Miyata 1, Shiota, Sukagawa-shi,
Fukushima 962-0711
Phone: +81 248 79 4811
Fax: +81 248 79 4816
Opening Hours: 10:00am to 5:00pm (Admission until 4:45pm)
Closed on Mondays (Tuesday if Monday is a public holiday),
the day immediately after a public holiday (except Saturday and Sunday),
between exhibitions and during winter (late December through February)
Admission: Adults=¥300, Students=¥200,
Free for young children (through elementary school), senior citizens (65 and over) and the disabled.
Special admission charges may be imposed during special exhibitions.
Salon Utilization Fee: ¥200

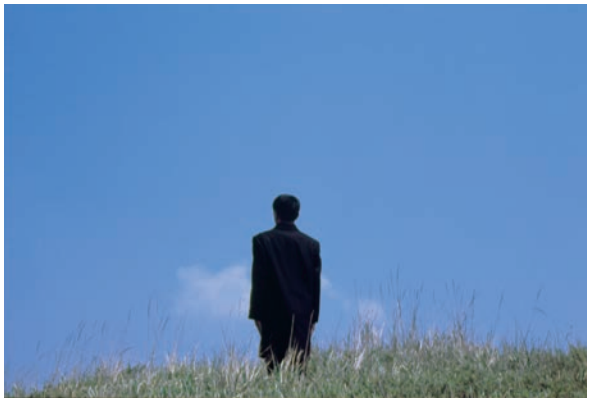
Planning and Operation: DNP Foundation for Cultural Promotion
http://www.dnp.co.jp/foundation

**Graphic Art & Design Annual 09-10**
**ggg ddd CCGA**

| | |
|---|---|
| 発行 | 財団法人DNP文化振興財団<br>〒104-0061<br>東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル<br>Phone: 03-5568-8224 |
| 企画・編集 | ギンザ・グラフィック・ギャラリー |
| アートディレクション | 松永 真 |
| デザイン | 松永 真次郎、清川 萌未 |
| 撮影 | 藤塚 光政（ggg会場写真）<br>堺 亮太（ギャラリートーク） |
| 翻訳 | 室生寺 玲、オフィス宮崎 |
| 協力 | 臼田 捷治、河尻 亨一 |
| 印刷・製本 | 大日本印刷株式会社 |



*Design & Photo by Gan Hosoya*
*The Standing Man is Mr. Katsumi Asaba (1967)*
*Design Assistance by Q Asaba*
*Digital Retouching by Tomoyuki Tanigawa*



財団法人 DNP文化振興財団
DNP Foundation for Cultural Promotion